

# 農林事業関係遺跡(1)

—発掘調査報告書—

1983

山形県教育委員会

や　ち　　ち　　跡　　跡  
谷　地　　原　　遺　　跡  
うしろ　　ばら

—発掘調査報告書—

昭和58年3月  
山形県教育委員会

# 序

本報告書は、昭和54年に実施した、県営ほ場整備（井の下地区）並びに広域営農団地農道整備事業（北村山地区）に伴う、谷地・後原遺跡の2遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめたものであります。

発掘調査において、谷地遺跡では縄文時代中期の住居跡をはじめ、多くの土器や石器の遺物が発見され、中でも北陸地方との文化交流の一端を示す資料が、また後原遺跡では、縄文時代早期から後期にかけ、最上川を背景とする生活の内容がうかがい知られ、それぞれ貴重な資料を得ることができました。このことは幾千年のかなたで、厳しい自然と融和一体となりながら、新しい文化を創造する先人の心豊かな、たくましい生活ぶりをしのばれる所であります。

近年、埋蔵文化財と農林事業とのかかわりは、増加の傾向にあります。本県の産業基盤である農林事業は、県民の生産基盤の整備や福祉の向上を目的とし、豊な県土を目指して親意進められておる所であります。一方、同事業を進めることは、数千年もの間土中に埋もれ続けてきた埋蔵文化財と、直接なかなかわりを持つこととなり、その間には数多くの困難な問題が生じております。

県教育委員会におきましては、生活文化の向上や地域環境の整備など、同じ立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護行政のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、発掘調査にご協力をいただいた関係各機関並びに関係各位に感謝を申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの、理解の一助となれば幸いと存します。

昭和58年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

## 例　　言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部より委託を受け昭和54年度に実施した、県営は場整備事業（井の下地区）並びに広域営農団地農道整備事業（北村山地区）に伴う、小国町谷地遺跡と村山市後原遺跡の2遺跡について、緊急発掘調査の結果をまとめたものである。
- 2 発掘調査期間  
谷地遺跡 昭和54年4月23日～同年7月6日（延49日）  
後原遺跡 昭和54年10月1日～同年11月2日（延24日）
- 3 調査にあたっては、谷地遺跡では小国町教育委員会・県農林水産部耕地第二課・県置賀北部土地改良事務所・井の下土地改良区、並びに後原遺跡では村山市教育委員会・県農林水産部耕地第一課・県村山平野土地改良事務所など、各関係機関や地元の方々の協力を得ました。記して感謝を申し上げます。
- 4 報告書の体裁は、（1）谷地遺跡・（2）後原遺跡として、それぞれ個別に章をもつて内容を記した。
- 5 挿図縮尺は、全体図・遺構図などは1/1000・1/200・1/300・1/20・1/60とし、遺物では土器実測・拓影図1/3・1/4・石器1/2～1/8として、各挿図それぞれスケールを示した。遺物の図版縮尺は、土器1/2～1/4とし、石器では1/2～1/6を原則とした。
- 6 本文および挿図中の記号は、S T—住居跡・E L—炉跡・E P (P)—柱穴・E D—周溝・E U—埋設土器・S K—土壤・S D—溝跡・S M—集石・S X—不明遺構、またF—遺構覆土・Y—床面である。遺物ではR P—土器・土製品・R Q—石器・石製品を示す。住居跡・炉跡・土壤などは全体に一連番を付け、柱穴・周溝は各挿図每一連の数字とした。
- 7 本報告書は、谷地遺跡では佐藤正俊・名和達朗・阿部明彦・長橋至、後原遺跡は名和達朗が担当し、それぞれ執筆した。編集にあたっては渋谷孝雄があたり、佐々木洋治が総括したものである。

# (1) 谷 地 遺 跡

## 調査体制

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）

現場主任 佐藤正俊（山形県教育庁文化課技師）

調査員 佐藤庄一（山形県教育庁文化課技師）

名和達朗（山形県教育庁文化課技師）

安部 実（山形県教育庁文化課嘱託）

調査協力 小国町教育委員会 県置賜北部土地改良事務所 井の下土地改良区

事務局 事務局長 山田信一（山形県教育庁文化課長）

事務局長補佐 萩野和夫（山形県教育庁文化課長補佐）

事務局員 設楽周一朗（山形県教育庁文化課主事）

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	5
2 調査の経過	5
II 遺跡の概観	
1 立地と環境	7
2 調査の方法	8
3 遺跡の概要	8
III 遺構と遺物	
1 遺構	12
2 土器	25
3 石器	41
IV まとめ	51

## 挿図目次

第1図 遺跡位置・分布図	7
第2図 遺跡全体図	9
第3図 遺構配置図（1）	10
第4図 遺構配置図（2）	11
第5図 B地区遺構平面図	13
第6図 C地区遺構平面図	19
第7図 D地区遺構平面図	23
第8図 土器拓影図（1）	28
第9図 土器拓影図（2）	29
第10図 土器拓影図（3）	30
第11図 土器拓影図（4）	31
第12図 土器拓影図（5）	32
第13図 土器拓影図（6）	33

第14図 土器拓影図（7）	34
第15図 土器拓影図（8）・土器実測図（1）	35
第16図 土器実測図（2）	36
第17図 石器実測図（1）	42
第18図 石器実測図（2）	43
第19図 石器実測図（3）	46
第20図 石器実測図（4）	47
第21図 石器実測図（5）	48
第22図 石器実測図（6）	49

## 図版目次

図版1 遺跡遠景（西から） 遺跡近景（南から） 遺跡近景（東から）	53
図版2 C地区土層セクション（1）・（2） 面整理作業	54
図版3 A地区構造確認状況（1）・（2） B地区調査風景	55
図版4 S T81・86・S K85・95・96全景 S T88・94・98全景 S T89全景他	56
図版5 S K83全景 R P18・31～33出土状況（1）・（2）	57
図版6 C地区調査風景 S K1・2全景 S T10・12全景	58
図版7 D地区調査風景 D地区全景 S M215・216全景	59
図版8 出土土器（1）	60
図版9 出土土器（2）	61
図版10 出土土器（3）	62
図版11 出土土器（4）	63
図版12 出土土器（5）	64
図版13 出土土器（6）	65
図版14 出土石器（1）	66
図版15 出土石器（2）	67
図版16 出土石器（3）	68

# 付表目次

表-1	周辺の遺跡群	4
表-2	谷地遺跡発掘調査行程一覧	6
表-3	包含層内出土土器点数	26
表-4	遺構出土土器点数	26
表-5	遺構内における土器類別組成	26
表-6	土器分類基準	27
表-7	土器観察一覧（包含層）	37
表-8	土器観察一覧（遺構）	38

表-1 周辺の遺跡群（第1図）

番号	遺跡名	遺跡番号	所 在 地	立地(標高)	時 期 (他)
1	畔	1386	小国町大字字畔	段丘(142m)	旧石器時代・縄文時代・平安時代
2	湯の花	1378	大字湯の花	段丘(165m)	旧石器時代・縄文時代(S 48年調査)
3	島 谷 沢	1388	大字大吉字島谷沢	段丘(150m)	旧石器時代・縄文時代
4	高 堀 塚 A	1377	大字西字高堀塚	段丘(140m)	縄文時代
5	館 分 新 規		大字増岡字館分他	段丘(136m)	縄文時代
6	大 下	1380	大字増岡字大下他	段丘(138m)	縄文時代(中期)
7	下 野	1381	大字増岡字下野	段丘(131m)	縄文時代(中期)(S 55年調査)
8	田 子 山	1383	大字増岡字田子山	段丘(136m)	縄文時代(早・中・後期)(S 55年調査)
9	才 須	1382	大字増岡字才須	段丘(130m)	縄文時代(前・中期)
10	墓 疽 新 規		大字増岡字墓糺	段丘(136m)	縄文時代(前・中期)(S 56年調査)
11	社 又	1384	大字増岡字笠又	段丘(158m)	縄文時代
12	號 田 B	1394	大字若山字號田	段丘(144m)	縄文時代(中期)
13	館	1396	大字若山字館	段丘(145m)	縄文時代
14	女 子 四 平	1396	大字若山字好雅	段丘(146m)	旧石器時代・縄文時代(前・中期)
15	蟹 泉 沢	1389	大字舟渡字蟹沢	段丘(145m)	縄文時代(中・後期)(S 54年調査)
16	舟 渡 堂 の 前	1390	大字舟渡字堂の前	段丘(148m)	縄文時代(中・後・晚期)

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

小国町の増岡地内は、小国盆地の中でも有数の米作地帯であり、一方、埋蔵文化財もまた多く包蔵する地域でもあり、旧石器時代から縄文時代にかけての集落跡などが点在しており、遺物もたやすく採集されている。

これらの地域が、昭和54年から井の下地区の県営は場整備事業として実施することになり、県教育委員会は小国町教育委員会と共に、県農林水産部耕地第二課・置賜北部土地改良事務所・井の下土地改良区などの関係各機関と、埋蔵文化財の保護対策について協議を重ねたものである。その結果遺跡は、できるだけ現状のまま残すことを基本として、やむを得ず破壊されるものについては、記録保存による緊急発掘調査を実施することにしたものである。

今回の谷地遺跡の発掘調査は、この地区が昭和54年度には場整備事業に係るため、昭和53年10月に遺跡詳細分布調査を行なった。その結果、事業の工法状の問題で、遺跡の現状保存が困難であるため、関係各機関と協議を進めて昭和54年に緊急発掘調査を実施したものである。なお、遺跡の北東側A地区（第2図）については、工法状表土取りあつかいとなるため、表土が一部削平される程度で、現状のまま保存されることになった。

これまでこの地区で緊急発掘調査が実施された遺跡は、昭和54年には蟹沢遺跡・才頭遺跡、昭和55年は下野遺跡・<sup>ひしわ</sup>団子山遺跡、昭和56年は墓窪遺跡などであり、県教育委員会や小国町教育委員会が主体となって、県農林水産部の委託を受けて、緊急発掘調査を進めてきた。その結果これらの遺跡が、縄文時代中期から後期にかけての集落跡であることが明らかになり、数々の貴重な資料が提供された。

## 2 調査の経過

今回の発掘調査は、昭和54年4月23日（月）から7月6日（金）まで延49日間に亘って、は場整備事業区域に限って実施し、私有地に伴う宅地や畠地についてはは場整備事業の地区外となっている。調査経過の概要は、第一段階から第四段階に分けて順次進め、第一段階では遺跡の概要を知るために粗掘作業を中心にして精査区域の確認を行なう。第二段階は重機を使用して精査区域を拡張し、面整理作業による遺構を確認する。第三・四段階は実際の遺構などの精査・検出を行い、記録によって保存するものである。作業経過の詳細については、発掘調査行程表（表-2）参照のこと。

表-2 谷地遺跡発掘調査行程一覧

調査内容		月・日	4月	5月	6月	7月
年	実行事項	23~27日	7~11日	14~18日	22~25日	25~29日
実	実行事項	（アリヤド記念）				2~6日 (潜伏確認) —
施	組織作業			（精査区域の確認） （精査区域の記入）		
設	直機使用					
出	遺構確認・検出					
電	A地区遺構				（ST301~110号平面断面記述）	
械	B地区遺構				（ST8~85、90~92、SK83~85地）	
C地区遺構					（ST10~12、SK1~2、15~17地）	
D地区遺構				（ST4~SK213~264A地） （埋設土器、粘土層及石器）	（SM215~216~264地）	
主	主要遺物身上	（石器）	（石器）	（土器、石器）		
立	遺方設定				（A~B地区） （C地区） （D地区）	
実	水平面				（A~B地区） （C地区） （D地区）	
測	土質分析面				（D地区）	
レ	レベル測定				（道跡全体）	
写	全休写真			（主要遺物記録） （主要遺物記録） （主要遺物記録）	（主要遺物記録） （主要遺物記録） （主要遺物記録）	
真	高細部写真			（各遺構全貌、解剖、遺物出土状況）	（A~D地区遺構確認状況）	
理	遺物洗浄・注記		（洗浄）	（洗浄）	（洗浄・注記）	（洗浄・注記）
備	日程確認	実施開始 → (第一回) → (第二回)			6/18~6/22 調査 資料 収集 会議	6/26 現(二〇名春田 会議)
考						実施確認 会議

## II 遺跡の概観

### 1 立地と環境

谷地遺跡は、山形県の西南部、新潟県と接する山間の小国盆地にある。この盆地は、飯豊・朝日の両山地にはさまれて南北に開けた盆地である。中央部の谷底平野は北方の朝日岳から南流する荒川と、飯豊山から発して西流する横川によって、5つの地形面をもつ河岸段丘から形成されている。洪積段丘の平林・横道面、沖積段丘の小国・八木沢面と沖積低地となっている。洪積中位段丘の平林面には、東山遺跡・平林遺跡があり、洪積低位段丘の横道面には、横道遺跡・鳥谷沢遺跡・岩井沢遺跡などの旧石器時代を中心とする遺跡が分布している。沖積段丘には本遺跡をはじめとして、下野遺跡・墓塚遺跡・团子山遺跡・蟹沢遺跡など縄文時代の前期から後期にかけての遺跡が多く分布している。(表-1・第1図)

本遺跡は、小国町大字増岡字谷地他に所在し、荒川の左岸に位置し、標高136m前後を計る。遺跡は、沖積上位段丘の小国面中央部に立地している。全体的に東方から西方にかけて傾斜しており、遺跡は若干微高地状となっている。地目は、水田・畠地・宅地となっている。南西・南東側の背後地には、2ヶ所の湧水地が認められる。



第1図 遺跡位置・分布図

## 2 調査の方法

今回の緊急発掘調査は、谷地遺跡の中央地区から南側地区にあたるほ場整備事業区域の東西120m・南北70mで、発掘対象面積が約8,400m<sup>2</sup>について実施し、とくに遺構や遺物が密集する区域（精査区域）を重点に発掘調査を進め、遺跡北東付近からA地区、遺跡の南側をそれぞれB・C・D地区とした。精査面積は、A地区 1100m<sup>2</sup>・B地区200m<sup>2</sup>・C地区140m<sup>2</sup>・D地区 600m<sup>2</sup>であり、A～D地区を合せて 2040m<sup>2</sup>の精査面積を調査したものである。（第2図）

発掘調査は、事業区域内全体にグリッドを設定し、グリッドの基線をほ場整備実施杭に基点を設けて20×50グリッドとして、グリッド基線のY軸方向はN-27°-Eを計り、2×2mを一単位とするグリッドを設定する。遺跡の西端中央よりから2×8mあるいは2×10mのトレンチを併用して、遺跡の東側・南側に向けて粗掘作業を開始し、遺跡の北東側地区と南側地区に大きく拡張し、精査区域A～D地区を設定し調査を実施した。（第2図）

## 3 遺跡の概要

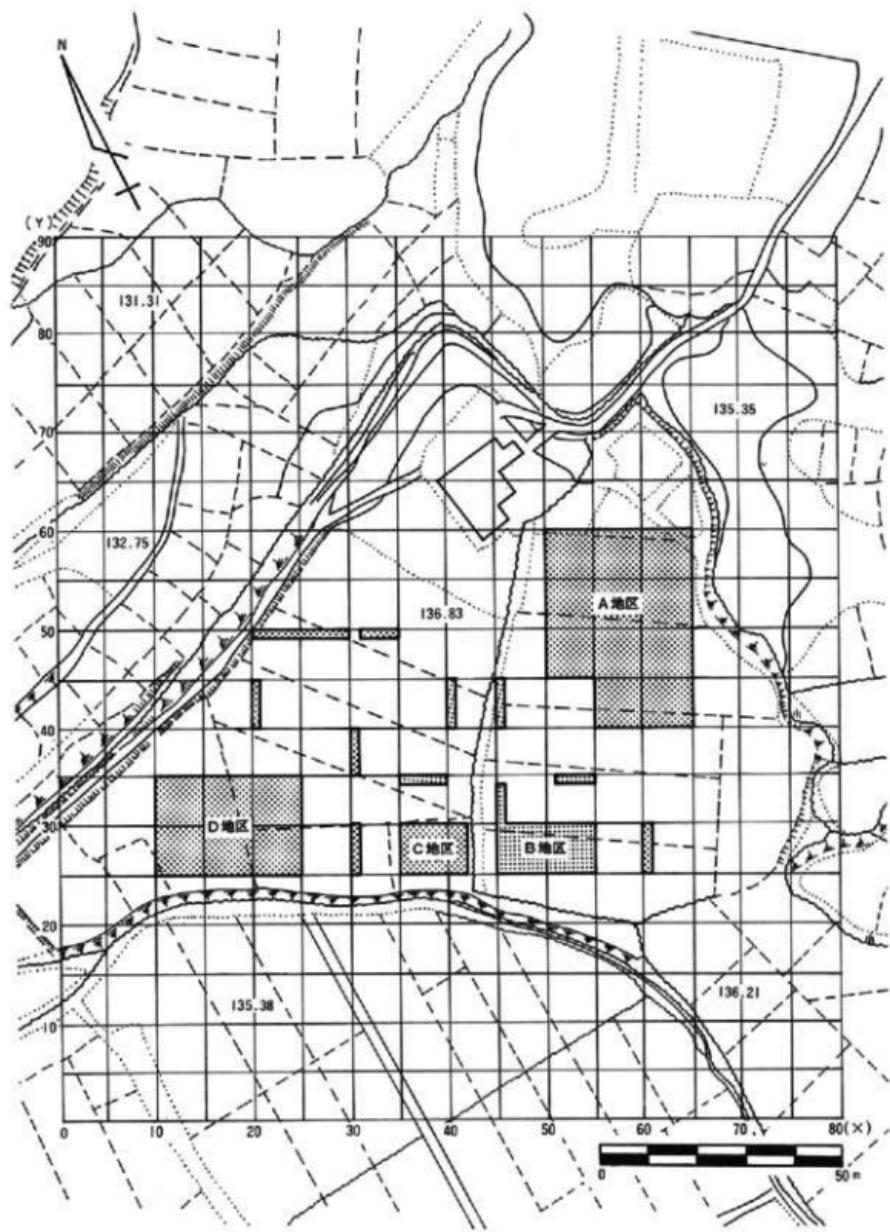
### （1）遺跡の層序

本遺跡は、横川によって開析された沖積河段丘に立地し、現地形は全体として南側から北側にかけて若干傾斜しており、遺跡の東・南方では1~1.5mの差で低位面となり、西方は小段丘崖となっている。また旧地形は、遺跡の中央部では南北に走るように鞍部となり緩傾斜地になる。基本的な遺跡の層序は、5層に分けられる。第I層暗褐色土（耕作土・13~15cm）、第II層暗褐色土（粘質土・15~20cm）、第III層黒褐色土（粘質土・14~23cm）、第IV層褐色土（砂質土・17~29cm・漸位層）、第V層黄褐色土（粘質土・地山）である。なお、遺物包含層は第II層下部から第III層にかけて、遺構の確認面は第III層下部から第IV層中にかけてである。

### （2）遺構と遺物

本遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡29（検出12・確認17）・土壙41（検出14・確認27）・集石31・不明ピット128である。時期は、いずれも縄文時代中期中葉である。

遺構の分布状態は、遺跡の東端から西端の地区に密集して分布し重複している。住居跡は、A地区では北側に多く在り、さらに北側に分布するとみられ、B・C地区では地形に沿って半円状に連り、D地区は1軒のみ検出される。土壙は、A地区では住居跡と同様な関係を示し、B・C地区では住居跡の外郭に重複して在り、D地区は西側に分布している。集石遺構は、D地区のみ検出し中央から東側にかけて偏在し、全体として不規則に配置し

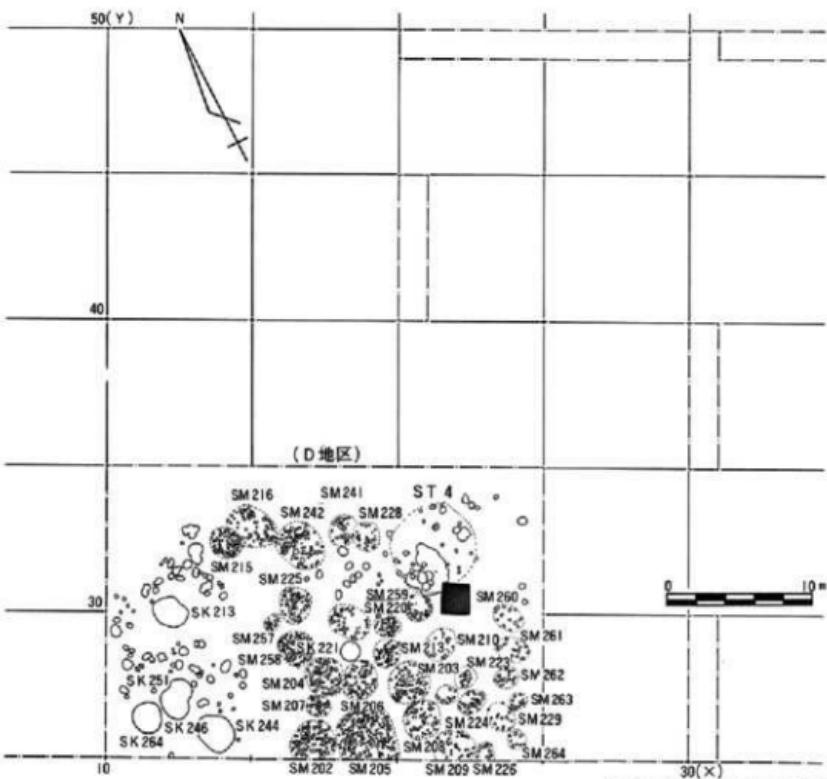


第2図 遺跡全体図

ている。不明のピット群は、A～D地区に認められ中には住居跡を構成する柱穴が含まれると考えられるが、詳細については明確ではない。このように遺構の分布は、遺跡の東端から南端あるいは一部西端にかけて多く密集し、遺跡の中央部には遺構は認められず、空白域となっている。

今回出土した遺物は、整理箱に約74箱を数え、それらは縄文式土器（中期中葉）・石器・石製品などに分けられる。遺物のほとんどは第II・III層の遺物包含層と住居跡や土壤覆土内から出土している。

遺物の出土状況は、包含層ではA地区北側・B・C地区の中央部・D地区北東側で最も多く出土し、遺跡の中央部から北側にかけて遺物の出土が希薄になり、遺構の分布状態とはほぼ一致している。遺構内では、全体の遺物量の大半を占め住居跡や土壤の覆土内より発見した状態で出土したり、とくに81・86・88～90・94・98号住居跡・1・83・95号土壤では顕著に認められる。

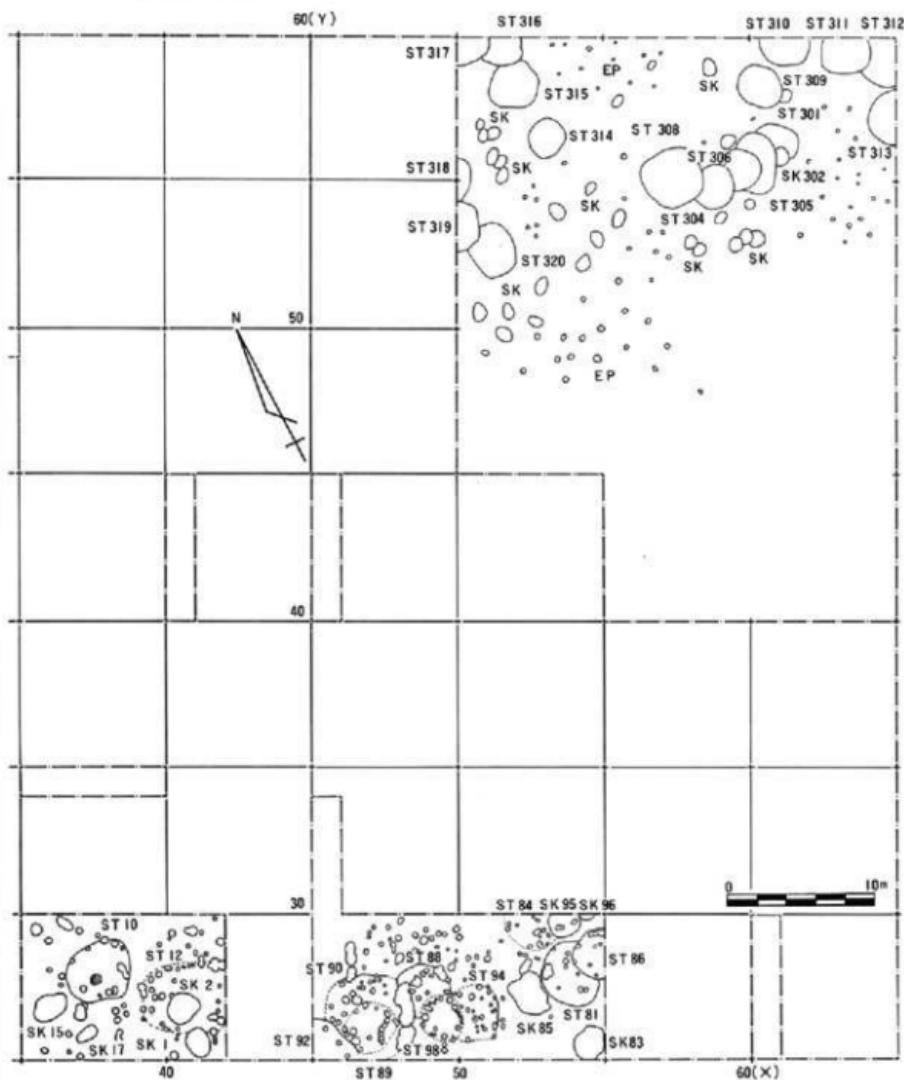


第3図 遺構配置図(1)

## 〈凡例〉

ST：住居跡  
SK：土壙  
SM：集石遺構

(なお遺構番号は住居跡・土塁などを含めて一連番号である。)



#### 第4図 遺構配置図(2)

## II 遺構と遺物

### 1 遺構

#### A地区遺構（第4図 図版3）

遺跡の北東側中部に位置して、住居跡・土壙・ピット群は51～65・48～60グリッド内にあり、平面形を確認したのみで実際に遺構は検出していない。なお、この地区は場整備事業の工法状表土取りあつかいとなるため、平面形を確認したのみで、住居跡などは現状保存となったものである。遺存状態は、他のB・C・D地区よりも第I層耕作土がやや厚く堆積し、遺構の遺存状態も良い。確認面は、第III層中位より確認され、明確に平面形が検出される。

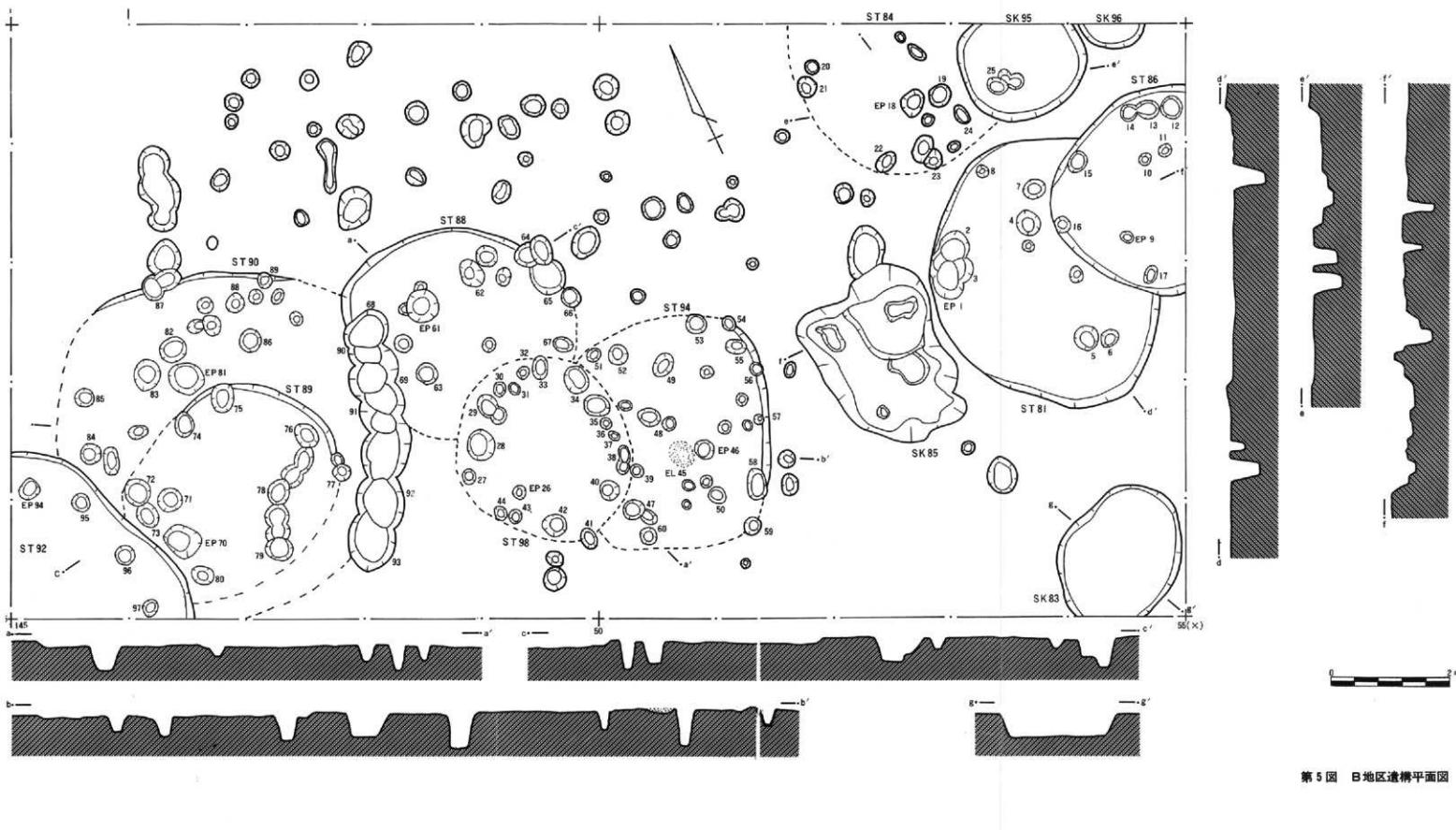
住居跡は、重複している関係から大きく4グループに分けられ、308号住居跡・311号住居跡・316号住居跡・318号住居跡などそれぞれ中心とするグループである。平面形はいずれも不整円形や橢円形を呈し、規模は約3～4m前後となるものである。住居跡覆土は、色調が暗褐色ないし黒褐色を呈し、炭化粒子や黄褐色粒子が多量に混りる粘質土層である。遺物の出土状況は、住居跡の上部から多くの土器片や磨石・凹石類などが出土している。その他、308号住居跡の東側306号住居跡と重複している部分に、幅18～25cmで黄褐色土が外周して認められ、恐らく308号住居跡の東側壁体が構築されている。

土壙は、その大部分がA地区の中央部より西側に分布し、住居跡群の回りに在る。平面形は、不整円形や橢円形を呈する。大きさは、約1～1.5m前後である。土壙の覆土は、暗褐色土・黒褐色土で炭化粒子が混る微砂質粘土である。不明ピット群は、その大半が遺構とは直接結びつかないと考えられるが、中には305号住居・302号土壙の南側のピット群は覆土の状態から、住居跡を構成する柱穴群とみられる。

このようにA地区は、中央より北半にかけて遺構が密集し、南半域では確認されておらず、遺物の出土状況も遺構分布と一致する。

#### B地区遺構（第5図 図版4・5）

遺跡の南東側のやや平坦地、46～55・26～30グリッド内に位置する。中央から東側にかけて81・84・86号住居跡や83・85・95・96号土壙があり、81・86号住居跡・84号住居跡・95・96号土壙それぞれ重複しており、中央から西側にかけて88～90・94・95・98号住居跡が連続して重複している。北側には不明のピット群が在る。遺存状態は、全体に水田耕作により一部覆土上層まで擾乱を受けている。確認面は第IV層で、いずれも第V層を掘り込



第5図 B地区遺構平面図

んでいる。

(86号住居跡) 平面形は、東側が未掘ではあるがおそらく不整円形を呈する。大きさは長径3.52mを計り、確認面から床面までの深さは18~26cmである。壁は、緩やかに掘り込まれ、現存高は約21cmである。壁溝および周溝は検出されていない。床面の状態は、全体に凹凸で軟弱であり、壁際はとくに軟弱である。柱穴は9本で、EP9~11が主柱穴で、PE12~17は壁柱穴あるいは支柱穴で、径15~29cm・深さ18~39cmである。なお、炉跡については、確認されていない。

(81号住居跡) 東側で86号住居跡と重複し、西側で85号土壤と接している。平面形は南側がやや脹らみをもつ円形を呈する。大きさは長径4.31・短径3.96mを計り、確認面からの深さは17~23cmである。壁は北・南側で明瞭に掘り込まれ、西・北東側では若干傾斜している程度で、現存高は確認面からの深さと一致する。壁溝・周溝は検出されていない。床面の状態は、中央部がやや固く踏みしめられているほかは軟弱で、平坦である。柱穴は8本検出され、主穴柱はEP4~5で径32~38cm・深さ35~42cm、支柱・壁柱穴はEP1~3・6~8で径17~43cm・深さ14~28cmである。

(84号住居跡) 東側で95号土壤・南側で81号住居跡と重複あるいは近接している。平面形は柱穴の配列からみて円形を呈すると考えられる。大きさは推定長径3.20mを計る。壁・壁溝・周溝は確認できなかった。床面の状態は、中央部のEP18付近で若干認められ、やや軟弱である。柱穴は8本確認され、EP18~25である。大きさは径16~38cm・深さ12~36cmで、主柱穴はEP8で他は支・壁柱穴とみられる。

(98号住居跡) 北側で88号住居跡と東側で94号住居跡と重複している。平面形は、床面の範囲と柱穴からみて橢円形を呈すると考えられ、大きさは長径3.18m・短径2.98mを計る。壁は若干の高低差をもって傾斜しているが、全体的には不明確である。周溝・壁溝は認められない。床面の状態は、中央部がやや高く凹凸がみられ固く踏みしめられ、外側へむけて軟弱となっている。炉跡は中央部の東側寄りでEP35付近に約10cmの範囲で焼土混りの黄褐色土があり、若干焼成されている程度であるが、おそらく炉跡と考えられる。柱穴は17本検出され、壁寄りに外周するのが特徴である。EP26~42で、主柱穴はEP28~35・42で径36~53cm・深41~52cmである。その他は支柱穴で径18~34cm・深さ15~31cmである。本住居跡は、柱穴の配列からみて1回の拡張した住居跡と考えられる。

(94号住居跡) 西側で98号住居跡と重複している。平面形は、柱穴の配列からみて東側と西側がやや直線になる橢円形を呈する。大きさは、長径3.96m・短径3.14mを計り、確認面は第IV層上面である。壁は、東側で検出され緩やかに掘り込まれ、現存高は6~11cmである。壁溝および周溝は、検出されない。床面の状態は、住居跡の中央部でやや落ち込

み、東側壁付近では凹凸になるほかは平坦で、E L45（炉跡）付近が固く踏みしめられ壁際で軟弱となっている。柱穴は25本検出され（EP46～60），主柱穴はEP46～50で5本認められ、径35～43cm・深さ38～51cmであり、E L45を中心に外周して在る。支柱・壁柱穴はEP51～60であり、径19～43cm・深さ22～35cmである。とくにEP52・54・59・60は支柱・壁柱穴の中でも主柱穴に準じている。

炉跡（E L45）は、住居跡のはば中央部の南寄りに位置する地床炉である。平面形は不整円形を呈し、大きさは径45cm・深さ15～21cmを計る。とくに底面で良く焼成され、焼土も厚く堆積している。

（88号住居跡）南側で98号住居跡・西側で90号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は、北側の一部で方形状になるほかは不整の円形を呈し、大きさは長径4.00m・短径3.50mを計る。確認面第III層下部で確認される。壁は、東側の一部から北側にかけて検出され、ほぼ緩やかに掘り込まれ軟弱であり、現存高24～29cmである。壁溝・周溝は、確認されない。床面の状態は、EP61付近で凹凸があるほかは平坦で、軟弱である。柱穴はEP61～69で9本検出され、主柱穴はEP61～63で径34～48cm・深さ38～59cm、住居跡の中央部に在り、いずれも半円形形状に配列されている。壁柱穴および支柱穴はEP64～69であり、径28～54cm・深さ19～41cmであり、EP64とEP69は対をなすものである。炉跡は、検出されていない。

（89号住居跡）90・92号住居跡と重複している。平面形は東壁と柱穴の配列から考えて横円形を呈している。大きさは推定長径4.00m・短径3.00mを計る。92号住居跡精査の際に確認される。壁は東側で検出され、緩やかに掘り込まれており、現存高は12～14cmである。壁溝・周溝は確認されない。床面の状態は、住居跡の中央部が凹凸みられ固く踏みしめられ、壁付近では平坦で軟弱である。柱穴は11本検出されEP70～80で、主柱穴はEP70・75・79であり、住居跡の壁際にあり三角形形状に対応しており、径38～61cm・深さ45～59cmである。EP71～74・76～78・80は支柱・壁柱穴となり、径24～42cm・深さ18～33cmである。炉跡は確認されない。

（90号住居跡）89・92号住居跡と重複している。平面形は、柱穴の配列状態より不整円形を呈し、大きさは推定長径6.00・短径5.92mを計る。89・92号住居跡の精査および検出の際に確認される。壁は、北側の一部で検出され、緩やかに掘り込まれ、軟弱である。現存高は8～13cmである。壁・周溝は認められない。床面の状態は、全体に軟弱であり、平坦である。柱穴はEP81～93で13本検出され、主柱穴はEP81・86の2本認められ、径32～63cm・深さ18～24cmである。支柱穴他はEP82～85・87～93でその大部が壁際にあり、外周している。炉跡は認められない。

(92号住居跡) 89・90号住居とそれぞれ重複し、全体の約4分の1を検出したものである。平面形・規模などは不明であり、壁溝・周溝は検出されず、炉跡は確認されていない。壁は、緩やかに掘り込まれ固くなり、現存高は12~15cmである。床面の状態は、壁際で軟弱であるほかは、固く踏しめられ凹凸がみられる。

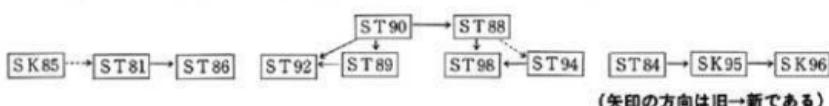
(83号土壤) 55~26グリッド内に位置し、南西側は未検出である。平面形は、北側がやや張らむ楕円形を呈し、推定長径2.41・短径2.04mを計る。確認面は第III層下部より確認される。壁は全体に緩やかに掘り込まれ、軟弱である。壙底は、中央部がやや高く壁付近でやや低くなる。土壤の中央部で一括土器群が投棄されている。

(85号土壤) 東側で81号土壤と接している。平面形は、北側・東側・南側が突出する不整形を呈し、覆土中に黄褐色土が上層から下層にみられる。規模は長径2.78・短径2.00mを計る。壁および壙底は、不規則に掘り込まれ、とくに壙底では不整ピット群が掘り込まれている。

(95号土壤) 西側で84号住居跡と重複し、東側で96号土壤と接している。北東側の半分は未検出である。平面形は、ほぼ円形を呈するとみられ、径約2.00mを計る。確認面は第III層下部である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、軟弱である。壙底はほぼ平坦であるが中央北側で凹凸がみられる。

(96号土壤) 西側で95号土壤と接している。大半が未検出で詳細は不明である。壁や壙底はしっかりと掘り込まれている。

A地区における住居跡・土壤の新旧関係は下記の図式となる。



### C地区遺構（第6図 図版6）

遺跡の南側のやや平坦地、36~42・26~30グリッド内に位置する。中央から東側にかけて10・12号住居跡や1・2号土壤があり、西側に15・17号土壤がある。12号住居や1・2号土壤がそれぞれ重複している。住居跡や土壤の周りには不明のピット群があり、ピットの配列や構成および第IV層の状態からみて、直接に住居跡を構成する柱穴とは判定しにくいものである。全体的に水田耕作により一部覆土上層まで擾乱を受けしており、第II層から第IV層にかけて小礫群(河原石等)などが多量に混入されているため、遺構を検出す際は困難をきわめた。確認面は、12号住居跡が第III層下部で、その他の住居跡や土壤は第IV層において確認され、検出したものである。

(10号住居跡) 37~39-28~30グリッド内に位置し、確認面は、第IV層中位より確認されたものである。平面形は、周溝（E D 2）の形状によって、南側がやや突出する楕円形を呈している。大きさは長径4.88m・短径4.09mを計る。壁は認められない。同溝E D 2は、住居跡を全周し、北側・東側・南側で幅がやや広くなり、南西側で狭くなっている。幅は18~44cm・深さ12~18cmで、断面がV字状になっている。床面の状態は、中央から東側は凹凸があり固く踏みしめられ、西側ではほぼ平坦で軟弱である。柱穴はE P 1~10で10本検出され、主柱穴はE P 1~4でE P 2~4は壁に寄っており、主柱穴の位置関係は台形状を示して、径38~56cm・深さ35~51cmである。E P 5~10はいずれも壁・支柱穴であり、径19~32cm・深さ25~31cmである。炉跡（E L 1）は、住居跡の西側寄りに位置する地床炉である。不整円形を呈し、径65cmで深19cmである。炉跡中央部が良く焼けている。

(12号住居跡) 40~42-26~29グリッド内に位置し、1・2号土壤と重複している。1・2号土壤の精査・検出の際に確認される。平面形は柱穴の配列状態からみて楕円形を呈しており、大きさは推定長径約7.00m・短径5.09mを計る。壁は確認されない。床面の状態は、住居跡の中央部がやや落ち込むほかは平坦であり、軟弱である。柱穴は28本検出されE P 11~38である。径14~47cm・深さ19~52cmである。炉跡は確認されなかった。

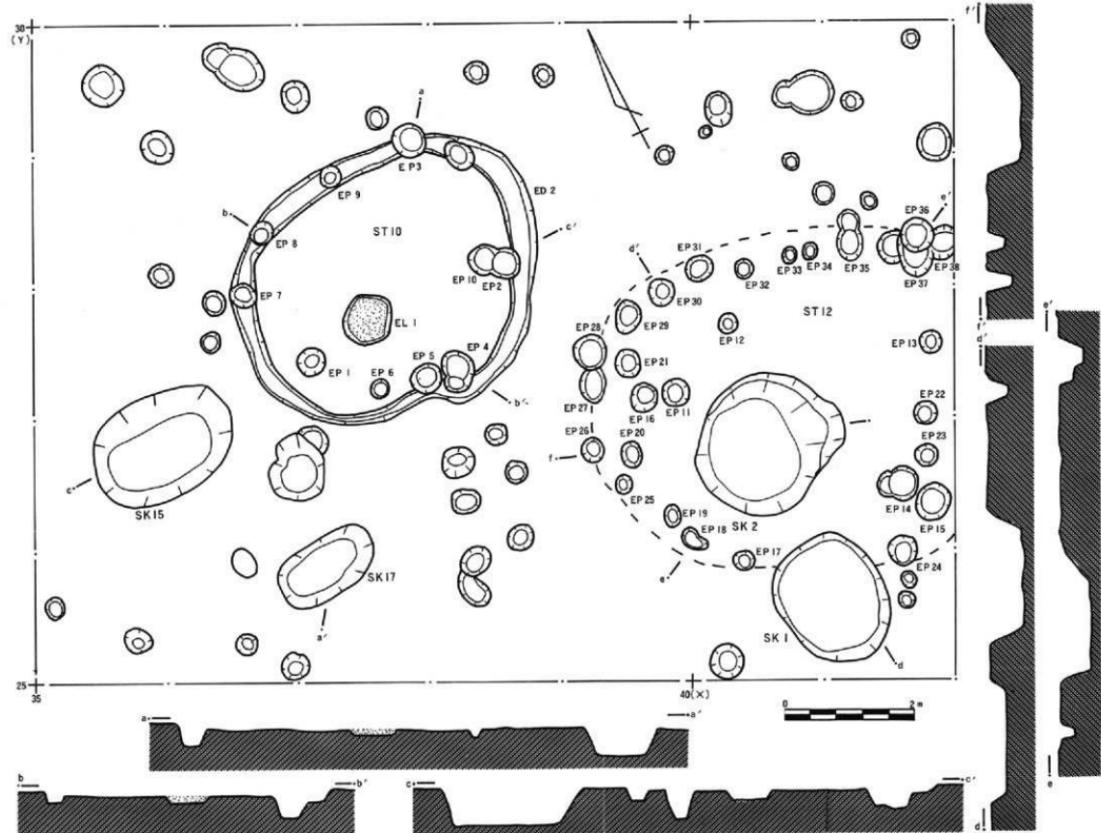
本住居跡は、柱穴の配列状態からみて1~2回の拡張が行なわれている。また1・2号土壤との新旧関係は、いずれの土壤よりも古いものである。

(1号土壤) 北側で12号住居跡と重複している。平面形は楕円形を呈し、大きさは長径2.01m・短径1.58m・深さ25cmを計る。壁は緩やかに掘り込まれ軟弱である。壙底は、ほぼ平坦で軟弱である。12号住居跡よりも新しい。

(2号土壤) 12号住居跡の中央部で重複している。平面形は、東側が大きく膨らむ不整の円形を呈し、大きさは長径2.16m・短径1.68m・深さ58cmを計る。壁はとくに東側で緩やかに掘り込まれ、上部でややオーバーハングしている。壙底は、中央部がやや高く壁際付近で低くなっている。12号住居跡よりも新しい。

(15号土壤) 36・37-27・28グリッド内に位置し、10号住居跡と近接する。平面形は北側と南側がやや膨らむ楕円形を呈している。大きさは、長径2.23m・短径1.57m・深さ59cmを計る。壁体は全体的に緩やかに掘り込まれ軟弱である。壙底は、やや西側に傾斜しているがほぼ平坦で軟弱である。

(17号土壤) 37・38-26・27グリッド内に位置し、北側で10号住居跡と近接している。平面形は、南側がやや不整形になる楕円形をしている。大きさは長径1.58m・短径0.87mを計る。壁体は全体に緩やかに掘り込まれ、軟弱である。壙底は、ほぼ平坦であり軟弱である。



第6図 C地区遺構平面図

#### D地区遺構（第7図 図版7）

遺跡の南西側の平坦地、11-25-26-35グリッド内に位置する。住居跡（4号住居跡）は北東側に1軒検出され、土壤は中央部に1基その他は南西側の地区に偏在し、不明ピット群と近接している。集石遺構群（SM）はD地区の中央北側から南側に重複あるいは近接して在る。これら遺構はいずれも第IV層の上面で確認されたものである。

##### （住居跡）

4号住居跡は、20-23-31-34グリッド内に位置する。平面形は、柱穴の配列状態からみて不整の円形を呈している。大きさは長径6.24m・短径5.22mを計る。確認面はIV層上面である。壁および壁溝・周溝は確認されない。床面の状態は、炉跡（EL）付近が凸凹があり固く踏みしめられており、その他では平坦で軟弱である。柱穴は32本検出されており、住居跡の壁付近に在り外周している。径24-42・深さ18-63cmである。これら柱穴の配列を考慮すると数時に亘って拡張あるいは建替などが考えられる。

##### （土壤）

土壤群はいずれもD地区の南西側に位置して偏在する。平面形は、円形ないし不整円形を呈する土壤では221・251・264号土壤であり、楕円形は213・244・246である。土壤群の壁体は緩やかに掘り込まれ軟弱であり、壇底は、全体としてほぼ平坦であり軟弱である。大きさは径1.54-2.21mで深さ45-62cmを計る。なお246・251号土壤の新旧関係は246号土壤が新しい。

##### （集石遺構）

本遺跡の集石遺構群は、D地区のみに検出されたものであり、地区内の中央部の北側から南東および南側にかけ重複あるいは近接してみられる。集石遺構群の全体的な概要については、平面形は砾群の範囲の中で示したもので円形・不整円形・楕円形・不定形を呈し、形は様々である。使用した砾群は自然の河原石を用いた円砾・角砾などで大きさも9-40cmものあり、とくに石棒や石皿・凹石・磨石等の出土はみられず、そのほとんどが自然の砾である。構築の状態は、人為的に掘り込んで砾を置く状態ではなく、自然の窪地や落ち込みを利用して砾を配置してゐるものが多い。砾の配置は、平面的に配列しており、2-3重に積み重ねているものは少ない。出土した遺物の量は、他の地区と比較する希薄である。大きさは、径約1.2-4.6mである。

このように、集石遺構群についての全体的な特徴を概略して記述してみたが、各集石遺構の砾の配置状態や集合する集石遺構群の配列および規模からみて、4つのグループに分けられる。Aグループは219号集石を中心として環状になるもの、Bグループは、262号集石あるいは263号集石など中心部に複数の集石を配列するもの、C・DグループはA・B

グループに属さず規模が若干の差違をもつグループである。

#### 〔A グループ〕

D 地区のはば中央部に位置し、東側で 4 号住居跡と重複しているとみられる。219号集石を中心として直径約 12m の環状をなして、各集石遺構が配列している。構成する集石遺構は 204・206・213・220・225・228・241・242・258・259 号集石である。東側の 4 号住居跡と重複している地区は、住居跡が造られる際に壊されている。平面形は、円形・不整円形・楕円形を呈し、大きさは約 1.90m ~ 2.40m を計る。集石の配列は規則的であり、外周には長方形状になる礫を弧状に配し、中央部には 30~40cm の円形状の礫をやや方射状に配しており、とくに 204・225・258 号集石で顕著に認められる。礫などの抜き取りの痕跡があるものは 213・219・228・242 号集石で、中央部が抜き取られている。219 号集石は、中央部よりもやや南西側寄りに位置し、北東側の地区が空間地帯となっており、礫の配列は 25~40cm のやや中形の礫を使用し、中央部に 50~55cm 前後の角柱礫の抜き取り痕がみられる。204・258 号集石は、自然の若干の落ち込みを利用して礫を配しており、その他の集石は、多少の凹凸がみられてもほぼ平坦な部分に礫を配している。

#### 〔B グループ〕

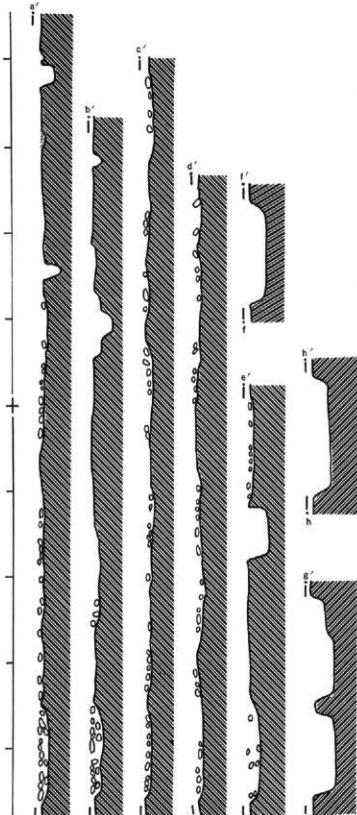
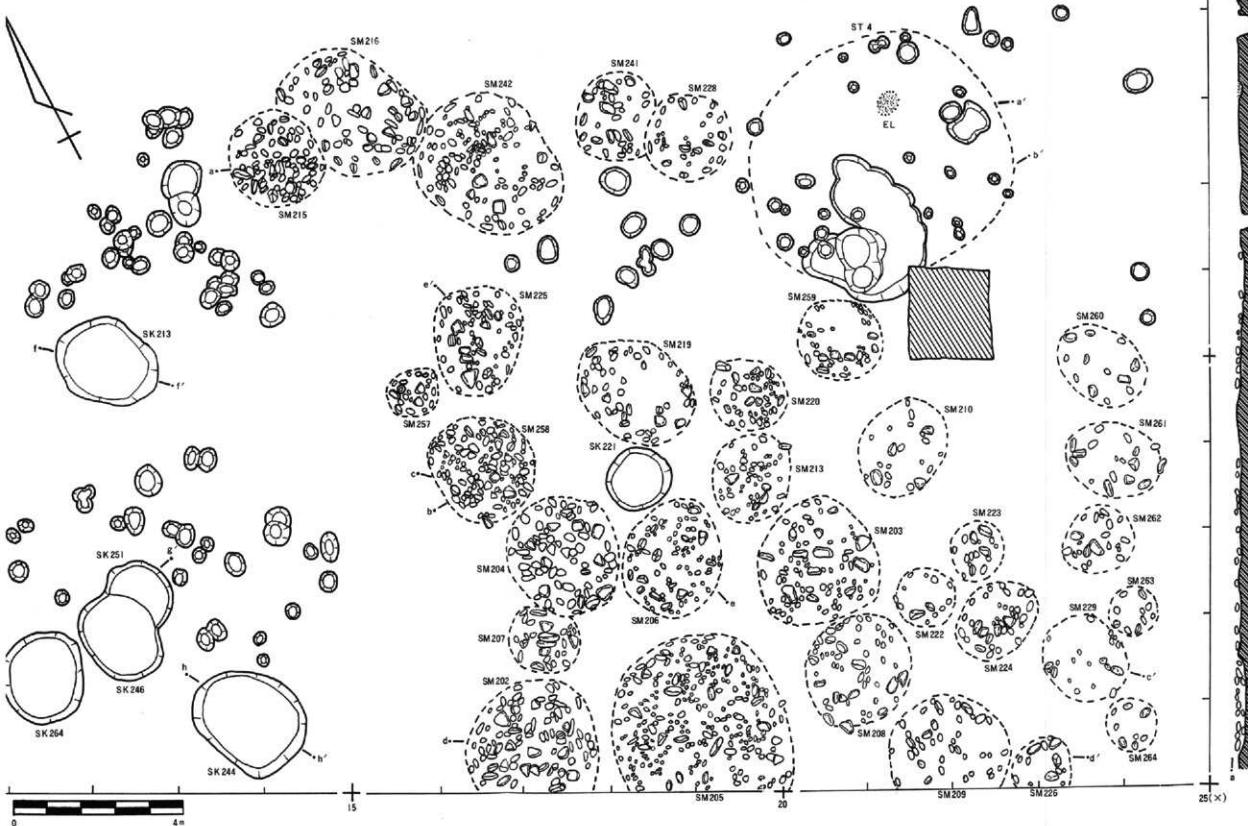
D 地区の南側に位置し、東側の地区については未検出である。262・263 号集石を中心として直径 10~12m 前後の環状をなすとみられる。複数の集石遺構が中心部でさらに小環状をなすか、他方全体的に 2~3 重に連なる配置で環状になると見えられる。構成する集石遺構は、203・208・209・210・222・223・224・226・229・260・261・262・263・264 号集石である。平面形は、円形・不整円形・楕円形を呈しており、大きさは径約 1.20~2.40m を計る。環状の配列は、外周にやや大形の径 1.80~240m の 203・208・209 号集石などが配置され、中央部では不規則的に小集石遺構が配されている。集石遺構の礫の配置は、全体に 30~50cm の自然礫を中央部に不規則に間隔をとって配置している。A グループと違って抜き取りの痕跡が認められず、全体として粗雑である。

#### 〔C グループ〕

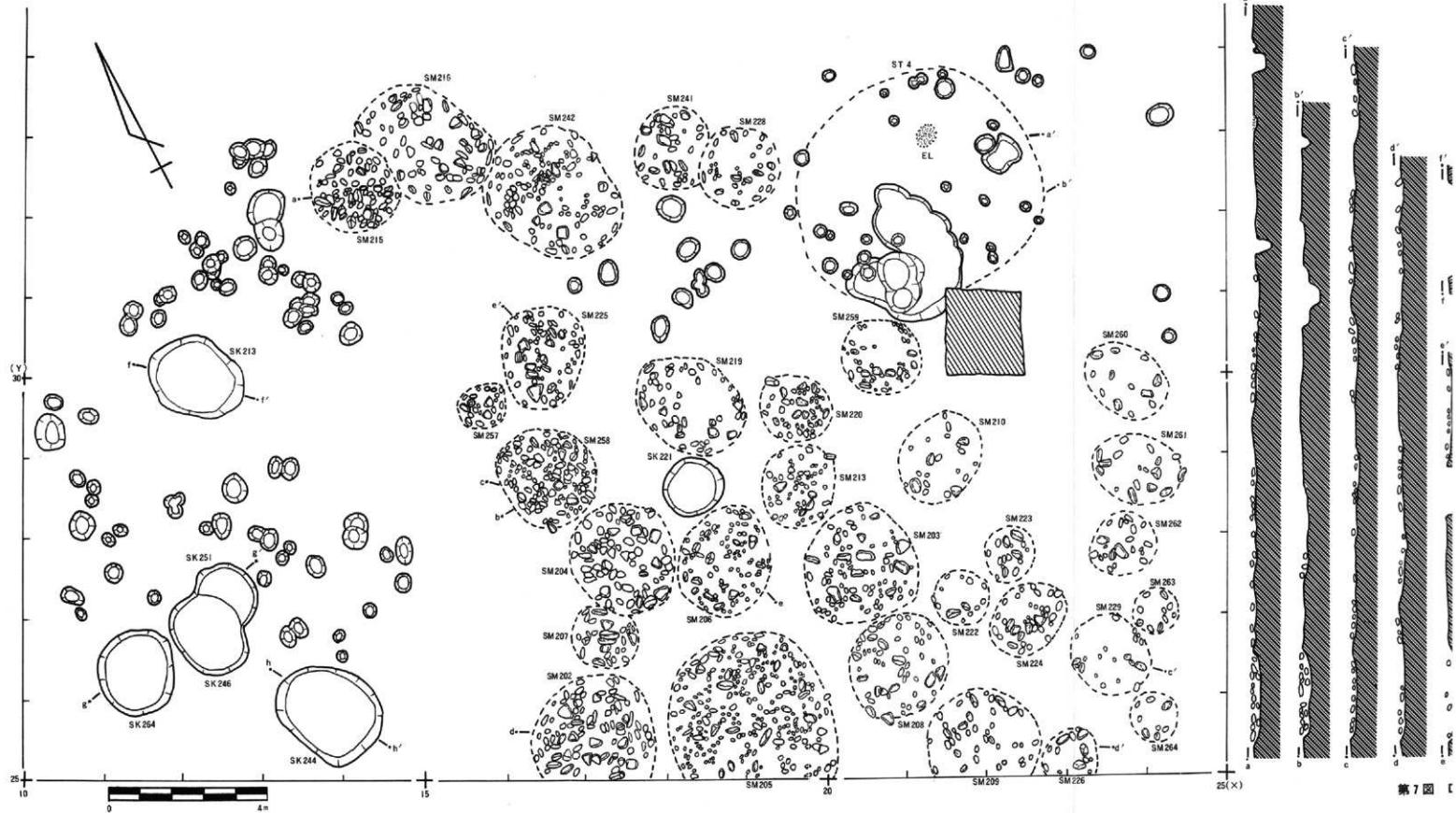
平面形が円形・不整円形を示し、大きさが径 1.20~2.00m のもので、A グループ外周の北・西・南側に位置し、207・215・257 号集石遺構である。いずれも自然の落ち込を利用して構築し、集石の配置は中央部やや中形礫を、外周に沿って小形の礫を配置している。258 号集石遺構に類似している。

#### 〔D グループ〕

平面形は楕円形を呈し、大きさは推定径 2.50~4.00m を計り、大形となっている。202・205・216 号集石遺構で、構築の状態は 258 号集石遺構に共通している。



第7図 D地区遺構平面図



## 2 遺 物

### (1) 土 器

本遺跡から出土した土器は、破片総数で約7,000点を数える。内訳は表-1・2に示す通りであるが、その他にPRNoを付けて取り上げた33点の一括土器がある。以下では、文様判別の不能な細片を除いた包含層・遺構内出土土器および一括土器を対象として分類し、概説する。提示し得た拓影図および実測図には、1~429までの一連番号を付け、対照する土器観察表を設けた。R PNoの土器は、一部実測図に示し、他は巻末図版に掲載する。

#### 出土土器の分類（第8~16図 図版8~13）

分類は、全形の判る資料が少ない事から、破片個々に施された文様・施文技法等を中心として行い第I~VII群までに大別し得た。これらは各文様要素の組合せからさらに細分できたが、分類の主体が部分文様にあるため結果的に同一個体の破片が複数類にまたがる危険性は否めない。この点については、分類基準表備考欄他で後記補足する。

第I群土器の1~9類は、竹管文を多用する北陸系（新崎・上山田古式・上野・古屋敷式）の土器からなり、同じく10~11類の馬高式併行の土器に先行する一群である。細別の各類は、相互に関連する点が認められ、基本的には2類を中心とする一群（縄文地文）と5類を中心とする一群（格子目状沈線等充填地文）の二つの施文型式（タイプ）を主体としているのが判る。しかし、細かな形態については不詳であり、全体の構造は不明である。

第II群土器は、各種の刺突文を主要な文様要素とする一群と、隆起線と沈線および沈線文が主体となる土器群からなる。器形では、大形の波状口縁をもつ一群が注目され、数点の鶴頭状口縁を呈すものがある。刺突文では、交互刺突を基本とし、その変形および結節沈線文が主要な位置を占めている。隆起線と沈線・沈線文主体の土器では、渦巻文・連弧文・三角形や「X」・「Y」等のモチーフが多用される。文様は、口縁部や体部上半に限定されるものが多い。これらは、関東系（五領ヶ台式）の土器と評される事が多いが、必ずしも型式的な位置付けの明確な一群ではない。ここでは、問題も多分に残るが、その大方は大木7a~7b式に係わり、かつ第III群の大半と共に伴する東北南半の土器群として捉えておく。地文では、結束を伴う羽状縄文や、結節による綾絞文等第III群に近いものがあり、いずれも縦位施文が主流である。第V群1類は、本群の組成をなす一員としてよいだろう。

第III群土器は、撚糸圧痕文を主要な文様要素とするもので、1~5類に細別される。形態上、第II群の一部も含めて口唇を「く」の字状に肥厚させる特徴が顕著である。全体では、2類が主体を占めるが、これには隆起線に伴う圧痕と単独施文の2種が含まれている。地文は、第V群2類の大半と3類の一部が該当する。

第IV群土器は、隆起線による口縁部装飾や、隆線・沈線による体部の意匠文をもつ一群

で、文様帶の構成が明確である。これは、第Ⅰ～Ⅲ群に後続する大木8a式の範囲内で捉えられる一群である。第Ⅳ群以下の土器群は、一部を除いて、上記各群に帰すべき体部や底部および副次的な土器群からなり、第Ⅳ群では、網代や籠状压痕文が注目される。

以上のように、本遺跡では、その位置する地域性からか最上川流域ではほとんど見る事のない第Ⅰ群土器がまとまり方を示し、加えて第Ⅱ・Ⅲ群土器が混在する状況が注目される。これら土器群の組成比率は、各土器群の文様帶構成を考慮して比較すれば、約半々か、やや第Ⅱ・Ⅲ群が上回ると見る事ができる。次期に降って馬高式併行のものが極端に少なく、大木8a式併行の土器が圧倒する現象は非常に興味ある現象といえよう。

### 胎土・焼成について

全体に保存状態が悪かった故か、器面の脆弱なものが多いが、概して第Ⅰ群土器や第Ⅲ

表-3 那古署内出土土器点数

分類	点数	備考
第Ⅰ群	475	新潟系(433)馬高式系(25)
第Ⅱ群	354	網代或文に含まれる体部片を含む
第Ⅲ群	181	網代或文等も口縁部片が主体となる
第Ⅳ群	268	陸奥綱による表面の薄い口縁部片主体
第Ⅴ群	361	網代或文だけのもの(283), 網目文(50)
第Ⅵ群	304	網代或文他有文らしの(96), 亂文(209)
第Ⅶ群	2	亂文時代中期後期(大木9式併行)
その他	2,580	相手で文様判別不能なものを一括
計	4,450	

表-4 遺構出土土器点数

遺構	出土点数
S T	496
E P	219
S M	670
S X	106
E D	38
S K	937
E L	1
計	2,467

\*点数は破片を1とする

群土器は焼成が良く、遺存状況も良いものが多い。これに反して、第Ⅱ群土器は器面脆弱なものが多く見られる。胎土では、第Ⅱ群土器の一部に金雲母の顯著なものが認められる他、総じて石英の細粒が各群土器ともに多く含まれる例が多い。

### 遺構内における土器群のあり方について

下表からは、第Ⅰ群1・2・5、第Ⅱ群7・9、第Ⅲ群2、第Ⅳ群1類等が共伴率の高い事が判り、時期的に同時か、近接する資料群である事を推測させる。しかし、細部や編年上の問題については、さらに比較要件を吟味し、厳密な検討を行う必要がある。

表-5 遺構における土器類別組成

群 遺構	I											II							III							IV							V									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	2					
S T	10	1																																								
S T	12	6	7			1																																				
S T	86	7	4	1	1																																					
S T	88	19	8	5																																						
S T	89	2			1																																					
S T	305	10	4																																							
S K	83	4	7																																							
S K	231	10	8	1	2	1																																				
S K	251	2																																								
S K	253	7	7	3																																						
S K	303	4	3					1	1	4																																

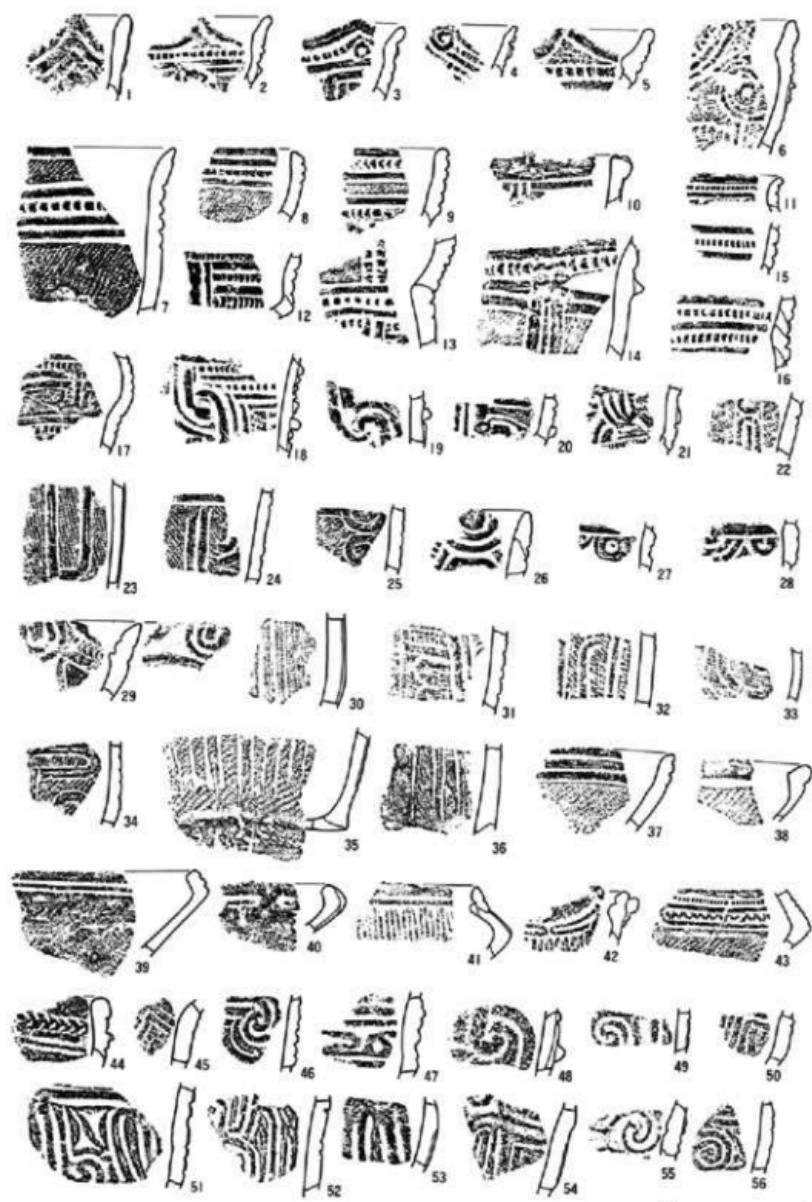
東本表は、出土土器量の比較的多い遺構を抽出し、その出土土器の類別組成を示したもので、

表中の数字は土器片数を示す。(1個体は1と計算)

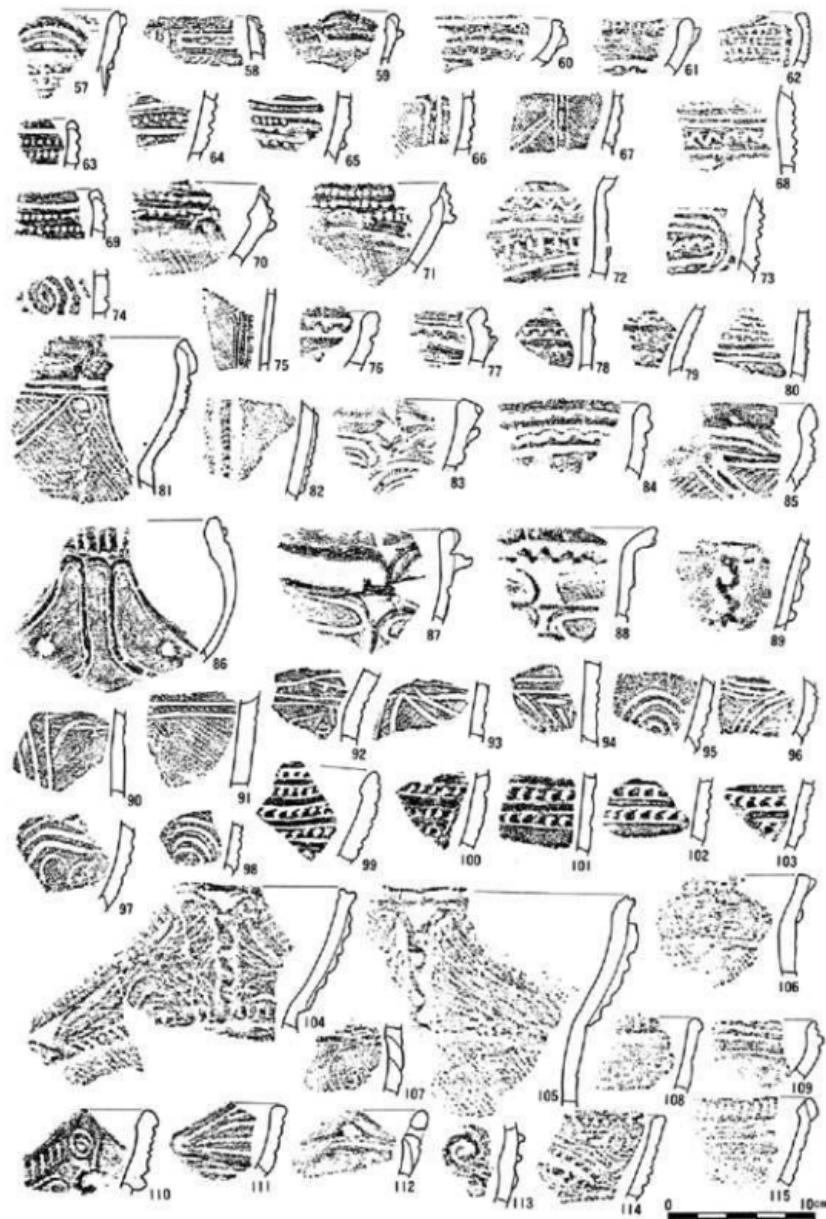
文様不明の土器は数量から省いた。

表-6 土器分類基準

群	類	主要文様要素・文様抜法・併用される文様・文様帶他	地文	器種	備考	
1	竹野平行波文(半段波文)	半段竹野の押引波によるもの(後松文)「断面(マガコロ)」を主な文様とする。表面に施毛刷文の大半を含むるか(後松文)と並び他のものも見られる。(1-1-2-1-3-5-5B)	平行織文の横波 方向波文	束 株	2期の部分片の可能性が高い。	
2	竹野平行波文(半段波文)	竹野斜波文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の円形輪柱付や底部要部等の小形施毛刷文。(3-4-7-7-17-25-45期)	#	束 株	4期の一部を含む可能性高い。	
3	竹野平行波文(半段波文)	竹野斜波文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の円形輪柱付や底部要部等の小形施毛刷文。(3-4-7-7-17-25-45期)	#	束 株	(6)	
4	竹野平行波文(半段波文)	竹野斜波文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の円形輪柱付や底部要部等の小形施毛刷文。(18-21-48)	#	束 株	後起入底支は底部上半が底部下に施される。	
5	竹野平行波文(半段波文)	竹野斜波文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の円形輪柱付や底部要部等の小形施毛刷文。(3-4-7-7-17-25-45期)	竹野斜波文(後刷文) (後刷)	束 株	4期と開通する(5-29-34-50期)	
I	6	竹野平行波文(半段波文)	竹野斜波文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の円形輪柱付や底部要部等の小形施毛刷文。(27)	不 明	束 株	5期や7期に開通すると考られる。
7	海藻文(広葉)	半段竹野の海藻文を複数して半段の海藻とし、その内側に斜波の無い平行波文を施す手前部(4-12)と半段竹野の海藻引き波を施すもの(3-7)がある。	海藻目状波文 斜行織文	束 株	2期や5期に開通する口縫部寄りである。	
8	海藻文(広葉)	半段竹野文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の海藻文を施す。(8-11-14-18-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-32-33-34-35-36-37-38-39-40-41-42-43-44-45-46-47-48-49-50-51-52-53-54)	平行織文(直し) 海藻目状波文	束 株	後期斜波文である。	
9	海藻文(海藻文で調節された)	竹野平行波文(半段波文)、后松文(竹野斜波文)、束波(もつね波)を施す。その上に天羽波文の足跡が施される。下部(後松文)は天羽波文がある。	無 文	束 株	資料的で少ない。全体で2-3期である。	
10	降起斜文(竹野斜波文)	半段竹野による平行波文を複数して施すもので、部体が直角に立上り、口縫に内溝があるかモザイク形の施毛刷文とそれらが企て形で不規則である。	#	束 株	(46-47-49-52)	
11	降起斜文(竹野斜波文)	竹野斜波文(△状波を呈し、半段波文と同一文様)傾斜的な文様では底面口縁部の海藻文を施す。(53-54)	#	束 株	(51-53-54)	
II	1	束点斜文(束斜波文)	束斜波文と連続して施すもので、1-2-2段のものを認める。傾斜される文様は、束波文。束斜波文から束点斜文へ。(57-58-62-67-68)	平行織文の横波 方向波文	束 株	
2	円形斜波文(竹野斜波文)	束斜波文と連続して1-2段の束斜波文を施すもので、竹野斜波文と同様に傾斜される。	#	束 株	(59-60)	
3	「」文(半段斜波文)(束斜波文)	束斜波文と連続して底面に施された内縫に「」から斜刺して「」の手字(秋)の文様(58-73)と、北越文の束斜波文とも(72)である。束斜波文と前日目。	#	束 株	(68-72-73-和歌)	
4	結形斜波文(束斜波文)	竹野斜波文としない。一つの工具によるものか、束斜波文としないものかは未だある。(70-71-74)	#	束 株	(75)は三角形の彫り込みを伴う。	
5	瓦豆正文(束斜波文)	竹野斜波文と施されるものか、束斜波文としないものかは未だある。束斜波文の左側に束斜波文を施す。	無 文	束 株	前日西の1、2、3期、第1群8期に開通資料有り	
6	束斜波文(束斜波文)	束斜波文と左側に束斜波文を施す。束斜波文の左側のみである。	平行織文(束斜 波文)	束 株	(82)	
7	束斜波文(束斜波文)	束斜波文と右側に束斜波文を施すもの(83-87)がある。束斜波文と前日目。	無 文	束 株	口縫部が肥厚する特徴がある(83-86)	
8	束斜波文(束斜波文)	束斜波文と前日目(束斜波文)から下垂するやや幅広の束斜波文。筒端斜波文の工具で前から斜刺する。	不 明 文(?)	束 株	(97)	
9	束斜波文(束斜波文)	束斜波文と前日目(束斜波文)から下垂するやや幅広の束斜波文。筒端斜波文の工具で前から斜刺する。	無 文	束 株	束斜波文と開通するものが含まれる可能性あり	
10	丸形文(束斜波文)	束斜波文と前日目(束斜波文)から下垂するやや幅広の束斜波文。筒端斜波文の工具で前から斜刺する。	無 文	束 株		
III	1	海藻斜波文(「C字斜波文」)	C字斜波文(口縫斜波文)口縫に斜引多段の平行波文と、束斜波文の束斜波文による。「C字斜波文」と呼ぶ特徴的に施される。北越文の外縫の束斜波文とは束斜波文としないものである。	無 文	束 株	(99-101)
2	海藻斜波文(「C字斜波文」)	束斜波文と前日目(束斜波文)口縫に束斜波文。筒端斜波文によるものとしないものである。束斜波文と前日目。	平行織文(斜斜 波文)	束 株	併用される文様に、斜斜波文と前日目が併用される。	
3	海藻斜波文(「C字斜波文」)	束斜波文と前日目(束斜波文)口縫に束斜波文。筒端斜波文によるものとしないものである。束斜波文と前日目。	平行織文(束斜 波文)	束 株	口縫部が肥厚するものが多い(104-105)	
4	海藻斜波文(「C字斜波文」)	束斜波文と前日目(束斜波文)口縫に束斜波文。筒端斜波文によるものとしないものである。束斜波文と前日目。	平行織文(束斜 波文)	束 株	(105-125-128)	
5	海藻斜波文(「C字斜波文」)	束斜波文と前日目(束斜波文)口縫に束斜波文。筒端斜波文によるものとしないものである。束斜波文と前日目。	平行織文(束斜 波文)	束 株	束斜波文1期に開通するもので斜斜波文少ない。	
IV	1	口唇部・口縫部・筒端斜波文を有する	筒端斜波文の構成や束斜波文によるものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	平行織文(斜斜 波文)	束 株	
2	口縫部・筒端斜波文を有する	筒端斜波文と筒端斜波文によるものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	#	束 株	(130-132-134-136-140-142-143)口縫部厚。	
3	口縫部・筒端斜波文を有する	筒端斜波文と筒端斜波文によるものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	平行織文(束斜 波文)	束 株	(135)	
4	不調斜波文(束斜波文)	束斜波文と筒端斜波文によるものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	#	束 株	資料は少ない。	
5	調整斜波文(4期に亘る)	4期に亘る斜波文の構成や筒端斜波文によるものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	#	束 株	(144-148)	
V	1	束斜波文(束斜波文)	束斜波文(束斜波文)として施すか(束斜波文)と筒端斜波文を有するものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	平行織文(無斜 波文)	束 株	下小野式に開通する
2	組織斜波文(束斜波文)	束斜波文(束斜波文)として施すか(束斜波文)と筒端斜波文を有するものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	#	束 株	須賀郡土器や第V群1期の体部の可能性大	
3	組織斜波文(束斜波文)	束斜波文(束斜波文)として施すか(束斜波文)と筒端斜波文を有するものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	組織斜波文(束斜 波文)	束 株	須賀郡土器の体部に施すか少ないと多い。	
4	斜行織文(他の文様を施さない体部)	斜行織文(他の文様を施さない体部)と筒端斜波文を有するものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	斜行織文(斜行 方向波文)	束 株	上記群1期の底文斜波文の範囲より多い。	
VI	1	縦斜波文(束斜波文)	束斜波文(束斜波文)と筒端斜波文を有するものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	束 株	(170-172-174-176-180-182-185)	
2	縦斜波文(束斜波文)	束斜波文(束斜波文)と筒端斜波文を有するものとしないものである。筒端斜波文と筒端斜波文を有するものである。	束 株	(167-169-170-172-173-178-180-183-184)		
VII		網織された羅衫や、束斜波文、充満波文等で文様が構成される。	平行織文(網織 +斜波)	束 株	羅衫された羅衫や、束斜波文、充満波文等で文様が構成される。	



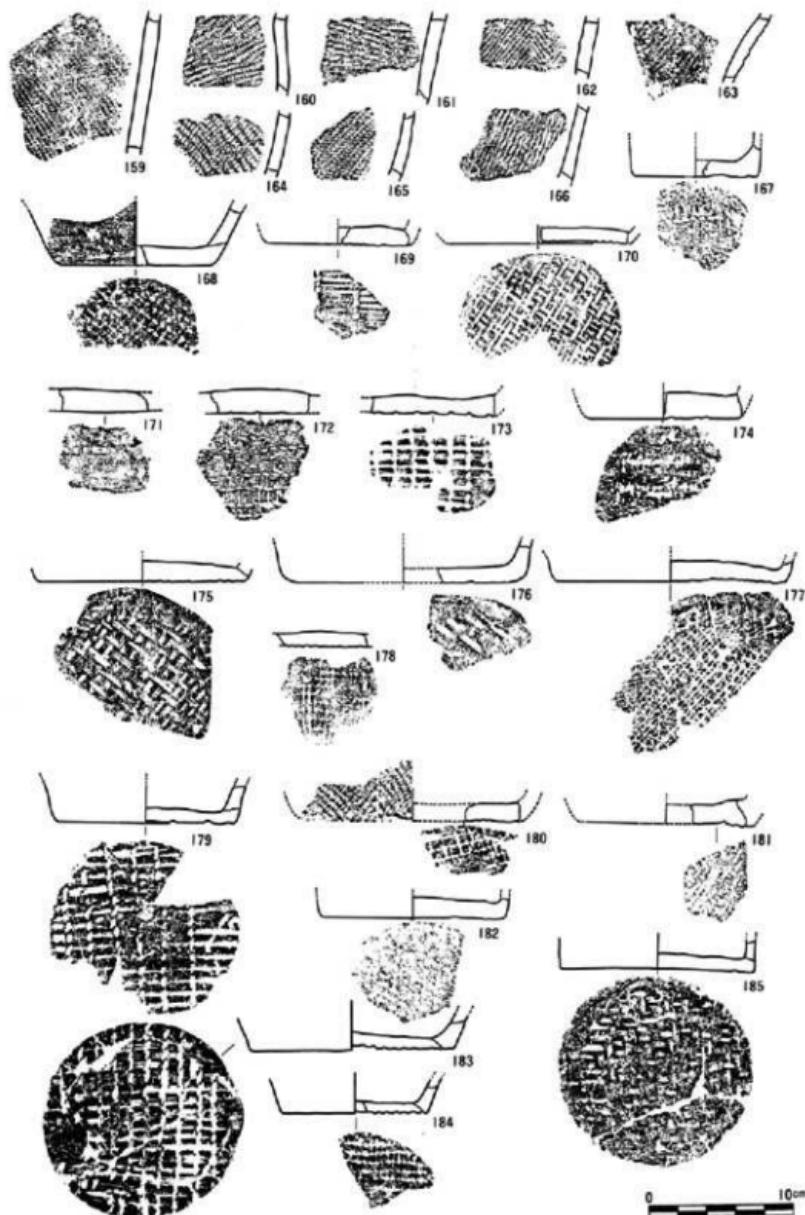
第8図 土器拓影図(1)



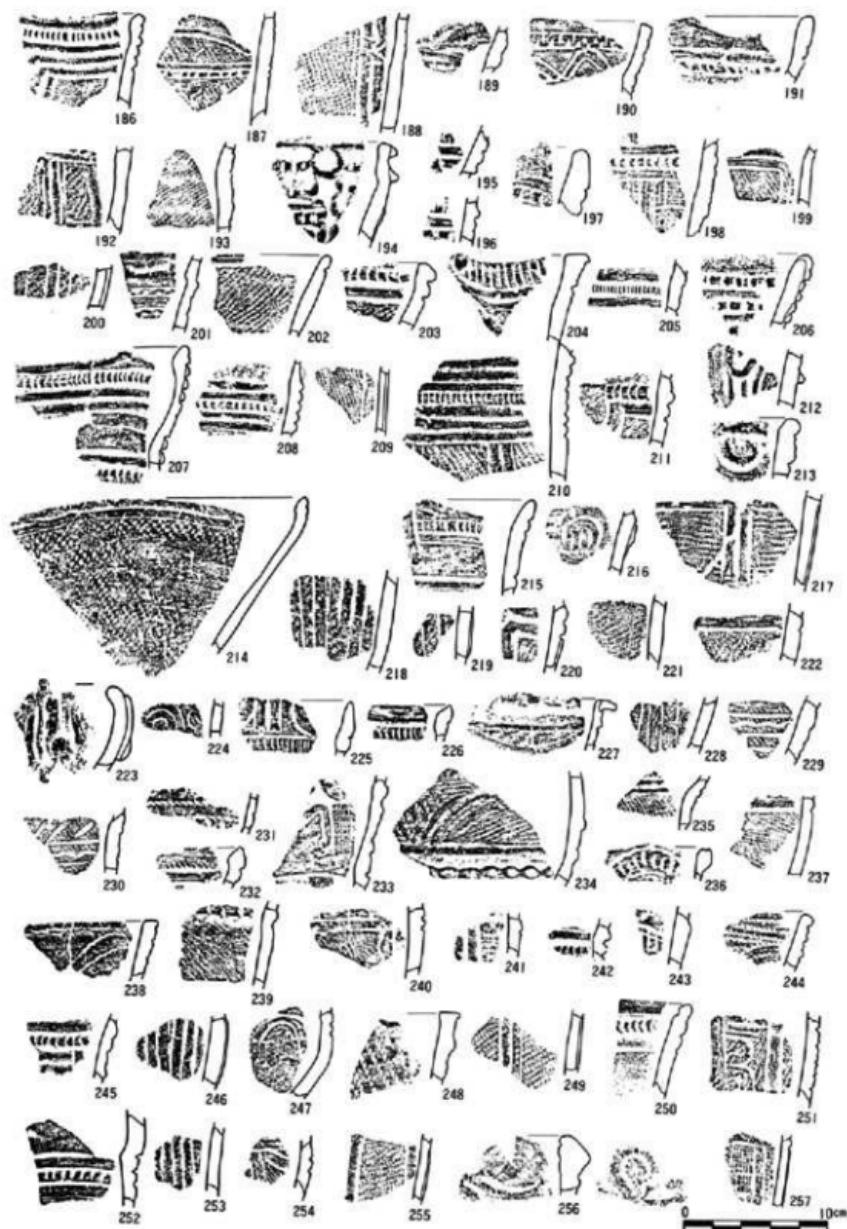
第9図 土器拓影図(2)



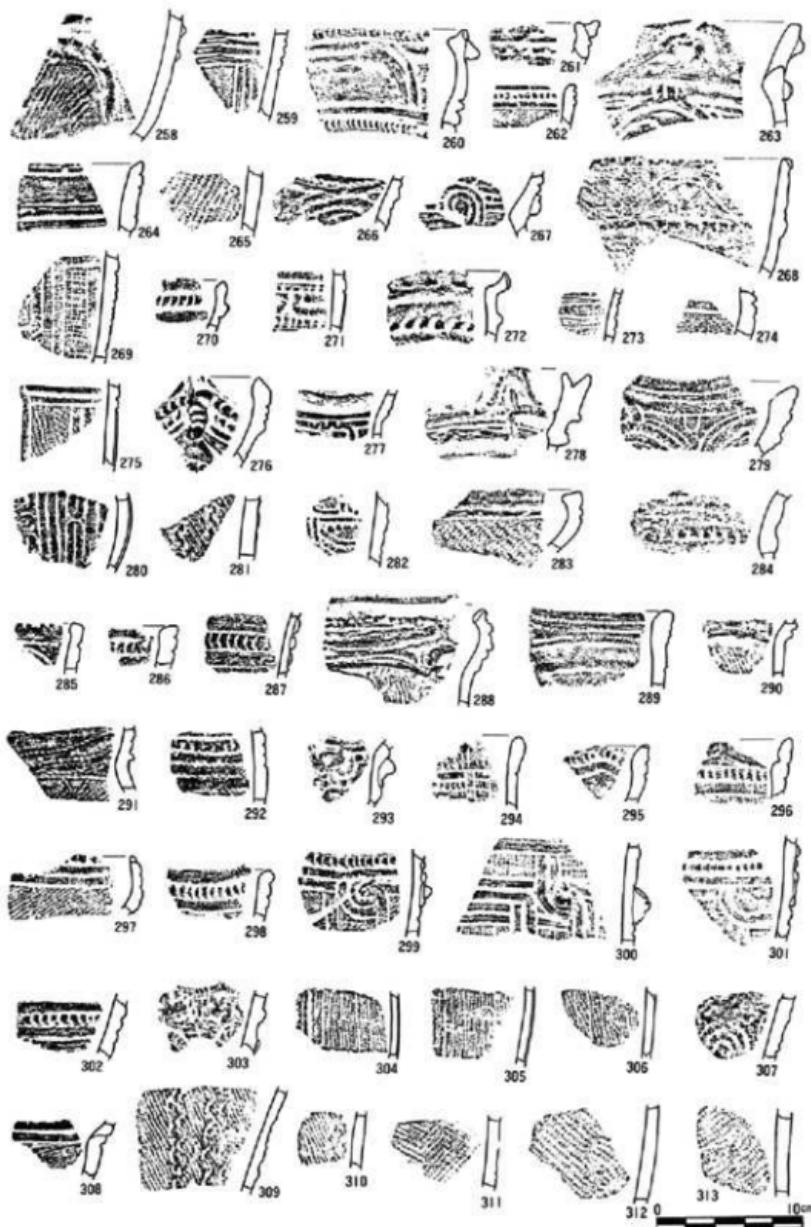
第10図 土器拓影図(3)



第11図 土器拓影図(4)



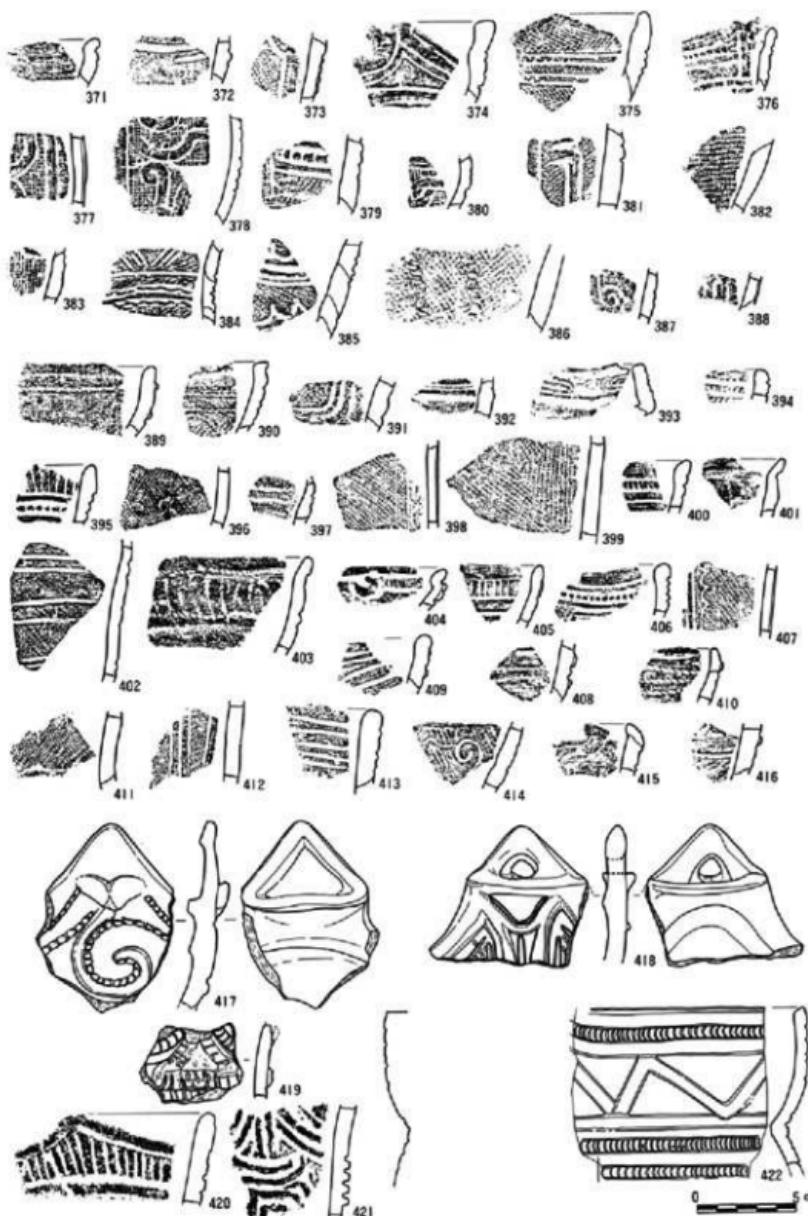
第12図 土器拓影図(5)



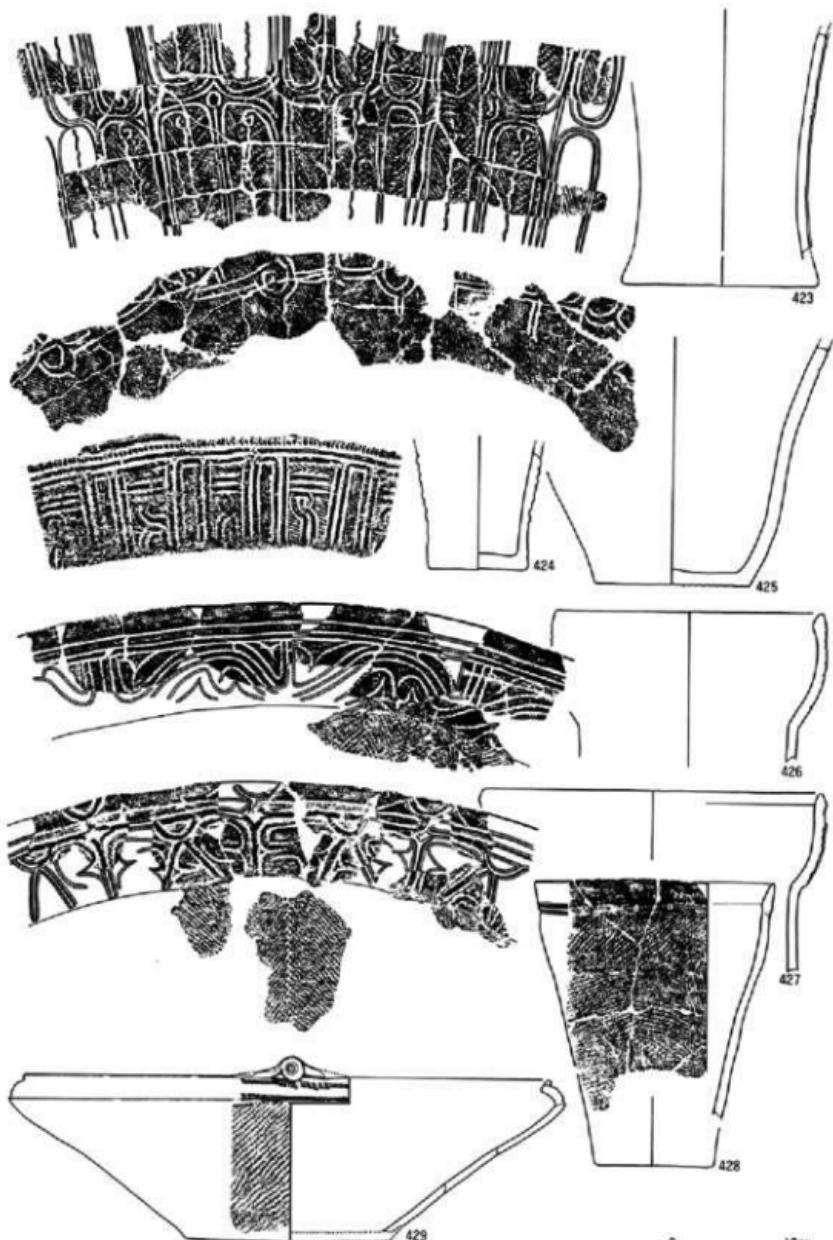
第13図 土器拓影図(6)



第14図 土器拓影図(1)



第15図 土器拓影図(3)・土器実測図(1)



第16図 土器実測図(2)

表-7 土器觀察一覽（包含層）

No.	出 土 地 点	層	器形	部位	文 样	分 類	%	出 土 地 点	層	器形	部位	文 样	分 類	%
1	45 - 41 - 45	Ⅲ	圓杯	口縫	半隆起文・半隆起文	I - 1	56	65 - 41 - 45	Ⅳ	圓底	体	半隆起文	I - 1	
2	60 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文 黏付文	I - 2	57	X - 0	/	口縫	斜寅文(伴狀工具) 陶管文	II - 1		
3	10 - 14 - 26	#	*	*	*		58	35 - 36 - 26 - 30	Ⅲ	#	体	斜寅文(伴狀工具) 亂形文 亂形文	II - 2	
4	61 - 65 - 56 - 50	#	*	*	*		59	61 - 65 - 51 - 00	#	#	斜寅文(口唇部隔壁上に内唇管) 亂形文	II - 2		
5	0	*	*	*	半隆起文 亂形文 亂形文	I - 5	60	40 - 26 - 30	#	#	斜寅文(口唇部隔壁) 亂形文 亂形文	II - 5		
6	31 - 34 - 50	Ⅱ	#	瓶	半隆起文 亂形文 黏付文 亂形文	I - 3	61	60 - 64 - 51 - 55	#	#	斜寅文(口唇部隔壁) 亂形文	II - 1		
7	50 - 26 - 30	Ⅲ	#	*	半隆起文 亂形文 地文(口唇部)	I - 2	62	50 - 26 - 30	#	#	斜寅文(乱形文に伴狀工具) 亂形文	II - 1		
8	45 - 26 - 30	#	口縫	*	地文(口唇部)	#	63	10 - 21 - 25 - 35	#	#	斜寅文(乱形文に伴狀工具) 亂形文	#		
9	60 - 64 - 46 - 50	#	*	*	*		64	65 - 56 - 60	#	#	斜寅文(乱形文に伴狀工具) 亂形文	#		
10	60 - 64 - 51 - 55	#	*	*	半隆起文 亂形文		65	60 - 64 - 56 - 50	#	#	斜寅文(口唇部に伴狀工具) 亂形文	#		
11	21 - 22 - 31 - 34	I	#	*	半隆起文 亂形文 内外圈朱赤色	#	66	20 - 31 - 34	Ⅲ	体	斜寅文(乱形文に伴狀工具) 地文( L.R. 縦)	#		
12	63 - 64 - 25	Ⅲ	瓶	*	半隆起文 亂形文	#	67	*	*	*	亂地文(不清晰)	#		
13	30 - 41 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文	#	68	10 - 14 - 26 - 30	Ⅲ	#	斜寅文(乱形文に伴狀工具) 亂形文	II - 3		
14	30 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文 黏付文(?と同一個体)	#	69	10 - 24 - 26 - 35	Ⅲ	口縫	斜寅文(乱形文に伴狀工具) 亂形文	II - 1		
15	70 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文	#	70	*	深溝	#	斜寅文(口唇部の隔壁間に内唇管) 亂形文	II - 4		
16	X - 0	/	*	*	半隆起文 亂形文	#	71	50 - 54 - 46 - 47	#	#	斜寅文(20,71とも亂形文地文は不明確)	#		
17	51 - 54 - 26 - 30	Ⅲ	#	*	半隆起文 亂形文 亂地文	#	72	60 - 26 - 30	#	口縫	斜寅文(口唇部上に伴狀工具) 亂形文	II - 3		
18	X - 0	/	*	*	半隆起・點狀入縫・亂形文 亂地文	I - 4	73	15 - 19 - 26 - 30	#	体	斜寅文(60と同一個体)	#		
19	51 - 54 - 26 - 30	Ⅲ	#	体	半隆起文 路起入縫文	#	74	61 - 65 - 56 - 60	#	#	伴狀文(通路状に附屬) 亂形文	II - 4		
20	60 - 64 - 51 - 55	#	*	*	半隆起・路起入縫・黏付文 亂地文	#	75	10 - 24 - 26 - 35	#	#	伴狀文(通路状) 地文( L.R. 橫條)	#		
21	56 - 60 - 51 - 55	#	*	*	半隆起・路起入縫 亂形文 亂目文	#	76	51 - 54 - 26 - 30	#	口縫	斜寅文(伴狀工具・伴狀工具) 亂形文	II - 5		
22	60 - 64 - 51 - 55	#	*	*	半隆起文 亂地文	I - 1	77	61 - 65 - 56 - 60	#	#	斜寅文(瓦瓦利突・円形空腔) 亂・湯漏	#		
23	60 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂地文(日・新保)	#	78	50 - 26 - 30	#	#	斜寅文(瓦瓦利突・伴狀工具) 亂・湯漏	#		
24	51 - 55 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂地文(日・L.R.側板)	#	79	10 - 24 - 26 - 35	#	#	斜寅文(瓦瓦利突・伴狀工具) 亂形文	#		
25	10 - 12 - 29 - 30	Ⅲ	#	*	半隆起文 亂地文	#	80	60 - 64 - 51 - 55	#	#	斜寅文(瓦瓦利突・伴狀工具) 亂・湯漏	#		
26	51 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文 亂地文(手削痕)	I - 2	81	50 - 64 - 46 - 50	#	C16	斜寅文(伴狀工具・伴狀工具) 亂( L.R.側板)	#		
27	20 - 24 - 50	Ⅲ	#	*	半隆起文 亂地文	I - 6	82	20 - 24 - 26 - 30	#	体	斜寅文(乱形文に半垂管型の亂形文)	II - 6		
28	51 - 54 - 26 - 30	Ⅲ	#	*	半隆起文	#	83	10 - 14 - 21 - 35	#	C16	斜起亂文 亂形文	II - 7		
29	40 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文 亂目文(竹管)	I - 5	84	61 - 64 - 35	#	#	筒起亂文 亂形文	#		
30	25 - 41 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文(へら狀工具)	#	85	31 - 34 - 50	#	#	筒起亂文 乱形文 亂地文( L.R.側板)	#		
31	X - 0	/	*	*	半隆起文 亂目文(竹管)	#	86	10 - 14 - 21 - 35	Ⅲ	#	(乱状の基部に2箇所の孔を有す)	#		
32	10 - 24 - 26 - 35	Ⅲ	#	*	*	#	87	31 - 34 - 50	#	#	#	#		
33	10 - 14 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 亂形文(へら狀工具)	#	88	10 - 24 - 26 - 35	Ⅲ	#	(乱文不明確)	#		
34	10 - 14 - 31 - 35	#	*	*	半隆起文 亂形文(へら狀工具)	#	89	61 - 65 - 56 - 60	#	体	斜起亂文	II - 8		
35	X - 0	/	*	*	平行起突・亂地文(手削痕)	I - 1	90	20 - 31 - 34	Ⅲ	#	沈鉢文 亂地文( L.R.側板)	II - 1		
36	50 - 26 - 20	Ⅲ	#	*	沈鉢(へら狀工具)	#	91	16 - 31	Ⅲ	#	沈鉢文 亂地文( L.R.側板)	#		
37	51 - 54 - 26 - 30	#	口縫	*	半隆起文 亂地文( L.R.側板)	I - 3	92	21 - 22 - 31 - 34	I	#	沈鉢文 亂地文(不鮮明)	#		
38	20 - 31 - 34	Ⅲ	#	*	半隆起文 亂地文( L.R.側板)	#	93	20 - 31 - 34	Ⅲ	#	沈鉢文 亂地文( L.R.側板)	#		
39	25 - 29 - 50	#	*	*	半隆起文 亂地文(不鮮明)	#	94	50 - 54 - 51 - 55	#	#	沈鉢文(三角状次)	II - 9		
40	*	*	*	*	半隆起文 亂地文(不鮮明)	#	95	5 - 10 - 20 - 30	#	#	沈鉢文(同心円凹文) 亂地文(不鮮明)	#		
41	10 - 14 - 25 - 30	Ⅲ	#	*	沈鉢(へら狀工具・竹管の組合せ)	I - 7	96	65 - 41 - 45	Ⅲ	#	沈鉢文(張狀)	#		
42	50 - 55 - 45 - 50	#	*	*	沈鉢(竹管平行丸縫の組合せ共施文)	#	97	10 - 14 - 26 - 30	#	#	沈鉢文 亂地文(不鮮明)	II - 1		
43	63 - 64 - 35	#	*	*	半隆起文 亂形文 瓦瓦利突( L.R.側板)	I - 9	98	50 - 54 - 46 - 50	#	#	沈鉢文(圓心凹法文)	#		
44	10 - 24 - 26 - 35	#	*	*	半隆起・後起文 大羽根状瓦瓦利突	I - 9	99	10 - 14 - 31 - 35	#	口縫	熟希任微文(多絞北巻頭)	II - 1		
45	45 - 45 - 45	#	漆鉢	体	半隆起文 亂形文	I - 2	100	*	#	#	熟希任微文( # )	#		
46	40 - 45 - 45	#	*	*	隆起文	I - 10	101	10 - 14 - 26 - 30	#	#	熟希任微文( # )	#		
47	51 - 54 - 50	I	*	*	*	#	102	15 - 19 - 26 - 30	#	#	熟希任微文( # )	#		
48	10 - 14 - 31 - 35	Ⅲ	#	体	半隆起・深起文	I - 4	103	10 - 14 - 26 - 30	#	#	熟希任微文( # )	#		
49	50 - 54 - 46 - 50	#	*	*	隆起文	W - 1	104	60 - 26 - 30	#	口縫	熟希任微文( 隆起文 )	II - 2		
50	20 - 31 - 34	Ⅲ	#	口縫	半隆起文 商子目文	I - 5	105	*	#	#	P	#		
51	45 - 41 - 45	Ⅲ	#	体	半隆起文(ヘラ狀工具)	I - 11	106	*	#	#	( 104 - 105 同一個体 )	#		
52	10 - 24 - 26 - 35	#	#	体	隆起文	I - 10	107	25 - 29 - 51 - 55	#	#	熟希任微文(漆巻文) 塗土筋跡付	#		
53	10 - 14 - 26 - 30	#	*	*	半隆起文 沈鉢(へら狀工具)	I - 11	108	X - 0	/	口縫	熟希任微文(漆巻文)	#		
54	X - 0	/	*	*	*	#	109	10 - 24 - 26 - 35	#	浅溝	熟希任微文(漆巻文)	#		
55	56 - 59 - 55 - 50	Ⅲ	#	*	隆起文	W - 1	110	15 - 19 - 26 - 30	#	深溝	熟希任微文(漆巻文・漆巻文) 肩起縫	#		

No	出土場所	層	器形	部位	文様	分類
133	19-24-26-30	Ⅲ	口縁	造点正文(陰刻区間に複数位置)	面-2	
122	21-22-31-34	I	口縁	造点正文(横幅) 横縞(沈縞)地文( L.R.斜位)	面-	
133	63-41-45	II	口縁	造点正文(横幅) 沈縞	面-	
114	10-35	II	口縁	造点正文(横幅) 沈縞(左列・溝縞・盤)	面-	
115	60-26-30	II	口縁	造点正文(横幅) 横縞(左列) 溝縞(左列)	面-	
116	60-50	II	口縁	造点正文(横幅・複数底形) (L.R.斜位)	面-	
117	64-50	II	口縁	造点正文(陰刻区間に沿う)(L.R.斜位)	面-	
118	60-64-41-45	II	口縁	造点正文(陰刻区間に沿う) 造点(左列)	面-	
119	55-58-51-55	II	口縁	造点正文( )	面-	
120	10-24-25-35	II	口縁	造点正文( ) #及び充腹施文	面-	
121	40-26-30	II	口縁	造点正文(横位左列) 地文( L.R.斜位)	面-3	
122	45-41-45	III	口縁	#	面-	
123	21-22-31-34	I	口縁	造点正文(陰刻区間に複数位置) 竹縞文	面-	
124	60-64-51-55	III	口縁	造点正文(陰刻区間に複数位置) 竹縞(左列) 陰刻(右列)	面-	
125	20-41-45	II	口縁	造点正文(陰刻区間に複数位置) 沈縞文	面-4	
126	10-24-36-35	II	口縁	造点正文(陰刻区間に複数位置) 沈縞文	面-	
127	51-54-26-30	II	口縁	系形文(半竹竹彌) 陰縞・沈縞文	面-10	
128	15-19-26-30	II	口縁	造点正文(陰刻区間に系形文に压す)	面-4	
129	51-54-26-30	II	口縁	系形文(127と同一個体)	面-10	
130	50-54-46-50	III	口縁	刺突(竹縞・株縞) 沈縞	面-1	
131	10-24-25-30	II	口縁	造点正文(横位左列・陰縞) 沈縞文	面-2	
132	20-24-26-30	II	口縁	沈縞(前足正列・後足正列) 沈縞	面-1	
133	#	口縁	沈縞(横位正列・底縞状) 陰縞	造点	#	
134	X-O	口縁	沈縞	粘土縫合跡(アフターフラッシュ)	#	
135	60-20	I	口縁	沈縞 粘土縫合跡(アフターフラッシュ) 沈縞文	面-2	
136	15-19-26-30	III	口縁	沈縞 粘土縫合跡	面-1	
137	21-22-31-34	I	口縁	陰縞 陰縞(左列) 造点(右列) 沈縞	#	
138	56-59-66-50	III	口縁	造点正文(陰刻区間に沿う) 沈縞	面-5	
139	55-59-66-60	III	口縁	粘土縫合跡 沈縞 地文( L.R.斜位)	面-3	
140	50-54-46-50	III	口縁	沈縞 沈縞文(不透明)	面-1	
141	40-26-30	II	体	沈縞 沈縞文(不透明)	#	
142	51-54-26-30	II	体	沈縞 沈縞文( L.R.斜位)	#	
143	55-41-45	II	体	沈縞 沈縞文( L.R.斜位)	#	
144	20-24-26-30	II	体	粘土縫合跡(沈縞) 沈縞(左列) 沈縞文( L.R.斜位)	面-5	
145	#	体	沈縞 粘土縫合跡(沈縞) 沈縞(左列) 沈縞文( L.R.斜位)	面-4		
146	25-29-50	II	体	粘土縫合跡(調整) 沈縞( L.R.斜位)	#	
147	55-59-51-55	III	体	粘土縫合跡(調整) 沈縞 地文( L.R.斜位)	#	
148	60-64-51-55	III	体	粘土縫合跡(沈縞) 沈縞( L.R.斜位)	#	
149	35-36-26-30	II	口縁	網目(させられた) 陰縞 沈縞(左列) ( L.R.斜位)	面-	
150	30-24-26-35	II	口縁	#	#	
151	30-35	II	口縁	造点正文( L.R.斜位) 純形文	面-1	
152	41-56-56-60	II	体	純形文 沈縞文( L.R.)	面-2	
153	16-14-26-30	II	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	#	
154	30-26-30	II	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	#	
155	50-54-26-30	II	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	#	
156	50-26-30	II	口縁	純形文 沈縞文	#	
157	35-18-28-31	II	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	#	
158	30-26-30	II	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	#	
159	X-O	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	面-4		
160	51-54-26-30	III	口縁	純形文( L.R.)	#	
161	25-36-36-30	II	口縁	純形文( L.R.)	#	
162	30-14-21-35	II	口縁	純形文(複数による)	面-3	
163	61-65-56-60	II	口縁	純形文 沈縞文( L.R.)	面-2	
164	16-24-26-30	II	口縁	純形文( L.R.)	面-4	
165	35-36-26-30	II	口縁	純形文( L.R.)	#	
166	10-24-26-35	III	口縁	体	造点正文(陰刻区間に複数位置)	面-1
167	51-54-26-30	II	口縁	体	網目(させられた)	面-2
168	S.M.214	I	口縁	体	網目(させられた)	#
169	20-26-30	II	口縁	体	#	#
170	30-26-30	II	口縁	体	網目(させられた)	面-1
171	50-54-46-50	II	口縁	体	#	#
172	20-24-26-30	II	口縁	体	網目(させられた)	面-2
173	61-65-56-60	II	口縁	体	#	#
174	50-54-46-50	II	口縁	体	網目(させられた)	面-1
175	50-54-26-30	II	口縁	体	#	#
176	55-59-52-55	II	口縁	体	#	#
177	35-26-30	II	口縁	体	網目(させられた)	面-2
178	10-24-26-30	II	口縁	体	#	#
179	15-19-26-30	II	口縁	体	#	#
180	10-14-21-35	II	口縁	体	#	#
181	70-26-30	II	口縁	体	網目(させられた)	面-1
182	15-19-26-30	II	口縁	体	#	#
183	54-30	II	口縁	体	網目(させられた) (R.P.003)	面-2
184	X-O	口縁	体	体	#	#
185	S.T.66	F	口縁	体	網目(させられた) (R.P.005)	面-1

表-8 土器観察一覧(造形)

No	出土場所	層	器形	部位	文様	分類
186	S.K.1	I	口縁	半隆起文 純形文	I-2	
187	#	#	体	半隆起文 純形文	#	
188	#	#	体	半隆起文 薄北地文( L.R.斜位)	I-1	
189	#	#	体	半隆起文(陰刻区間に沿う) 沈縞(左縞)	面-2	
190	#	#	体	沈縞(交叉型) 沈縞(底)	面-1	
191	S.K.2	I	口縁	半隆起文 純形文	I-2	
192	#	#	体	半隆起文 刑文 薄北地文( L.R.斜位)	I-1	
193	#	#	体	隆起文(左縞) 純形文	V-4	
194	S.K.9	II	口縁	隆起破文 沈縞 刑文	H-7	
195	#	#	体	半隆起文 花形文	I-2	
196	#	#	体	隆起破文 沈縞 刑文	H-7	
197	#	1	体	半隆起文 沈縞文	I-2	
198	#	#	体	半隆起文 仄形文 陰子目文(ヘテ)	I-5	
199	S.T.10ビット	F	口縁	沈縞文 薄北地文( L.R.斜位)	面-1	
200	#	#	体	半隆起文 薄北地文(不透明)	I-1	
201	#	#	体	沈縞 粘土縫合跡(アフターフラッシュ) 刑文	面-2	
202	S.T.6ビット	I	口縁	半隆起文 薄北地文( L.R.斜位)	I-1	
203	#	#	体	半隆起文 純形文 薄北地文(不透明)	I-2	
204	#	#	体	半隆起文 沈縞 粘土縫合跡(アフターフラッシュ) 刑文	H-4	
205	#	1	口縁	半隆起文 純形文	I-2	
206	S.K.17	II	口縁	半隆起文 花形文	#	
207	#	#	体	半隆起文 花形文	#	
208	E.P.28	I	体	半隆起文 花形文	#	
209	#	#	体	半隆起文 薄北地文( L.R.斜位)	I-1	
210	S.T.10ビット	F	口縁	半隆起文 薄北地文( L.R.斜位)	I-2	
211	#	#	体	半隆起文 純形文	#	
212	E.P.54	I	体	半隆起文 薄北地文( L.R.斜位)	II-7	
213	#	#	体	半隆起文	I-1	
214	#	F	浅	半隆起文 薄北地文( L.R.斜位)	#	
215	E.P.72	F	深	半隆起文 純形文	#	

No.	出 土 碑 横	横	竖	部位	文	釋	分 類	No.	出 土 碑 横	横	竖	部位	文	釋	分 類	
216	S T 72	F	深	体	半降起文	降起文 瓦形文	I-2	271	S T 86	2	深脚	体	半降起文	格子往文 (负责工机)	I-5	
217	S T 81	2	x	x	半降起文	藏文地文 (L R横位)	I-1	272	x	x	x	口捺	降起脚	渐点瓦文 脚行文	III-4	
218	x	x	x	x	半降起文	藏文地文 (不释明)	x	273	x	x	x	体	沈源 (「今状工具」此碑把赤就文)	III-1		
219	x	x	x	x	半降起文	藏文地文 (L R横位)	x	274	x	x	x	x	半降起文	藏文地文 (黄 L横位)	I-1	
220	x	x	x	x	半降起文	藏文地文 (L R横位)	x	275	S K 95	1	x	x	半降起文	藏文地文 (黄 L脚 - 横位)	x	
221	S T 81	F	x	x	藏文地文 (L R横位)	x	V-1	276	S K 95	1	x	x	半降起文	乐乐文	I-2	
222	x	1	x	x	半降起文	藏文地文 (L R横位)	I-1	277	x	x	x	x	降起脚	沈源 交牙利黄文	III-1	
223	S T 82	x	口捺	半降起文	乐乐文	降起文	I-4	278	S T 89 ピット	x	x	x	口捺	降起脚 - 沈源 红土越利特、斯目文	x	
224	x	x	x	x	沈源文	藏文地文 (不释明)	II-9	279	S T 96 ピット	x	x	x	x	热齐压底文 (残碑通底区画)	III-2	
225	S K 83	2	x	口捺	半降起文	乐乐文	I-2	280	S T 96	x	x	体	半降起文	泰面と密に藏文U字 (U)	I-2	
226	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	x	281	x	x	x	x	降起脚文 (或状) 藏文地文 (L R横位)	III-8		
227	x	x	x	x	热齐压底文	乐乐文	III-2	282	S M 203	F	x	x	半降起文	乐乐文 (横位通线、薄草文)	I-2	
228	x	1	x	x	热齐压底文	乐乐文	III-1	283	S M 206	x	口捺	半降起文	乐乐文 (黄 L脚位通文)	I-1		
229	x	2	x	x	热齐压底文	乐乐文 (R L横位)	x	284	x	口捺	x	x	降起脚 - 乐乐文 (热齐压底文)	III-4		
230	x	x	x	x	热齐压底文	乐乐文 (R L横位)	x	285	S M 209	1	x	x	热齐压底文	(口形) 泰面压底文 伐做文	III-1	
231	S T 85	V	x	x	热齐压底文	乐乐文	III-2	286	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (口形中口肥厚)	I-2	
232	x	2	x	口捺	半降起文	乐乐文	I-1	287	S M 210	F	x	x	半降起文	乐乐文	x	
233	x	V	x	x	半降起文	乐乐文 (口形)	I-5	288	S M 213	x	x	x	口捺	热齐压底文 (乐乐通低) 降起脚区画	III-2	
234	x	2	x	x	热齐压底文	乐乐文	III-2	289	x	1	x	x	热齐压底文	热起脚 - 沈源	II-4	
235	S T 86	V	x	x	热齐压底文	乐乐文	x	290	x	F	x	x	热齐压底文	藏文地文 (热齐 - 1 r脚)	III-2	
236	x	x	x	x	口捺	热齐压底文 (热齐上位同位) 乐乐	I-3	291	x	x	x	x	热齐压底文 (热齐) 热齐地文 (J S脚位)	x		
237	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (1 r横位)	I-1	292	x	x	x	x	热齐压底文 (热齐 - 瓦形)	III-1		
238	S T 88	x	口捺	热齐压底文 (口形位通) 口经脚位 - 乐文	III-2	293	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-2			
239	x	x	x	x	热齐压底文	乐乐文 (位通同位) (L R横位)	III-3	294	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (热齐压底文 (走判))	x	
240	x	F	x	x	沈源文	藏文地文 (1 r横位)	III-1	295	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (波口捺)	x	
241	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-5	296	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (挑口捺)	x	
242	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-3	297	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (乐乐 - 瓦形)	x	
243	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-1	298	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	x	
244	S T 89 ピット	x	口捺	热齐压底文 (横位通) (L R横位)	III-2	299	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (热齐压底文)	I-4			
245	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-2	300	x	x	x	x	半降起文	降起入藏文 乐乐文 (ウ)	I-5	
246	S T 95	V	x	x	半降起文	乐乐文	I-1	301	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (波口捺)	I-2	
247	x	x	x	x	口捺	沈源文	藏文地文 (1 r横位)	II-9	302	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (热齐压底文)	x
248	S T 99 ピット	1	x	x	热齐压底文 (通底文)	III-2	303	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (乐乐 - 瓦形)	x		
249	x	x	x	x	体	半降起文	藏文地文 (L R横位)	I-1	304	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (热齐压底文)	x
250	x	x	x	x	口捺	半降起文	乐乐文	I-3	305	x	F	x	x	竹管平行沈源	藏文地文 (R L横位)	I-1
251	S T 99	2	x	x	体	半降起文	乐乐文	I-1	306	x	x	x	x	竹管平行沈源	藏文地文 (R L横位)	x
252	x	x	x	x	体	半降起文	乐乐文	I-3	307	x	x	x	x	竹管 (今状工具) 通底文	II-9	
253	x	x	x	x	体	半降起文	乐乐文 (不释明)	I-1	308	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (L R横位)	I-1
254	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (R L横位)	x	309	x	x	x	x	斜行撇足 (2脚位) 通底文 (1 r横位)	Y-2		
255	S T 92 ピット	F	x	x	半降起文	乐乐文 (L R横位)	x	310	x	x	x	x	斜行撇足 (1 r横位) 通底文 (热齐有)	x		
256	S T 94 ピット	x	口捺	降起脚	乐乐文	II-7	311	x	x	x	x	斜行撇足 (热齐なしし) L Rと R L横位	Y-3			
257	x	x	x	x	体	半降起文	乐乐文 (口形)	I-5	312	x	1	x	x	斜行撇足 (L R横位) 乐乐文	Y-4	
258	x	x	x	x	半降起文	藏文地文 (R L脚 - 斜位)	I-1	313	x	F	x	x	斜行撇足 (L R横位) 乐乐文	x		
259	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	x	314	S M 214	1	x	口捺	半降起文	乐乐文	I-2	
260	S T 98	1	x	x	半降起文	乐乐文	x	315	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 降起入藏文	x	
261	x	x	x	x	体	半降起文 (互立脚 - 伸状工具) 乐乐	II-5	316	x	F	x	x	半降起文	乐乐文 降起入藏文	x	
262	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (波口捺)	I-2	317	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	x	
263	x	x	x	x	降起脚	沈源	II-7	318	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	x	
264	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-1	319	S M 216	F	x	x	热源压底文 (手行沈源) 乐乐文 (热齐压底文)	III-1		
265	x	x	x	x	体	藏文地文 (L R横位)	Y-1	320	x	1	x	x	半降起文	伸状工具	I-1	
266	x	x	x	x	口捺	热齐压底文 (热齐上位) 乐乐文	II-2	321	x	x	x	x	半降起文	乐乐文 (热齐压底文) 降起脚	III-2	
267	x	x	x	x	体	半降起文	乐乐文 (波口捺文)	I-2	322	S M 217	x	x	x	x	热齐压底文 (热齐多段地文)	x
268	x	2	x	口捺	热齐压底文 (口形位通) 口捺通底	x	323	x	x	x	x	口捺	热齐压底文 (手行沈源) 乐乐文 (热齐压底文)	III-1		
269	x	x	x	x	体	半降起文	乐乐文 (手行) 乐乐文	I-5	324	x	x	x	x	半降起文	乐乐文	I-7
270	x	x	x	x	口捺	半降起文	乐乐文	I-2	325	S M 218	F	x	x	降起脚 - 沈源 (幽幽影波况口捺)	II-7	

No.	出	土	造	構	層	形	態	文	様	分	類
326	S M	218	F	深	口縫	半降起文	闊文地文( L.R側)	1-1			
327	#	#	F	消	燃赤田原文(側位) 降起文・前位( R.L)	II-2					
328	#	#	F	口縫	燃赤田原文(側位平行)	#					
329	#	1	F	体	半降起文	燃子日文(「今」後工具)	1-5				
330	#	F	F	頭	燃赤田原文(開口縫 Y字・連弧)	III-2					
331	#	#	F	口縫	燃赤田原文(降位・隣面内凹)	#					
332	#	#	F	頭	半降起文	降起入能文	1-1				
333	S M	219	F	口縫	降起文	燃赤田原文( L.R側対)	II-4				
334	#	1	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側対地文)	1-1				
335	#	F	F	体	半降起文	燃子日文(「今」後工具)	1-5				
336	#	#	F	口縫	行脚文(結節) 拝う L.R側)	V-2					
337	#	1	F	口縫	半降起文	燃赤田原文	III-1				
338	#	F	口縫	燃赤田原文(側位對)	III-1						
339	#	#	F	体	半降起文	燃赤田原文(「今」後工具)	1-5				
340	S M	226	F	口縫	燃赤田原文(側位・連弧)	III-2					
341	#	#	F	体	半降起文	闊文地文(磨滅で不明)	1-1				
342	S M	228	F	口縫	半降起文	闊文地文(金管結合?)	II-7				
343	S M	229	1	口縫	降起文	闊文地文	IV-1				
344	S K	230	#	F	半降起文	沈母文	闊文地文	II-7			
345	S K	231	F	口縫	半降起文	瓜形文(管)	I-3				
346	#	#	F	体	半降起文	燃子日文(「今」後工具)	1-5				
347	#	#	F	口縫	半降起文(2条1種の燃赤文)	II-7					
348	#	#	F	燃赤田原文(燃・火形)	III-2						
349	#	#	F	口縫	降起文・比縫	闊文地文( L.R側)	II-7				
350	#	#	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側)	I-1				
351	#	#	F	口縫	半降起文	燃赤田原文(「今」後工具)	I-5				
352	S P	234	#	F	燃赤田原文(側位對)	闊文地文	III-2				
353	#	#	F	燃赤田原文(2条1種の燃赤文)	II-4						
354	#	#	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側対)	I-1				
355	#	#	F	口縫	降起文	闊文地文( X・Y字)	II-7				
356	S P	235	F	口縫	燃赤田原文(側位・偏位對)	闊文地文	II-2				
357	S P	236	#	F	体	半降起文	形形文(竹管)	I-2			
358	S M	241	#	F	口縫	武縫(「今」後工具)	闊文地文( L.R側)	II-9			
359	#	#	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側)	II-1				
360	S M	242	F	口縫	沈造文	燃赤田原文(「ルーブ既成」)	II-2				
361	#	#	F	口縫	半降起文	燃赤田原文(「ルーブ既成」)	II-2				
362	#	#	F	体	半降起文	沈造文(「苦得含身」)	II-7				
363	#	#	F	口縫	半降起文	沈造(「火形」)	II-9				
364	#	#	F	体	半降起文	沈造(「火形」)	II-7				
365	#	#	F	口縫	半降起文	闊文地文( 瓢形文)	I-4				
366	S M	243	#	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側)	I-1			
367	S K	244	#	F	半降起文	瓜形文	I-2				
368	#	#	F	口縫	筋筋斜行繩文( I+R側)	折し当し繩	V-1				
369	#	#	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側)	I-1				
370	#	#	F	半降起文	その燃細千字	*					
371	S K	251	F	口縫	燃赤田原文(側位平行三段)	闊文地文	III-2				
372	#	#	F	口縫	沈造文	燃子日文(「上」斜位)	II-7				
373	#	#	F	体	半降起文	闊文地文( L.R側)	I-1				
374	S K	255	#	F	口縫	丸縫	闊文地文(金器縫合文)	II-7			
375	#	#	F	口縫	丸縫	闊文地文( L.R側)	II-5				
376	#	#	F	半降起文	瓜形文(通子縫合)	I-2					
377	#	#	F	体	半降起文	燃子日文(「今」後工具)	1-5				
378	#	#	F	半降起文	子目日文(「今」後工具)	#					
379	S P	254	#	F	半降起文	瓜形文	闊文地文( L.R側)	I-1			
380	#	#	F	半降起文	燃子日文(「今」後工具)	I-5					

No.	出	土	造	構	層	形	態	文	様	分	類
381	S M	254	F	深溝	体	半降起文	闊文地文( L.R側)	I-1			
382	S M	255	#	F	斜行	燃赤田原文( L.R側)	V-4				
383	#	#	F	口縫	半降起文	燃子日文(「今」後工具)	I-5				
384	S M	256	#	F	頭	沈造(「今」後工具)	穴圓側文	IV-1			
385	#	#	F	体	半降起文	( ) 沈起縫	r 地文	#			
386	S M	259	#	F	頭	沈起縫(燃文(無縫))					
387	S M	261	#	F	斜	半降起文	(人頭文)	I-1			
388	#	#	F	口縫	燃起縫	沈縫	I-11				
389	S K	262	#	F	口縫	燃赤田原文(「降(高)向文」)	III-2				
390	S K	263	#	F	口縫	燃赤田原文(「側位束縛・通縫文」)	#				
391	#	#	F	体	降起縫	沈縫	闊文地文	II-7			
392	S K	264	#	F	頭	降起縫	半降起文	#			
393	#	#	F	口縫	口縫	口縫	#				
394	S K	303	1	F	頭	沈縫(「今」後工具)	闊文地文	II-9			
395	#	#	F	体	半降起文	爪形文	是則向(前文)	I-2			
396	#	#	F	口縫	無脚斜行繩文( I )						
397	S T	304	#	F	半降起文	闊文地文( L.L)	I-1				
398	#	#	F	半降起文	平行成繩文(皆首)	#					
399	#	#	F	半降起行繩文( I-L)							
400	S T	305	#	F	口縫	半降起文	瓜形文	#			
401	#	#	F	燃赤田原文(側位)	闊文地文( 磨滅)	III-2					
402	#	#	F	燃赤田原文(「今」後工具)	闊文地文( L.R)	IV-1					
403	#	#	F	燃赤田原文(側位對)							
404	#	#	F	半降起文	形形文	降起文	刺繡	I-2			
405	#	#	F	半降起文	瓜形文	(組紐)	#				
406	#	#	F	半降起文	瓜形文	(組紐)	#				
407	#	#	F	傳	燃赤田原文(側位・瓜狀)	L.R側地文	IV-1				
408	S T	209	#	F	口縫	燃赤田原文(側位・連弧)	闊文地文	III-2			
409	B 地區	X-0	#	F	頭	降起(「今」後工具)	闊文地文	II-9			
410	#	#	F	口縫	燃赤田原文(側位)	闊文地文	III-2				
411	#	#	F	体	斜行繩文( L.R側)	V-4					
412	#	#	F	半降起文	闊文地文( L.R側)	II-1					
413	#	#	F	口縫	沈縫	闊文地文	II-9				
414	#	#	F	傳	沈縫	闊文地文( L.R側)	IV-1				
415	#	#	F	口縫	燃赤田原文(側位)	II-2					
416	#	#	F	燃赤田原文(側位)	燃赤田原文(側位)	#					
417	S T	90	F	口縫	降起縫(通縫)	筋筋通縫(筋縫)	II-4				
418	S M	218	3	F	口縫	沈起縫	闊文地文( # )	II-7			
419	S M	213	1	F	頭	降起縫	燃赤田原文	I-2			
420	11-34	II	#	F	口縫	半降起文	丸縫(「今」後工具)	I-1			
421	#	#	F	頭	半降起文	闊文(全周)	I-10				
422	#	#	F	口縫	半降起文	瓜形文(無突)	I-2				

#### ■ 繩書一貫書の記入について

表記は、接縫部と同一で、由上地縫・通縫ではテリード名。接縫部を記入した。幅・深さでは、通縫の場合( I )・( II )等の数字を用いて区別する。通縫部には、上部斜筋系手芸でない上部斜筋系手芸に付いた上部斜筋系手芸に主眼をもった、斜筋系手芸(斜筋繩)。次に、斜筋系手芸(斜筋繩)化(斜筋繩)。次に、斜筋系手芸(斜筋繩)化(斜筋繩)化(斜筋繩)である。

## (2) 石器

今回の調査で出土した石器は、整理箱で59箱である。その種類は、石鎌・石錐・石槍・石匙・範状石器・搔器・削器・磨製石斧・凹石・磨石・石棒・石皿がある。石材は、打製石器では大半が頁岩で、他に石英等が用いられている。磨製石器では、砂岩・安山岩・花崗岩等が用いられ、他に量的には少ないが流紋岩が磨製石斧にみとめられる。

なお本節において、出土数の少ない石器については細別せず、個々の説明にとどめた。

### 石鎌（第17図 図版14）

出土量は全体的に少なく、調査区の南区からと表面採集のものが数点数えられるのみである。中茎のない無茎のもので、二等辺三角形を呈する。側縁部はほぼ直線的にのび、身の中央部から鋭い先端部を作出している。基部は破損しているが、基部の抉りはやや深く、脚部はその断面から比較的細身であることが推定される（1）。また、身の中央部から脚部にかけては平坦に調整されているが、ピッチ等による着柄痕跡はみとめられない。

表面採集のものは、先端部が破損しているが、二等辺三角形を呈し（1）よりも若干大形である。無茎で、基部の抉りはU字形に深く施されて、側縁部は直線的にのび、脚部はわずかに内湾し細く鋭い形状を示す。

### 石錐（図版14）

不定形な縦長剥片の先端に両側縁から調整を加え、鋭部を作出している。基部にはあまり加工が行なわれず、大きな剝離痕を残すのみである。また基部と錐部との境界も不明瞭である。

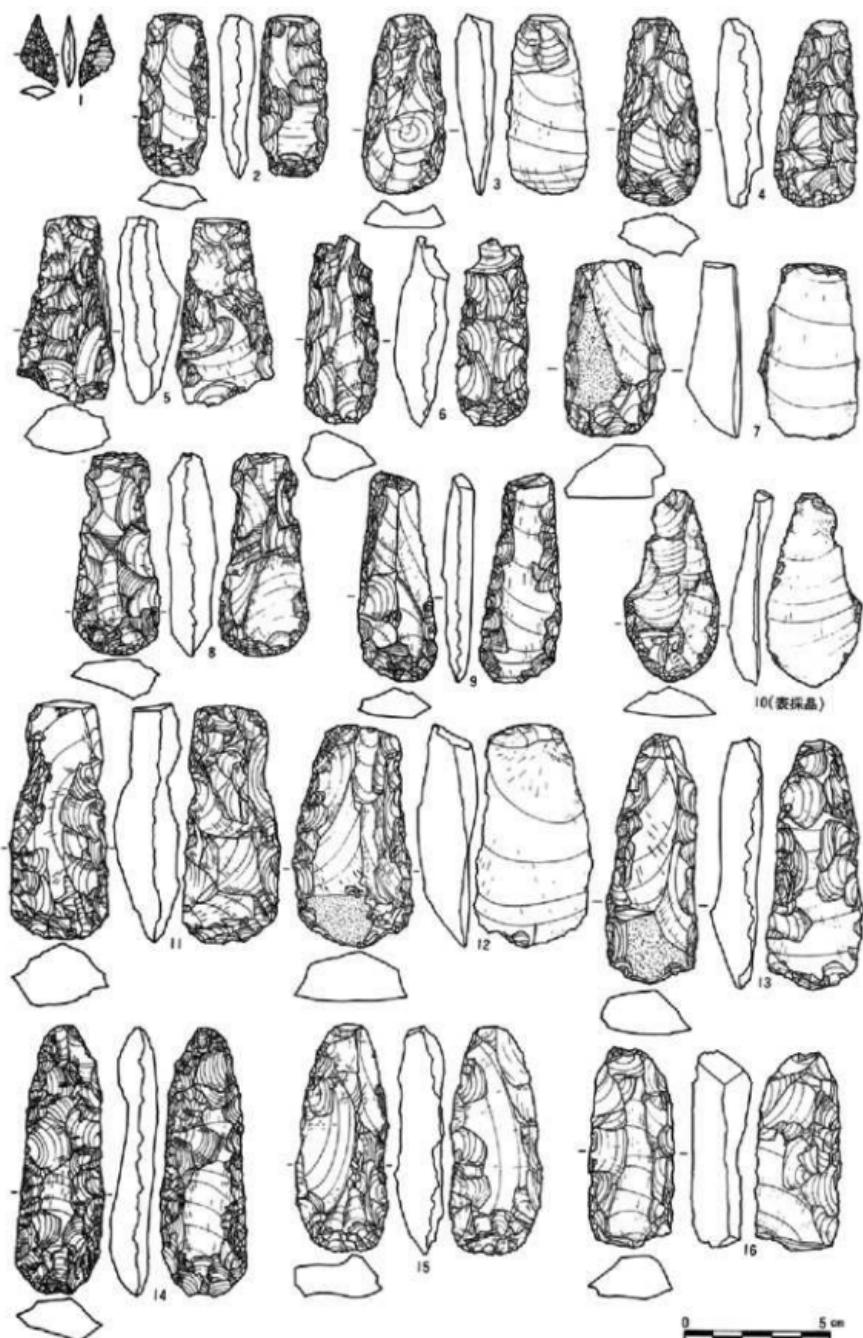
### 石槍（図版14）

基部から周囲に両面加工を施した、木葉形を呈する小形の石槍である。身の背面は高く稜をなし、やや粗い剝離が加えられ、主要剝離面は周囲に細かい連続した剝離が丁寧に施されて、側縁から先端部にかけて鋭角な刃部を作り出している。また基部もバルブが取り除かれて、薄く平坦に調整されている。

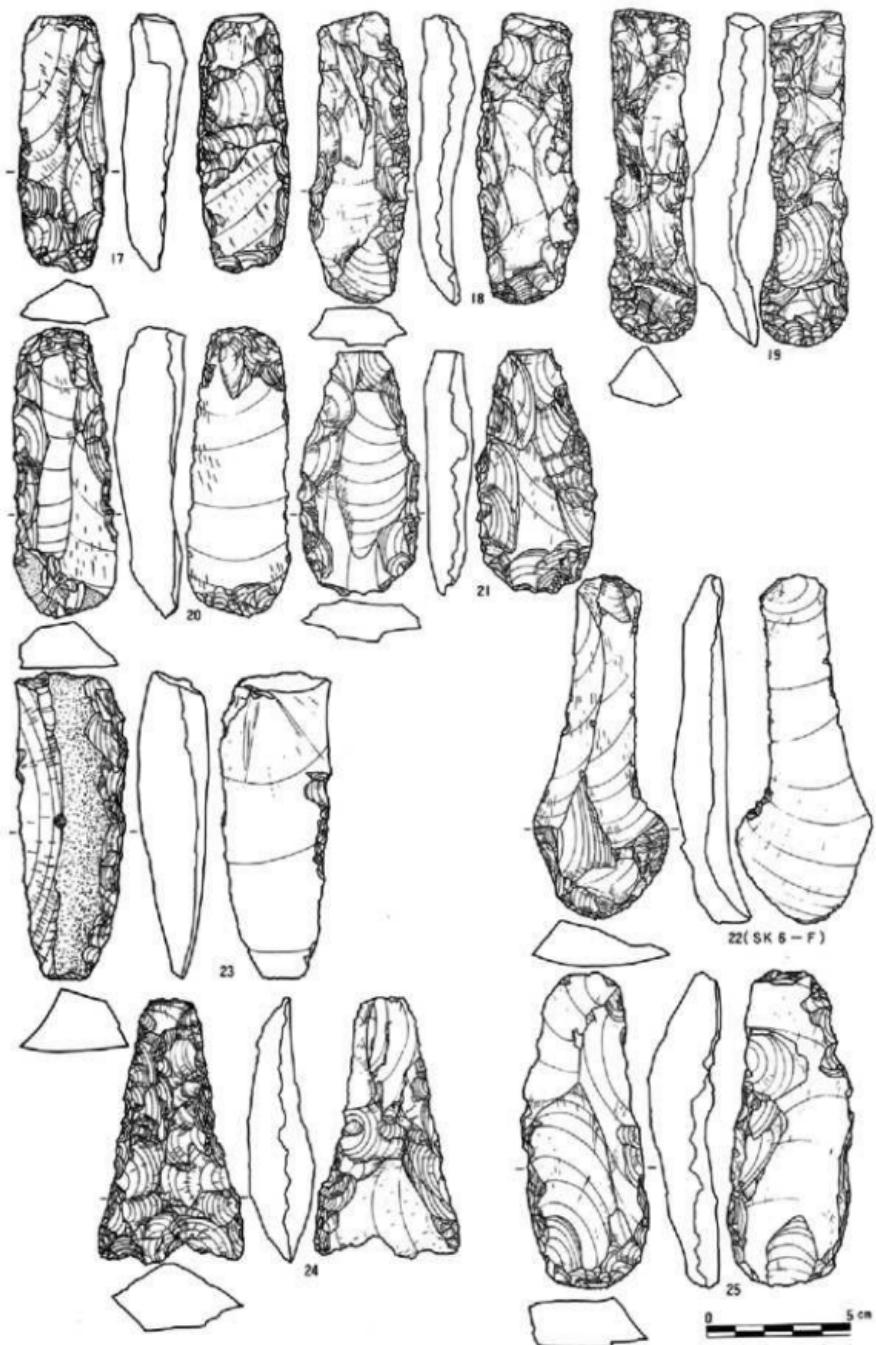
本石器は、当初比較的鋭利な基部を示すことから、範状石器ないし搔器の範疇に入ると思われたが、先端部の作りが入念に調整され鋭く作出されていることや石鎌よりも身が厚く大形であることなどの点から分類した。

### 石匙（図版14）

橢円形を呈し、身の厚い縦長剥片を用いた縦形石匙である。両側縁に浅い抉りを入れ、幅約3cmの大ぶりなつまみを作っている。刃部は右側縁に位置し、片面加工により仕上げられ、丸味を呈する。それ以外の左側縁及び基部については、若干の調整を加えるのみで、全体に粗い作りである。



第17図 石器実測図(1)



第18図 石器実測図(2)

### 範状石器（第17図2～6・8・9・11～16 第18図17～21・24・25 図版14）

縦長で先端に刃部を有し、範状の形をした石器である。通称石範とも呼ばれる。その外形及び刃部の特徴により、次の5つに分けられる。

#### a類（2～7・9・13～18・20・25）

両側縁がほぼ平行にのび、刃部と基部との幅の差があまり違わない短冊形を呈する石器である。刃部は片面加工によるもの（3・7・25）と両面加工によるもの（2・4・6・8・9・11・13・14・15・17・20・25）とに分けられ、やや直線的なものが多い。刃角は比較的鋭角に仕上げられている。

素材となる剥片は、大部分が縦長のものであるが、中に横長のもの（15）もみとめられる。

#### b類（8・11）

外形は、a類に類似するが、基部よりに左右から浅く抉りを施す特徴を示す石器である。そのため、石匙のつまみのような基部が作られるが、同石器のそれよりも粗い作りである。刃部は、直線的で両面から丁寧な剥離が行なわれ、鋭角である。

#### c類（12・21）

側縁部が丸味を呈し、身のやや幅広い石器である。刃部は直線的で、粗い剥離による片面加工である。

#### d類（19）

棒状を呈する身に、丸く舌状に張り出す刃部をもつ石器である。刃部は大きく内側に内湾する。また両面から丁寧な剥離が施されて、丸刃の鋭い刃部を作出している。さらに身の幅よりも刃部幅が広く、身の部分との境界が明瞭である。側縁部から基部にかけては、大きな剥離を加えた後、右側縁部は背面方向から、左側縁部は主要剥離面方向から調整を行ない、ほぼ平行にのびる側縁部を作っている。

本石器は、断面が鳥嘴のように大きく内湾し、鋭い刃部を有する特徴から、搔器に比して刃角がやや鋭角であるが、それに類似した機能であることが推定される。

#### e類（24）

基部が細身で刃部幅が広く、側縁が直線的に開く石器である。そのため、撥状の外形を示す。基部は、両面とも大きく剥離面を残したままほとんど無調整であり、素材の剥片の縁辺部をそのまま用いている。主要剥離面の観察から横長剥片を素材としており、母岩からの打撃面の一方を基部に、片方を刃部に用いたものと思われる。側縁部は主に背面側に調整が行なわれ、身の断面形態は凸レンズ状を呈する。主要剥離面は、比較的幅広の剥離で調整されている。刃部は、一部大きく剥離しているが、鋭い直刃に仕上げられている。

### 搔 器 (第17図10 第18図22 図版14)

縦長剝片の先端に調整を加え、主要剝離面に対して急角度の刃部をもつ石器である。外形は縦長ないし梢円形を呈し、調整はほとんど片面加工である。

(10) は、比較的小形で不整梢円形を呈する。右側縁から刃部にかけて細かな剝離を加え、丸味のある刃部を作っている。左側縁は、大きな剝離痕を残したままである。基部は、刃部に比較して薄く、小さな打撃面とバルブを残したままである。

(22) は、やや大形で縦長のものである。剝片の先端部を除いてほとんど無調整であり、素材から剝離した状態のままである。刃部は、入念に調整が施され半円形の刃部を作り出している。また、基部に対して身の下半から鳥嘴状に内済する断面を示す。基部の方は、棒状に細長く中央に稜があり、その断面形態は三角形を示す。基部は打撃面とバルブを小さく残している。

### 削 器 (第18図23 図版14)

縦長剝片の側縁部に調整を加え刃部とする石器で、片面加工によるものである。刃部は、直線的に作られるため、素材は石刀状の縦長剝片を用いている。

(23) は、柔らかい頁岩を用い、背面に母岩の自然面を縱に残した石器である。右側縁から先端部にかけて調整が見られるが、左側縁は無調整で剝離面のままである。刃部は、約 1.5cm の幅で帯状に剝離が連続し、直線的である。基部は無調整で、広い打撃面とバルブがみとめられる。

### 磨製石斧 (第19図26~34 図版15)

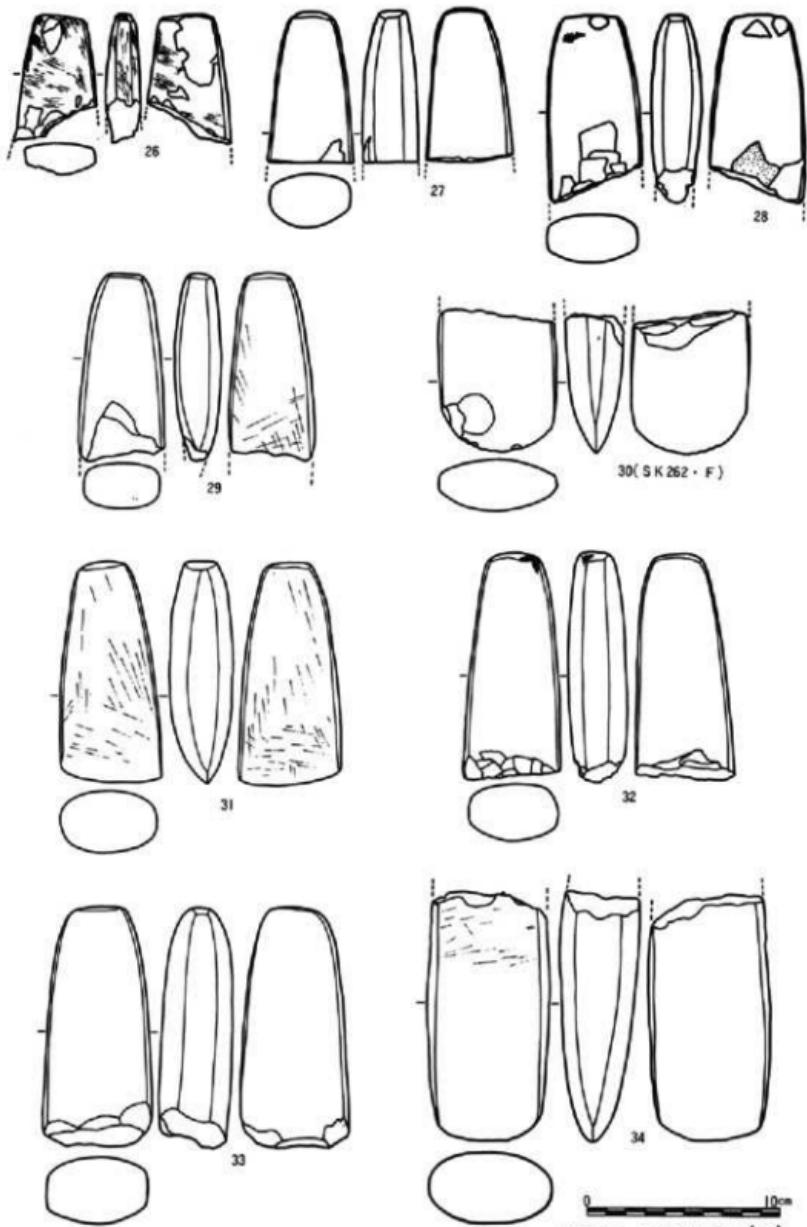
いずれも基部・両側縁及び刃部にかけて丁寧に研磨された、定角式の磨製石斧である。外形は、基部の大きさ並びに側縁部の開き角度等の違いで若干の相違があるが、概ね短冊形を呈する。

石材は、流紋岩を用いているもの (24) も若干見られるが、大半は砂岩・安山岩等が用いられている。

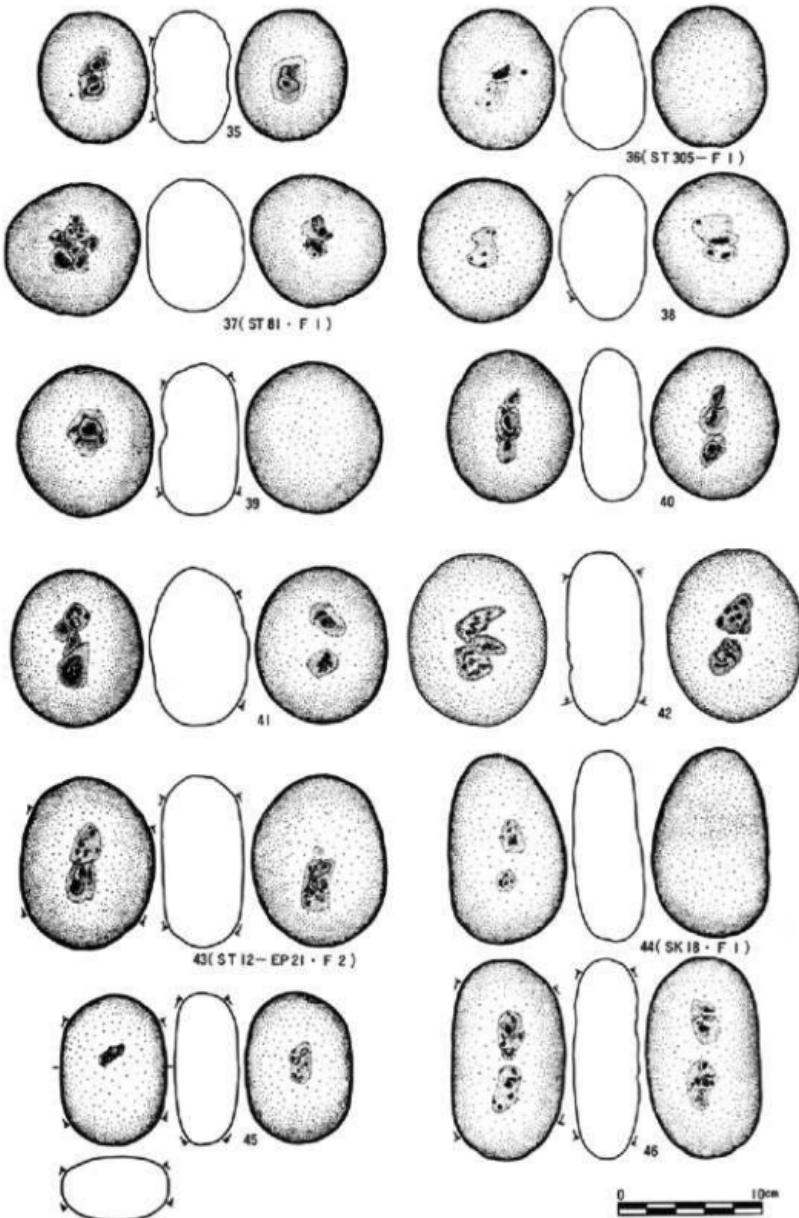
完形品が少なく、身の中央部から折れて基部ないしは刃部のみの破片がほとんどである。また、それらの中には刃部の破損面に、二次的な打痕を残すもの (32・33) があり、刃部が折れた後敲打用に再使用したものと思われる。

断面形態は、偏平で身のやや薄いもの (26・28~30) と梢円形で身の厚いもの (27・31~34) に分けられる。特に、(26) は、各面とも強く研磨されて断面が四角形を呈し、稜線が明瞭であることなどから、鋭利な刃部をもつことが想定され、「のみ」あるいは「手斧」のような機能が推察される。

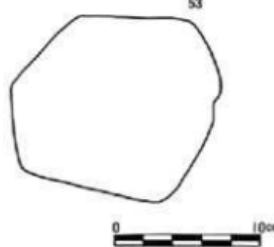
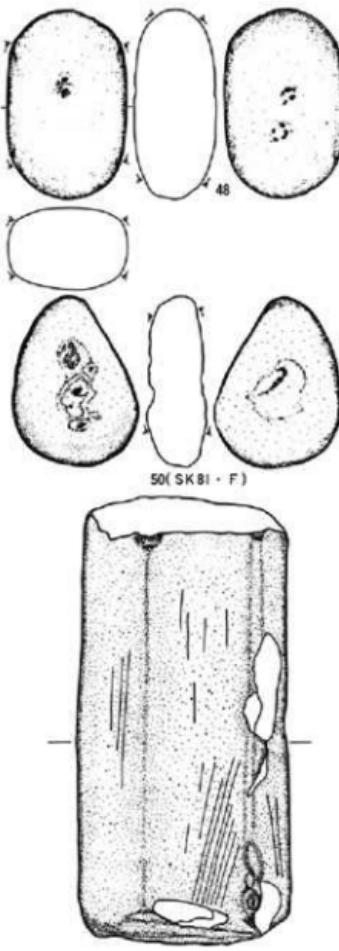
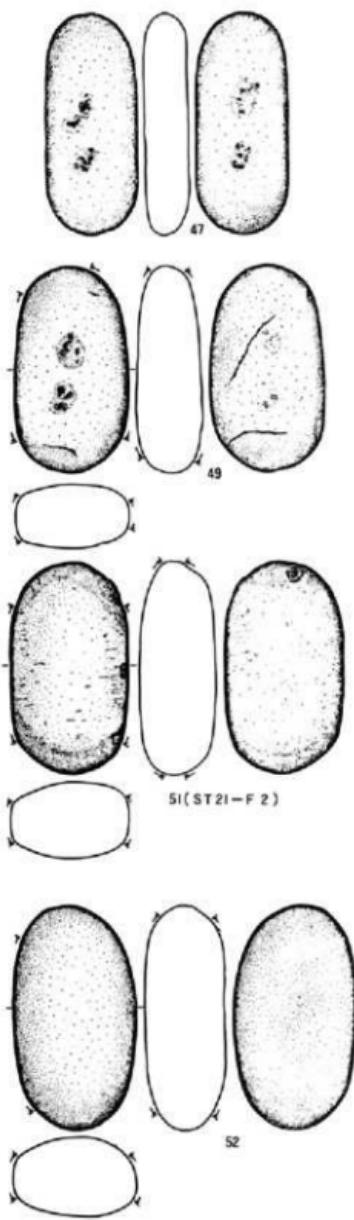
刃部は、丸刃 (30) と直刃 (31・34) のものがあり、いずれも両刃のものである。



第19図 石器実測図(3)

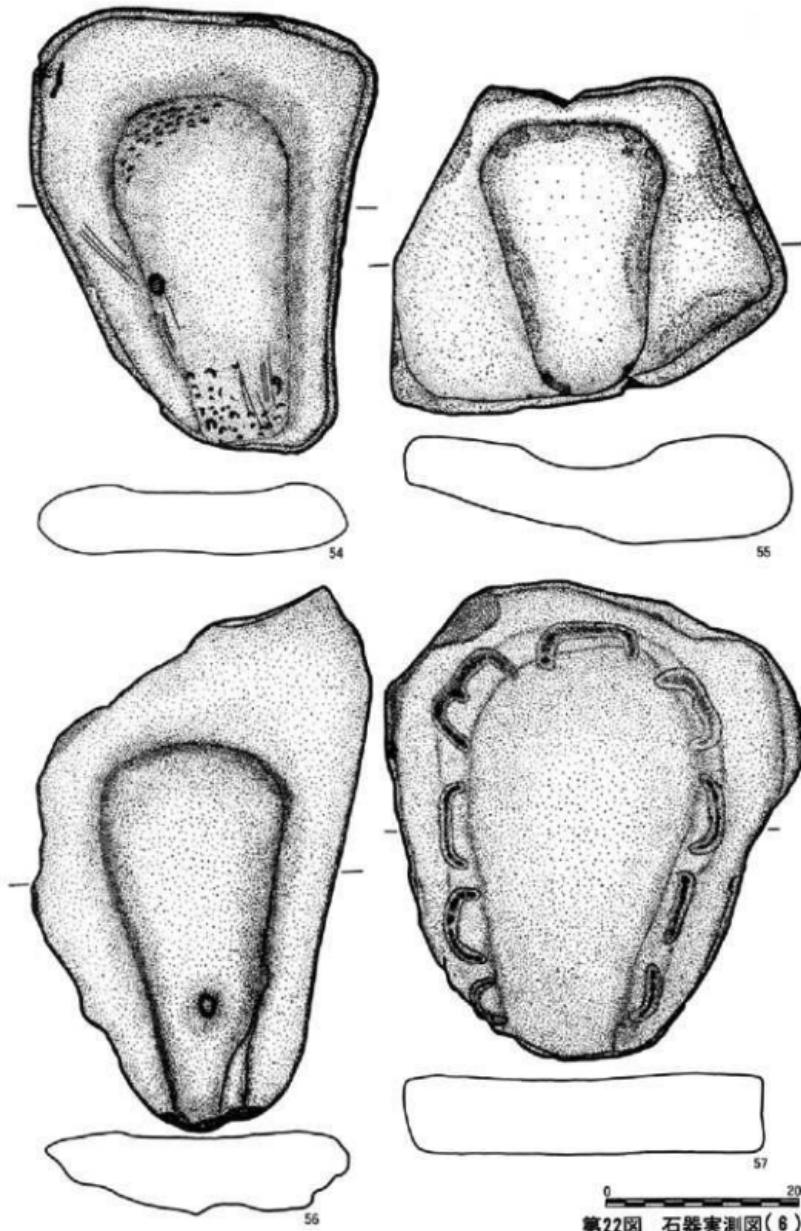


第20図 石器実測図(4)



第21図 石器実測図(5)

0 10cm



第22図 石器実測図(6)

#### 四 石 (第20図35~46 第21図47~50 図版15)

出土石器の中では、出土量が多く遺構内からも多数出土している。偏平な河原石を素材に用い、片面ないし両面に数個の凹みをもつ石器である。また、表面及び側縁部が磨滅している場合があり、磨石に転用しているものも多くみとめられる。

外形により、次の2つに分けられる。

##### a 類 (35~43)

円形を呈するもので、表面中央部に数個の凹みをもつ石器である。凹み部分は、1ヶ所にまとまっているもの(35~39)、列状に連続するもの及び二ヶ所に分散するもの(40~43)などがある。

磨石として転用しているものは、その使用により表面が平滑になり断面形態が角張っている場合が多い(39・43)。

##### b 類 (44~50)

細長い楕円形ないし不整楕円形を呈する石器である。前類に比してその形状から二つに分散するものや、列状につながる凹みを有するもの(44・46~50)が多い。また、大きさも比較的大形(46・49)である。

磨石への転用は、前類と同様であるが、表面の他に側縁部を用いている場合(45・48・49)もみとめられる。

#### 石 棒 (第21図53 図版16)

棒状ないし柱状を呈し、先端部のくびれは不明瞭である。素材には、自然石を用いている。破損品も含め、7点出土している。

(53)は、基部のみであるが自然石の表面を磨いて、柱状の六面体に整えている。各面には、研磨の際の擦痕が残っている。基部底面は、小さな敲打により平面的に仕上げられている。出土した中では、最も大形の石棒である。

#### 石 盆 (第22図54~57 図版16)

大形の偏平な自然石の表面に、皿状の磨面をもつ石器で本遺跡において多数出土している。磨面には小さな敲打が施されて舌状ないし馬蹄形に調整され、基部を除いた周囲を縁どる特徴を示す。

(54)は磨面の敲打痕及びその内外に擦痕が顕著であり、(55)は磨面が擦り減って深く湾曲し、長期間の使用が推定される。また(56)は、細長い舌状の磨面を呈し、比較的平坦である。一方、(57)は板状の自然石を用い、幅広く平滑な磨面を作っている。さらにその周囲には、磨面に向って敲打による鎌状の装飾が9単位めぐらされており、特徴ある石皿である。

## IV まとめ

今回発掘調査した谷地遺跡は、小国盆地の南西部に位置し、荒川の左岸の沖積河岸段丘上に立地し、縄文時代の中期前葉から中葉の集落跡である。本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡29（検出12・確認17）・土壙41（検出14・確認27）・集石31・不明ピット128であり、出土した遺物は主に土器・石器で整理箱に約74箱を数える。

今回は、小国町増岡地内に昭和54年度に一連の県営は場整備事業（井の下地区）に係る緊急発掘調査を実施したものであり、これら記録をまとめたものが本報告書である。

### （1）遺構について

本遺跡で検出された遺構は、遺跡中央部の南北に走る旧地表鞍部をはさんで、大きく分けて東側と西側の平坦地に偏在して分布している。時期的には、縄文時代中期前葉から中葉にかけて、大きく2時に区分される。

#### 第Ⅰ期（中期前葉・大木7b式期）

C地区の中央から西側寄りにある10号住居跡・15号土壙・17号土壙のみである。10号住居跡は、平面形が楕円形を呈し、大きさ4.50m前後を計り、主柱穴の位置が東側と西側の壁寄りにり、台形状を示す位置関係になり、小国町墓窪遺跡の70号住居跡と構造が類似している。土壙の性格は不明である。また、遺物の分布をみると大きく3地域に分けられ、A地区の北側、C地区西側、D地区西側などと第Ⅰ・Ⅱ群土器が出土し、A地区的住居跡・土壙およびD地区的不明ピット群は、この時期に一致する遺構などもあると考えられる。

#### 第Ⅱ期（中期中葉・大木8a式期）

本遺跡の主体となる時期で、A地区からD地区にかけて密集して偏在しており、遺物の分布する範囲と一致している。住居跡はとくにB地区に集中し、それぞれ重複している。平面形は、不整円形あるいは楕円形を呈しており、径4.20～6.24mの大きさになっている。4・12号住居跡は住居跡の中でもやや大形となり径6.00m前後であり、柱穴の配列が共通しており、いずれも2～3回の拡張あるいは建替が認められる。その他住居跡はいずれも径4.00m前後を計り、3～6本の主柱穴を中心に、壁柱穴で構成されており、近接した時間の中で重複している。炉跡が検出された住居跡は、4・94号住居跡であり、若干の掘り込みをもつ地床炉で、住居跡の中央から西・南側にずれているのが特徴である。土壙では85号土壙のロームマウンドを有するものを除くと、貯蔵用としての性格が強く、83・95号土壙では、多量の一括・完形土器が押しつぶされた状態で出土している。集石遺構は、大

きく分けて2つのグループになり、直径10~12m前後となる環状を示しており、外周の集石造構が7~10基とみられる。とくに中央の中心部に1基のみとめられる場合と、複数の集石造構が小環状を示す場合とがある。長野県原村阿久遺跡の立石を用いた集石造構群とは異なっており、集落跡内における場所的な差異もみられる。

## (2) 遺物について

出土した土器は、第I群土器から第VII群土器まで大きく分け、さらに描出された文様や施文技法によってさらに分類した。第V~VII群土器は、第I~IV群土器の時期に該当する体部・底辺部の土器である。第I・II群土器は、半截竹管や竹管を施文具として、格子目状沈線や結節沈線あるいは刺突を施し文様を描出しておらず、この一群は北陸・中部系の土器群であり、大木7a・7b式と係わっており、広義に大木7式に相当する。第III群土器は撚糸圧痕文を主要な文様要素としており、大木7b式に比定される。第IV群土器は隆線・沈線を主体として文様を構成する一群で、大木8a式に比定される。また、本遺跡でみられる第I・II群土器は、住居跡や土壤などの覆土より破片として、第II・III群土器と混在して出土しているため、時間差として明確に判断できにくく、今後の新らたな資料をまつて検討を加えるものである。

このような他地域からの流入する土器の事象は、小国町増岡地内にある墓窓・下野・蟹沢遺跡との比較によっても明らかで、墓窓遺跡では大木1式期に關東の黒浜式が、大木7b式期に北陸の新崎式他や中部系の梨久保式がそれぞれ共存し、蟹沢遺跡では後期初頭の三十稻葉式が多量に出土している。下野遺跡では、大木9~10式期に相当する複式炉を伴う住居跡が十数棟発見され、この時期になると北陸系や中部系などの土器群の流入する現象は認められず、この地域は最上川流域の遺跡群とは異なる土器型式の様相が把握される。

出土した石器は、その大半が礫石器の一群で圧倒的に多く、中でも石皿は磨面に舌状あるいは馬蹄形状に調整されているのが特徴であり、県内でも特異な形態を示し長野県の井戸戻・尖石遺跡出土の石皿に共通している。

### 参考文献

- 森井一也 「井戸戻」 中央公論美術出版社  
江坂輝弘他 1962 「新潟県中魚沼郡津川町上野遺跡発掘調査報告書」 津川町教育委員会  
中村孝三郎 1973 「千石石原」 長岡市立博物館  
中島栄一他 1974 「吉野原遺跡」 新潟県立三条農業高等学校社会科クラブ 調査報告第5号  
益岡博他 1974 「長峰遺跡発掘調査報告書」 新潟県立須坂農業高等学校  
小島俊郎 1974 「北陸の進化時代中の福島一戦後の研究史と現状」 「大堀第5号」  
神保孝造他 1977 「富山県砺波市蘆原寺遺跡緊急調査摘要」 富山県教育委員会  
阿部明彦他 1975 「上山市牧野遺跡」 上山市教育委員会  
\* 1981 「下野遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会  
渡辺透太郎 1980 「小国町蟹沢遺跡発掘調査報告書」 小国町教育委員会  
会田久一郎 1980 「上山市恩田B遺跡発掘調査報告書」 上山市教育委員会  
家田順一郎 1980 「中道遺跡」 上野丘林地緑化文化財発掘調査報告書 安田町教育委員会  
土肥孝 1981 「阿玉台 Ia 式以前の土器—5個白式と阿玉台式の関」 「土器考古学」  
篠沢清松 1981 「阿久遺跡—長野県中央造り盛文化財発掘調査報告書—原村その5—」 長野県教育委員会  
佐藤正俊他 1982 「基礎新設調査報告書」 山形県教育委員会  
石川県立郷土資料館 1975 「北陸の織文化」  
新潟県美術博物館 1979 「火塘型土器」



道路遠景(西から)

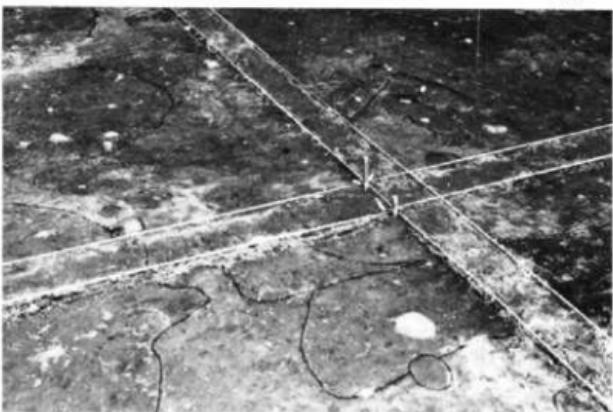


道路近景(南から)

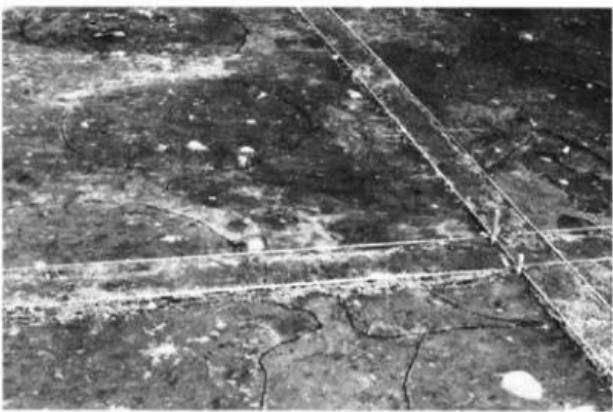


道路近景(東から)





A地区遺構確認状況(1)



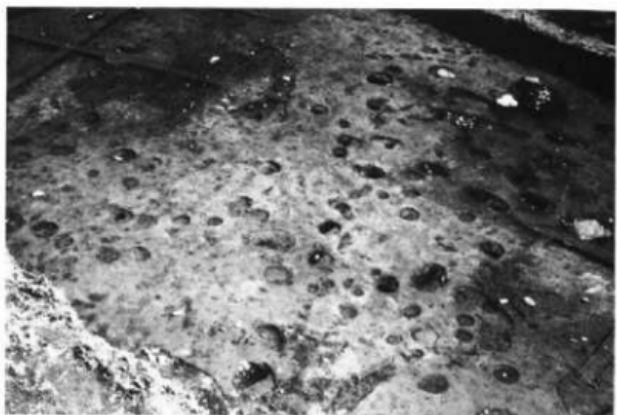
A地区遺構確認状況(2)



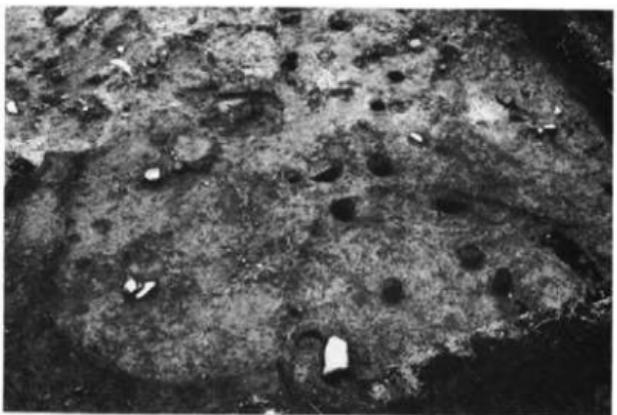
B地区調査風景



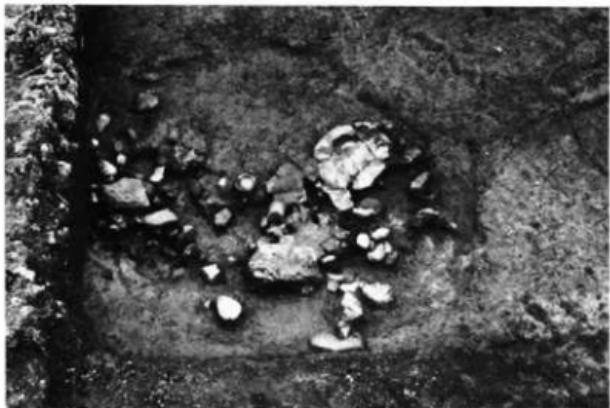
ST 81-84-85-SK 85-86-87全景



ST 88-94-95全景



ST 88-90-92全景



SK83全景



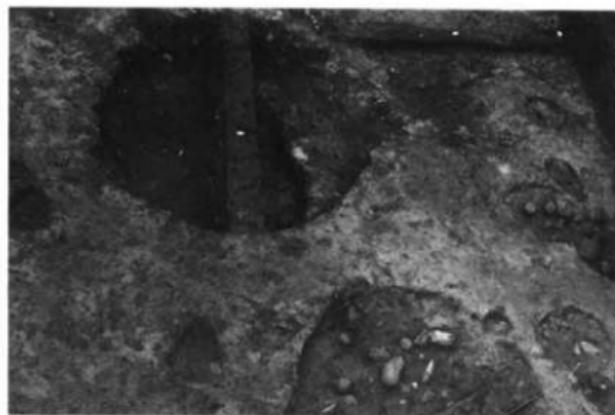
RP 18・31～33出土状況(1)



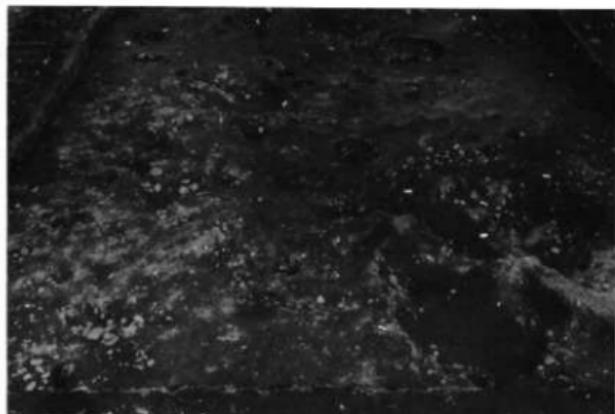
RP 18・31～33出土状況(2)



C 地区調査風景



SK 1・2 全景



ST 10・12 全景

D地区調査風景

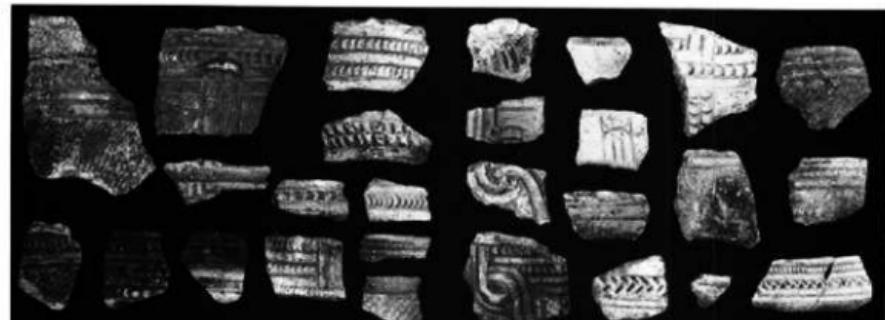


D地区全景



SM215-216全景





第Ⅰ群1・2類土器

第Ⅰ群1・2・4・8・9類土器



第Ⅰ群2・3・7類土器

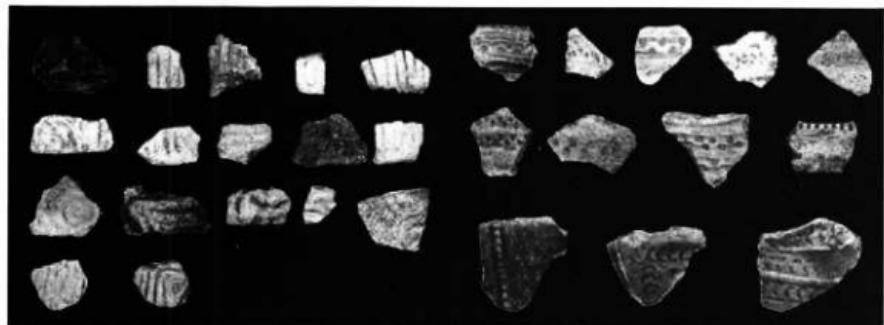
第Ⅰ群2・5・6類土器



第Ⅰ群1類土器

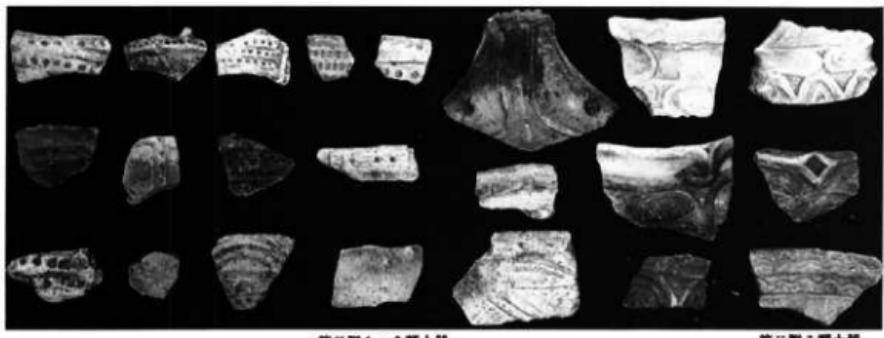
第Ⅰ群10・11類土器

出土土器(1)



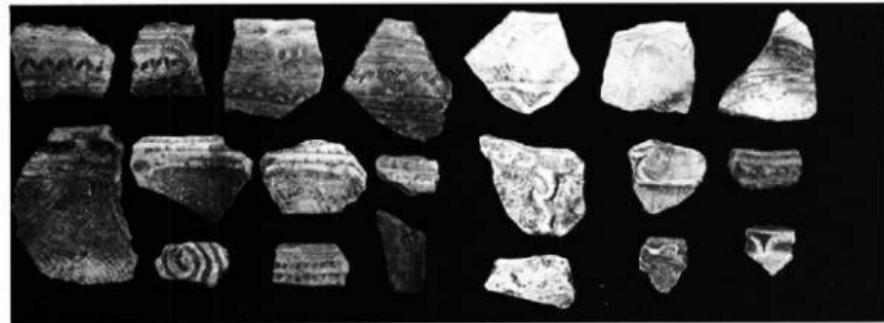
第Ⅰ群 1・10・11類土器

第Ⅱ群 5・6類・第Ⅲ群 1類土器



第Ⅱ群 1・2類土器

第Ⅲ群 7類土器



第Ⅱ群 3・4類土器

第Ⅲ群 6・7・8類土器

出土土器(2)



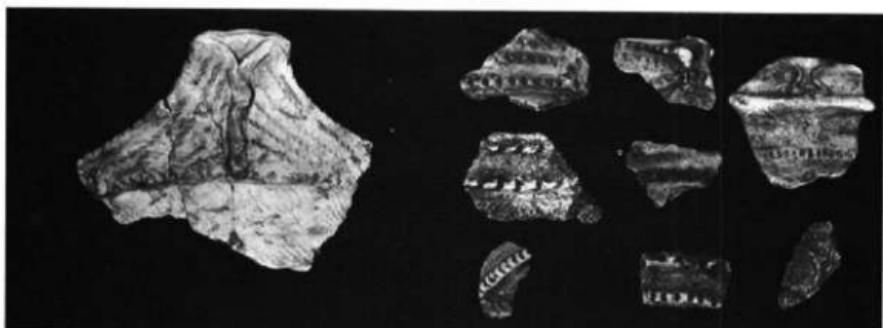
第二群 9 類・第IV群 1 類土器

第三群 2 類土器



第二群 9 類・第三群 3 類土器

第三群 1 類土器



第三群 2 類土器

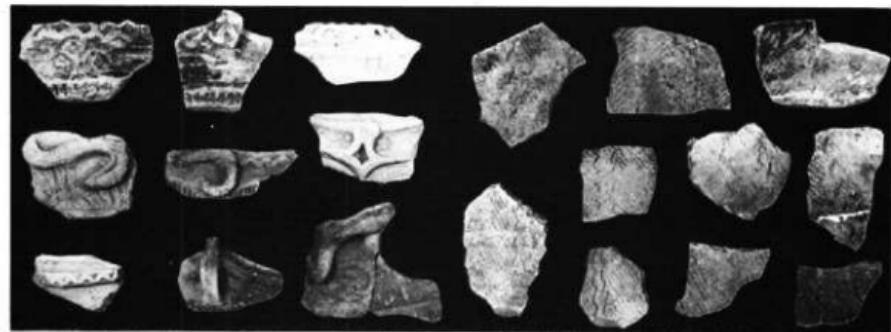
第三群 4 類・第IV群 1 類土器

出土土器(3)



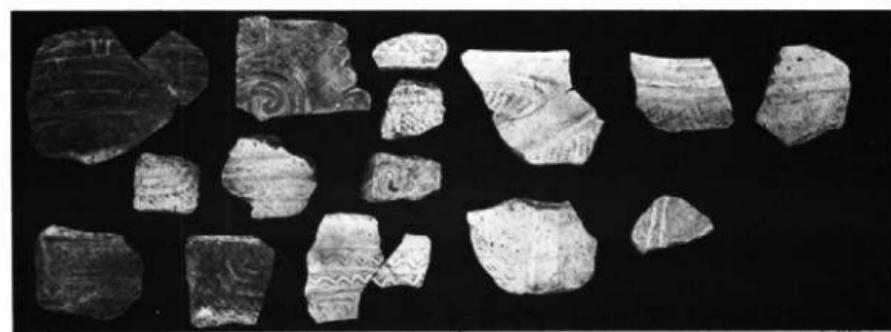
第IV群1類土器

第IV群1類土器



第III群5類・第IV群1・2・3類土器

第V群2類土器



第VI群4・5類土器

第VI群土器

出土土器(4)



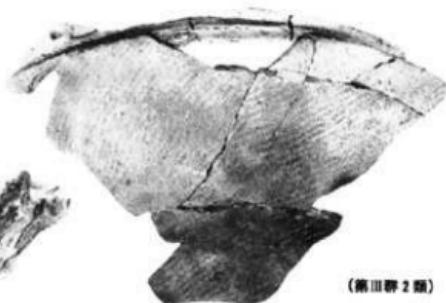
(第Ⅰ群1類)



(第Ⅳ群1類)



(第Ⅰ群5類)



(第Ⅲ群2類)



(第Ⅲ群2類)



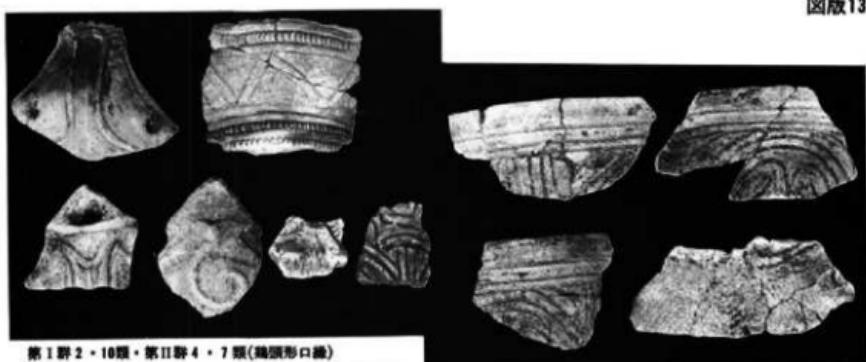
(第Ⅱ群7類)



(第Ⅴ群2類)

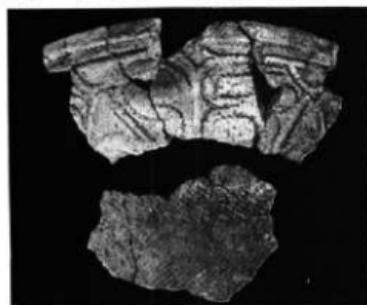


(第Ⅱ群9類)



第一群 2・10類 第二群 4・7類(雞頭形口縫)

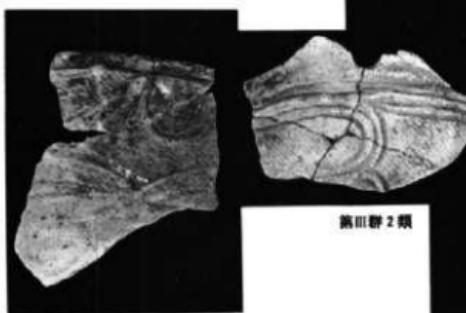
第三群 2類



第三群 2類



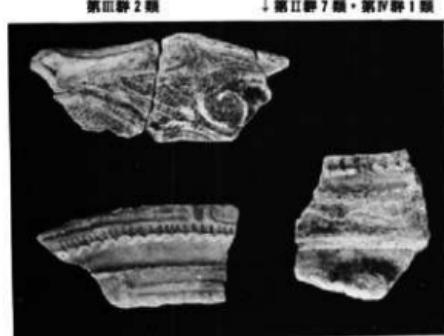
第三群 7類・第四群 1類



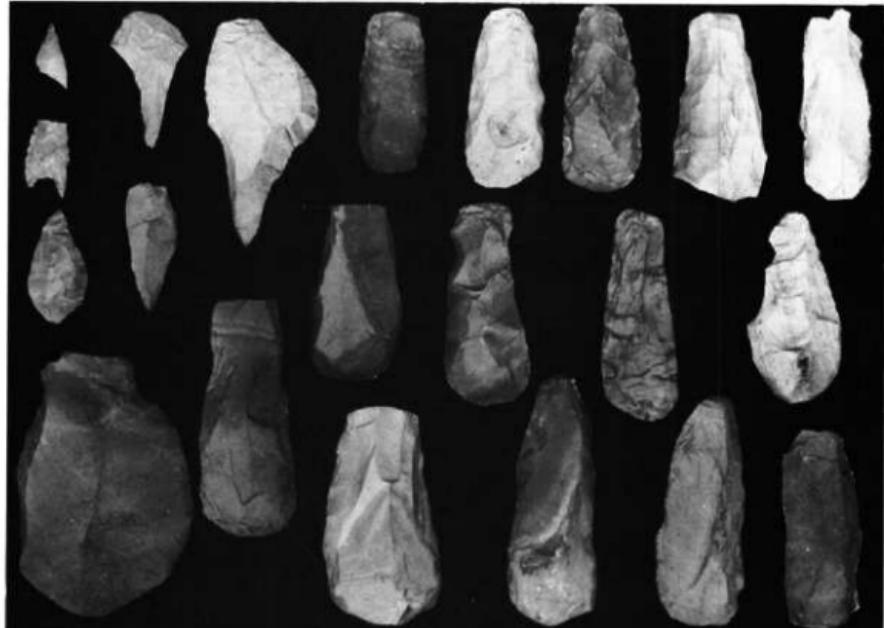
第三群 2類



第四群 1類



↓第二群 7類・第三群 1類

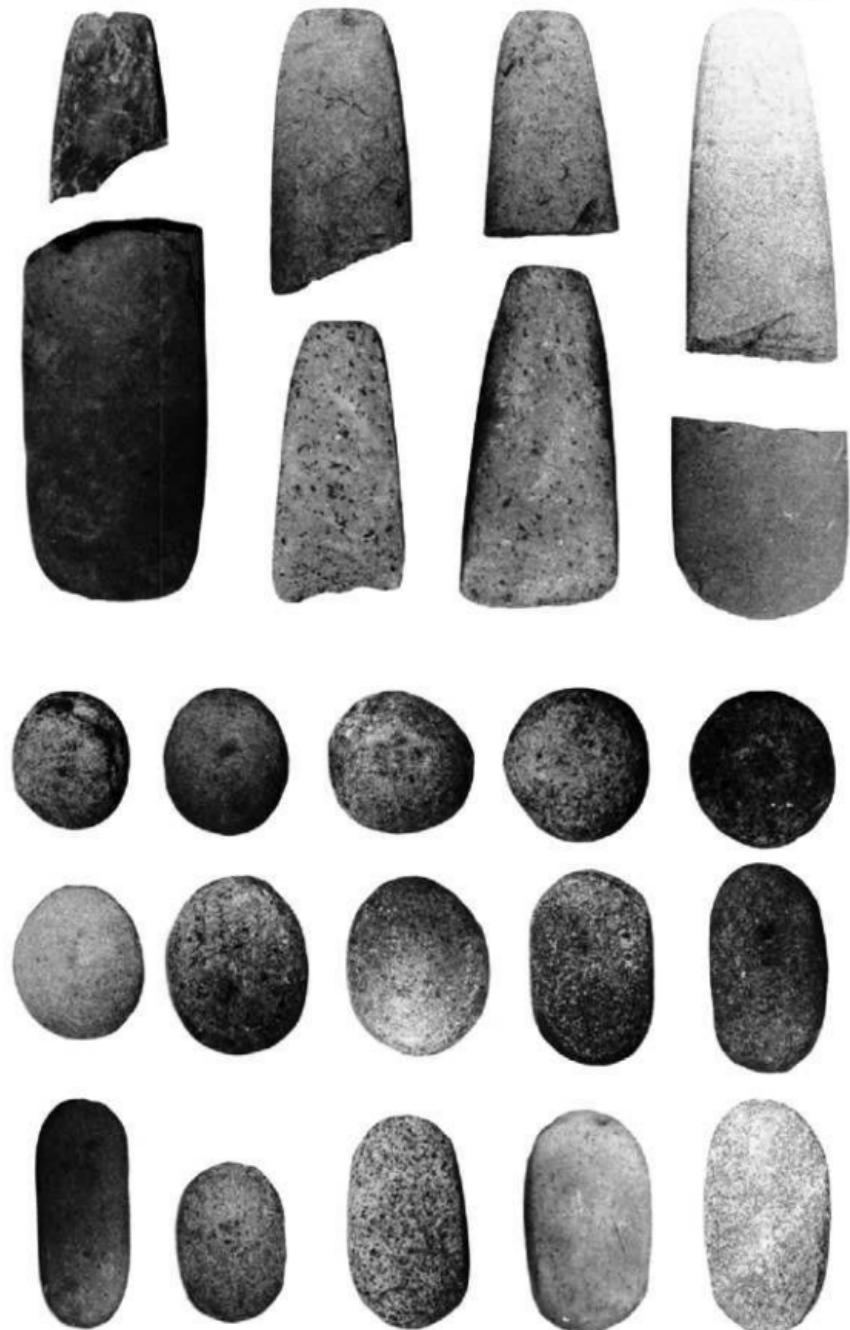


石錐・石槍・石錐・石匙・葉状石器



出土石器(1)

葉状石器・搔器・削器



磨製石斧・磨石・凹石  
出土石器(2)



出土石器(3)

石棒·石皿

## (2) 後 原 遺 跡

### 調査体制

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）

現場主任 名和達朗（山形県教育庁文化課技師）

調査員 大類 誠（山形県教育庁文化課嘱託）

調査協力 村山市教育委員会 県村山平野土地改良事務所

事務局 事務局長 山田信一（山形県教育庁文化課長）

事務局長補佐 萩野和夫（山形県教育庁文化課長補佐）

事務局員 設楽周一郎（山形県教育庁文化課主事）

# 目 次

I 調査の経緯.....	71
II 遺跡の概要.....	72
III 遺構.....	74
IV 遺跡.....	77
V まとめ.....	78

# 挿図目次

第1図 後原遺跡（後原・船橋地区）位置図.....	71
第2図 土層断面図.....	72
第3図 後原地区全体図.....	73
第4図 船橋地区全体図.....	73
第5図 遺構（1）.....	75
第6図 遺構（2）.....	76
第7図 遺構（3）.....	77
第8図 出土土器・古銭.....	78

# 図版目次

図版1 後原地区調査状況	船橋地区調査状況.....	79
図版2 後原地区遺構全景	後原地区円墳全景.....	80
図版3 船橋地区調査区全景	船橋地区遺構全景.....	81
図版4 出土土器（後原地区）	出土土器（船橋地区）.....	82

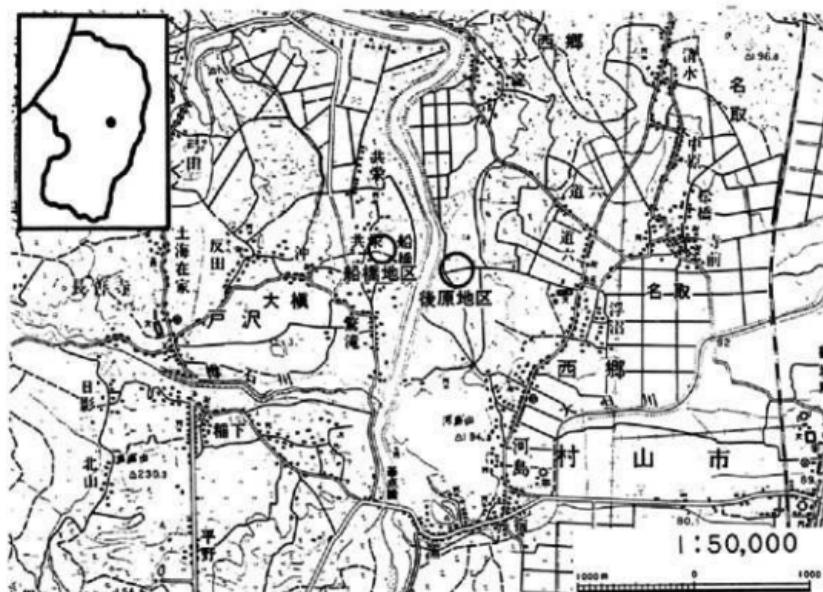
## I 調査の経緯

中央部を最上川が縦走する北村山地区一帯は、数多くの埋蔵文化財包藏地（以下遺跡と呼ぶ）が分布しており、これまでにも何回となく調査が行なわれている。

ここに広域営農団地農道整備事業・北村山地区が計画されるため、山形県教育委員会が主体となり、昭和53年9月18日～10月5日まで遺跡の分布調査が行なわれた。調査の結果、対象地域に88ヶ所の遺跡が発見され、本遺跡もその時確認されたものである。

昭和54年度からこの地区に対して工事が着手することになり、県教委では先の分布調査結果に基づき、昭和54年9月、村山平野土地改良事務所・村山市教育委員会の関係機関と協議を行なった。その結果、昭和54年10月1日から緊急発掘調査を実施することが確認された。

調査は、後原と船橋の2地区に分けて行ない、10月1日から11月2日までの期間である。路線幅に沿ってそれぞれ $2 \times 2$ mのグリッドを設定し、東西方向をX軸・南北方向をY軸と決定し、順次粗掘り・精査を加えた後、最終的な記録及び写真を撮影した。（第3・4図）



第1図 後原遺跡(後原・船橋地区)位置図

## II 遺跡の概要

北村山地区の最上川流域には、河岸段丘が発達し先史～歴史時代の多くの遺跡が分布する。本遺跡もその段丘上に立地し、標高88～90m、河島山北部から約1.5kmの距離を測る。最上川をはさんで、右岸を後原地区、左岸を船橋地区と便宜上区分する。(第1図)

後原地区は、村山市大字名取字後原に所在し、段丘縁辺部から東側の山麓部までの範囲をもち、主に畑地から縄文土器・石器・土師器・須恵器等が採集される。また、地元の人からの聞き込みにより周辺の分布調査を行なった結果、約100m北側に周溝をめぐらす塚上の土盛りがみとめられ、略測したところ直径約35m・高さ3.4m・周溝幅2mを測る。北側が一部崩れて不明であるが、二段構築の円墳を推定するものであることが判明した。(図版2)さらにこのすぐ南側には、方形の土壇上に位置する板碑が、また調査区南側の山頂付近には、直径約10mの塚上の土盛りがそれぞれ確認された。

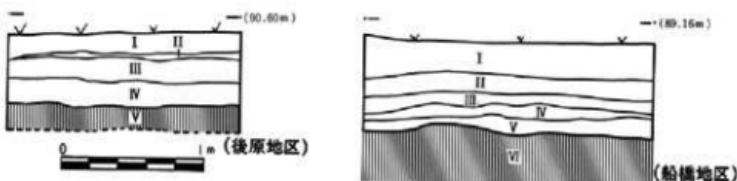
本地区の基本層序は5層に分けられ、I層—暗褐色土、II層—黒褐色粘質土、III層—明褐色土、IV層—黒褐色土、V層—茶褐色粘土である。I・II層は粘土混じりの二次堆積土で、主に水田の近くにのみみとめられることから、以前の水田基盤整備時の盛土と考えられる。IV層は遺物包含層で、V層は遺構確認面である。(第2図)

遺構・遺物は全体に少なく、70～75—9～12Gに若干みとめられるのみである。

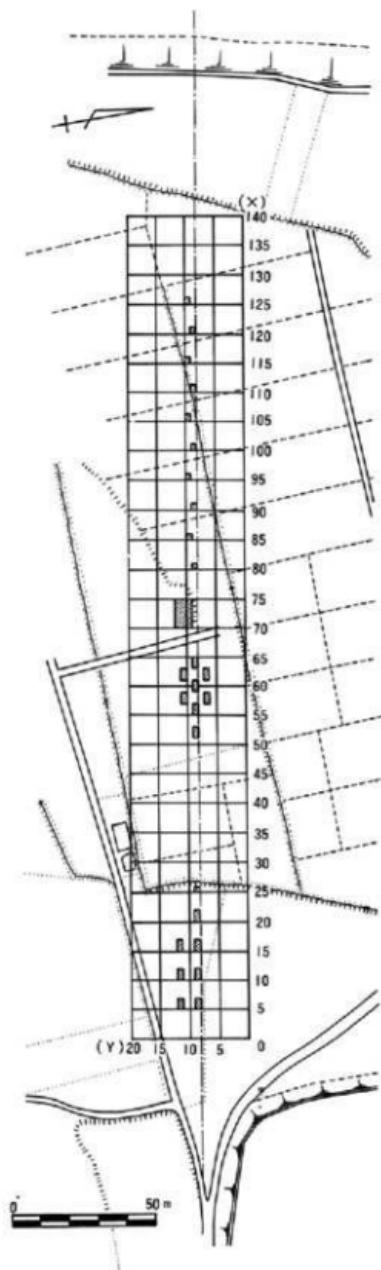
船橋地区は、村山市大字大横字船橋に所在し、段丘面の緩斜面上に立地する。地目は畑地で、大半が桑畠である。すぐ北側は小河川により入り組んでおり、その対岸の台地は袋遺跡(No596)が立地する。また、段丘下側の微高地には、川口A(No599)・棚子(No598)遺跡等の縄文及び歴史時代の遺跡が確認されている。

基本層序は、I層—茶褐色土(耕作土)、II層—茶褐色土、III層—黒褐色土、IV層—濁黒褐色土、V層—濁黄褐色土、VI層—黄褐色粘土である。III層は遺物包含層で、VI層は遺構確認面である。(第2図)

遺構・遺物は全体に少なく、調査区東側39～45—8～13Gにみとめられるのみである。



第2図 土層断面図



第3図 後原地区全体図



第4図 船橋地区全体図

### III 遺構

#### 後原地区（第5図 図版2）

1号ピット 72-11Gに位置する。直径40cm・深さ15cmを測り、直線的に掘り込んでいる。覆土は黒褐色土でやわらかい。

2号溝跡 71-9~75-11Gに位置し、北東方向に走る。断面観察の結果、I層下部から掘り込まれており、新しい時期のものと思われる。覆土は4つに分けられ、粘土混じりでやわらかい。幅1.1m・深さ50cmを測る。底面は若干の起伏を呈するが、ほぼ平坦である。

3号土壙 73-9Gに位置する。グリッド壁際に検出され断面観察の結果、I層下部から掘り込んでおり、新しい時期のものである。底面は土壙状に凹んでいるが、北側は平坦にのびておらず、全体については不明である。覆土は4つに分けられ、粘土ブロックを含み、全体にやわらかい。深さは1.06m・確認面での直径90cmを測る。

4号土壙 75-10G, SD 2北側に位置する。直径84cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物は、みとめられない。

#### 船橋地区（第6・7図 図版3）

1号落ち込み 41-9Gに位置する。不整形を呈する溝状の落ち込みで、幅1.1m・深さ20cmを測る。底面もピット状の凹みを呈し、一様ではない。

2号落ち込み 44-13Gに位置する。平面形はSX1に類似する。幅80cm・深さ60cmを測る。底面は凹凸があり、舟底状にくぼんでいる。出土遺物はみとめられない。

3号落ち込み 42-10Gに位置し、SX1と直角に並ぶ。幅1.2m・深さ50cmを測る。壁は北側が袋状、南側が緩やかである。外部西側から木炭に混じり、骨片が出土している。

4号落ち込み 43-9Gに位置し、南北方向にのびる不整形な溝状の落ち込みである。壁は直線的に掘り込まれ、幅60cm・深さ14cmを測る。出土遺物は、みとめられない。

5号土壙 43-10Gに位置し、6号土壙を切っている。楕円形を呈し長径78cm・短径65cm・深さ20cmを測る。覆土内から、縄文時代後期の土器片が出土。

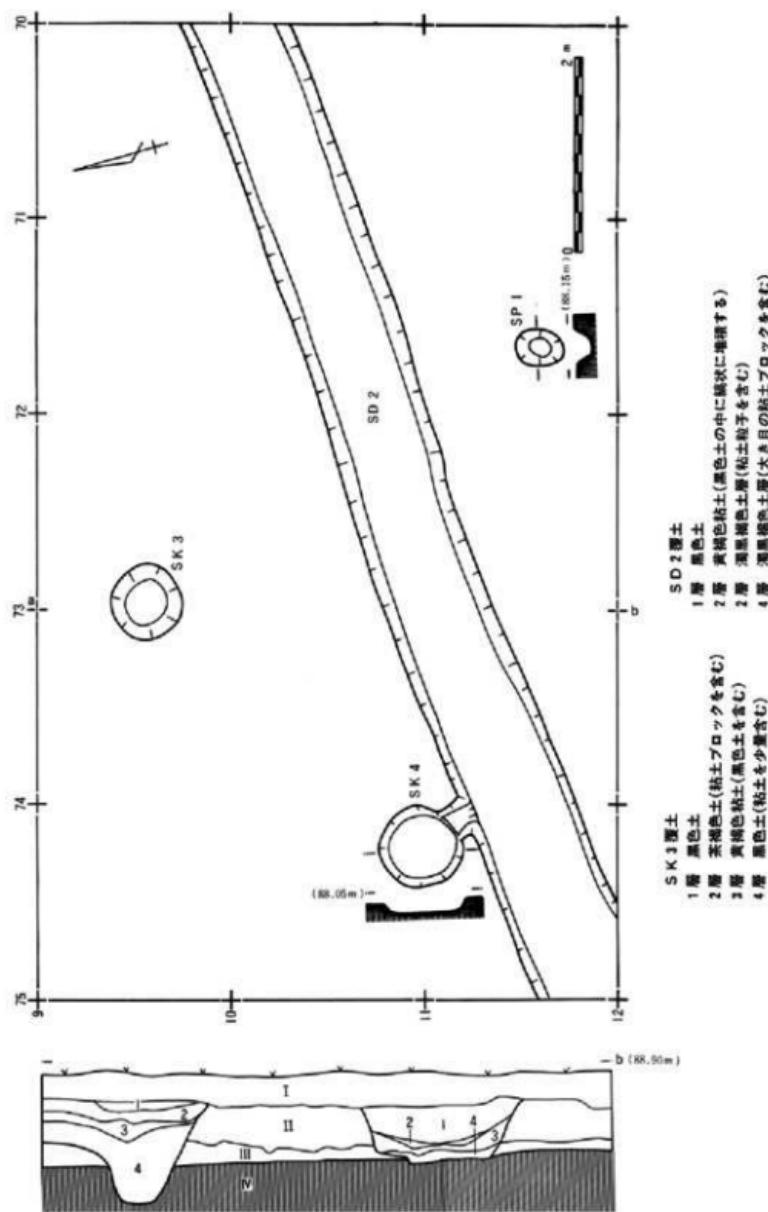
6号土壙 43-10Gに位置し、北側がSK5と重複する。不整楕円形を呈し、長径60cm・短径40cm・深さ10cmを測る。

7号土壙 43-10Gに位置する。楕円形を呈し長径80cm・短径70cm・深さ15cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。

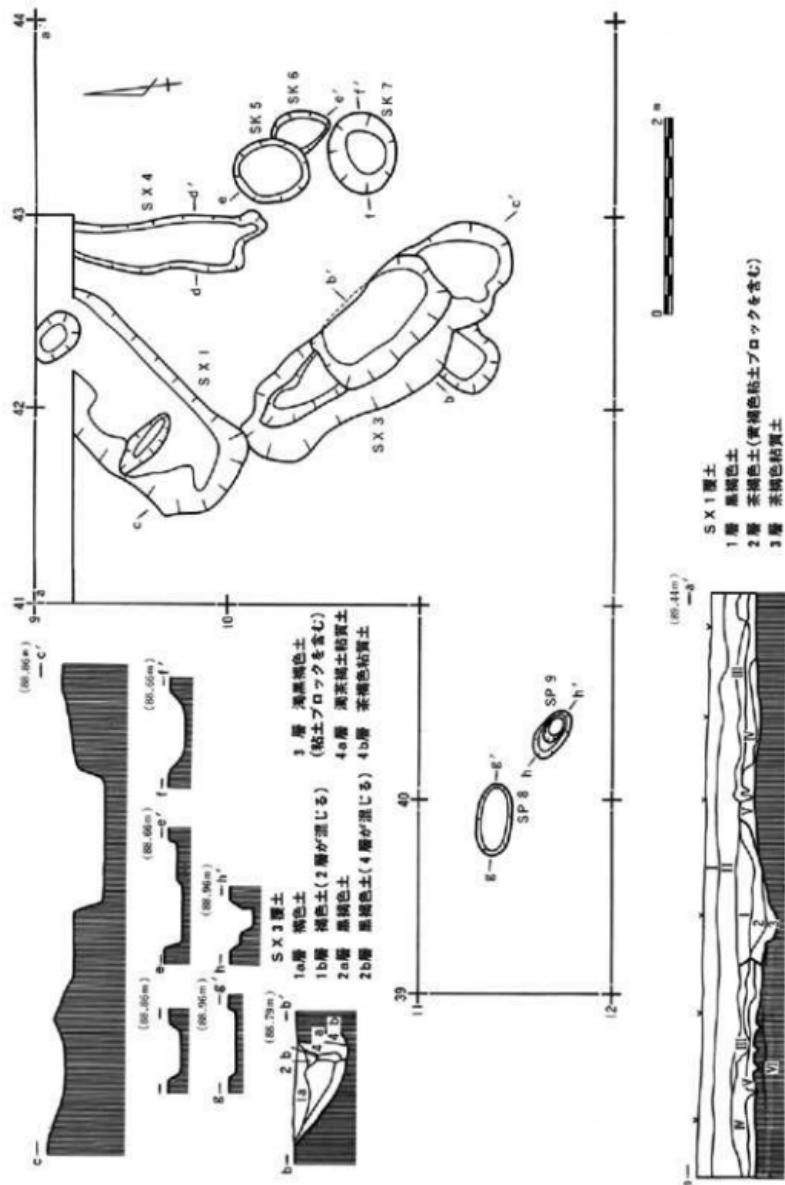
8号ピット 39-11Gに位置する。楕円形で長径74cm・短径36cm・深さ7cmを測る。

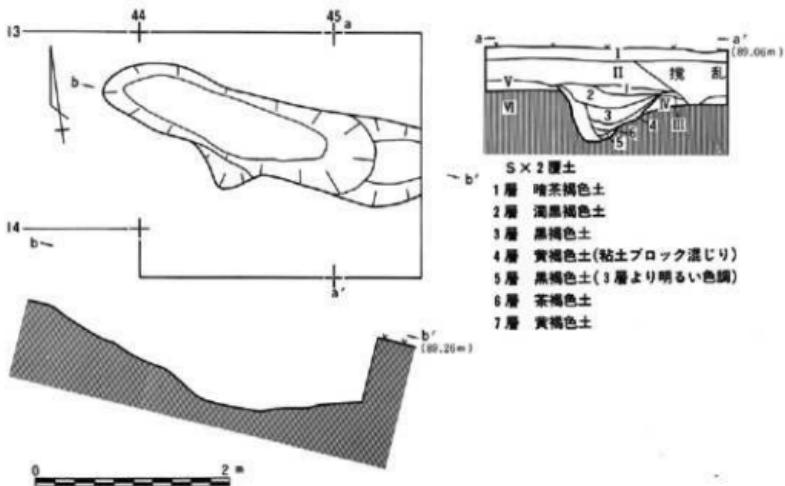
9号ピット 40-11Gに位置する。楕円形で長径55cm・短径28cm・深さ26cmを測る。

第5図 造構(1)



第6図 遺構(2)





第7図 遺構(3)

## IV 遺 物

### 後原地区 (第8図1~7 図版4)

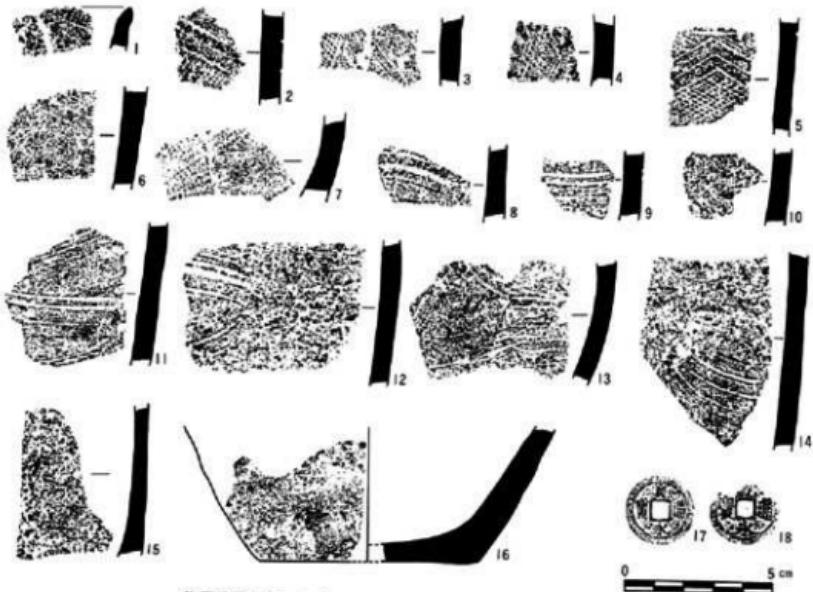
全体的に出土遺物は、稀少である。大半が71-9・10G付近に集中し、全て小片である。主にIV層の面精査中に確認され、一部はSD2覆土内に混入している。

1~6は深鉢の同一個体と思われる。全体については不明であるが、横に一条の沈線をめぐらしさに細い沈線で山形文を描出し、その外側に沈線を格子目状に入れて幾何学形の区画を形成する(5)。また口縁部は小波状を呈し、格子目文を波状に沿って帯状にめぐらし、その内側は斜位に削がれたように緩い棱を形成する(1)。7は、斜繩文を施した深鉢の体部破片である。

### 船橋地区 (第8図8~18 図版4)

出土遺物は、大半が43-10GⅢ層にまとめられ、同一個体の破片である。体部に流水形に刷毛目文を施す粗製深鉢である(8~16)。

他に、古銭「寛永通寶」が2点出土している。



後原地区出土—1～7  
船橋地区出土—8～18

第8図 出土土器・古銭

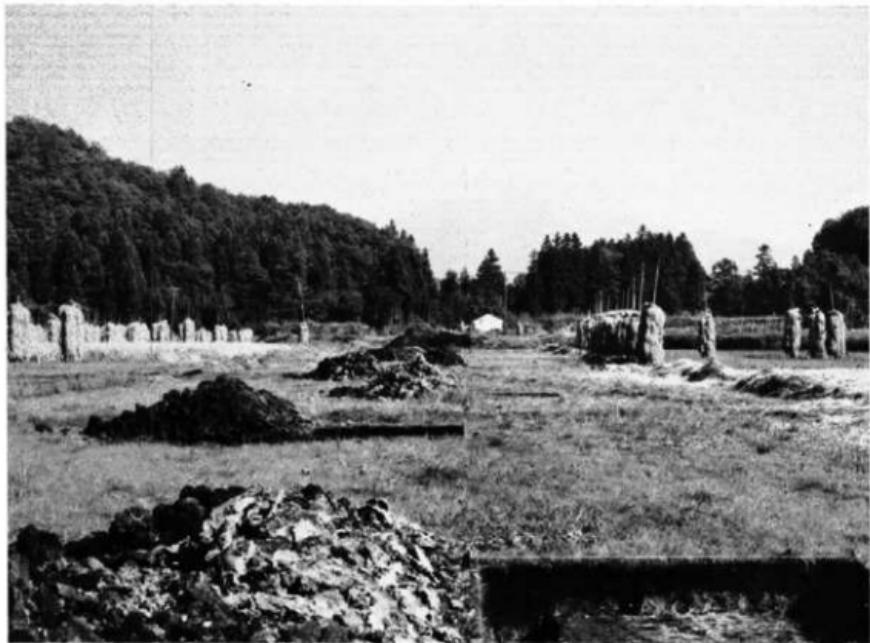
## V まとめ

広域営農団地農道整備事業・北村山地区にかかる後原遺跡の2地区について、緊急発掘調査を実施した。調査期間は、昭和54年10月1日～11月2日の延23日間である。調査区域は、農道路線内に限定し、発掘面積は両地区合わせて116m<sup>2</sup>である。

調査の結果は、以下の通りである。

後原地区は、出土遺構・遺物とも少なくほとんど西端の畠地に集中している。遺構では、土壙2基・溝跡1基・ピット1基が検出されたが、全体にやわらかく、粘土混りの覆土の特徴から後世の新しい時期のものと思われる。遺物では、格子目文様をもつ土器から縄文時代早期三戸式に併行すると思われる。だが沈線自体が細く・浅く施されており、縄文時代後期中葉の可能性も考えられる。他の出土例を、待ちたい。

船橋地区は、遺構では溝状の落ち込み4基、土壙3基、ピット2基が検出されたが、性格については不明である。遺物は土器文様から、縄文時代後期のものと考えられる。



後原地区調査状況



船橋地区調査状況



後原地区塚構全景



後原地区円墳全景



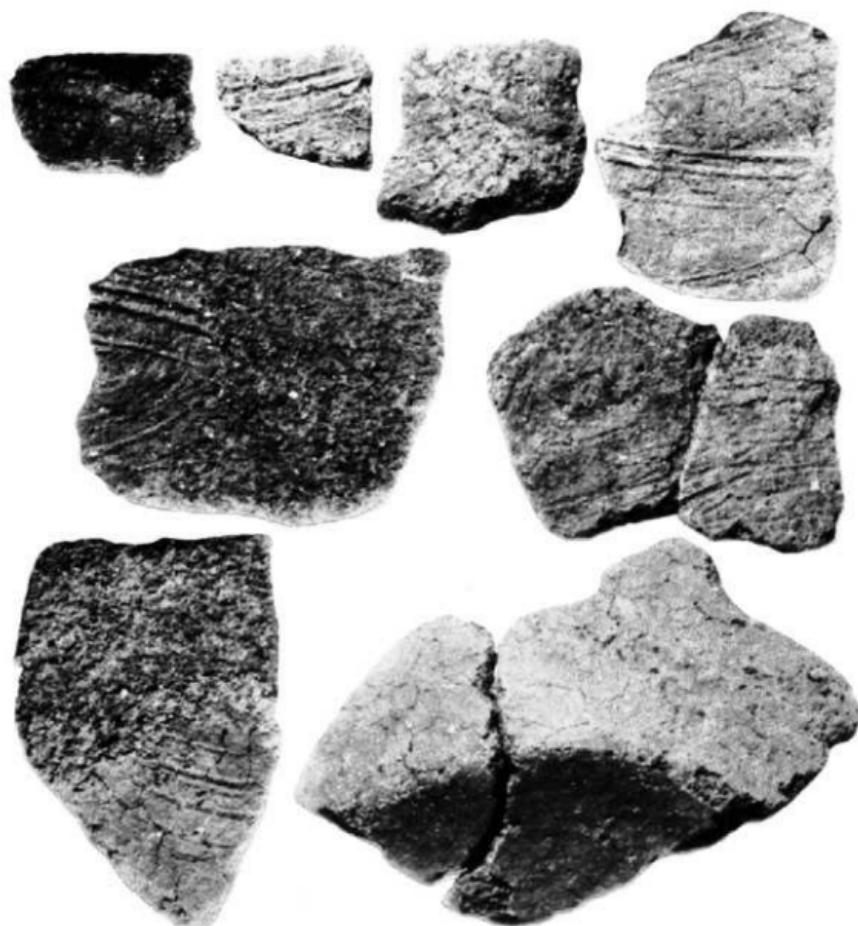
船橋地區調查區全景



船橋地區遺跡全景



出土土器(後原地区)



出土土器(船橋地区)

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第 53 集

## 農林事業関係遺跡（1）

谷地遺跡  
後原遺跡

－発掘調査報告書－

昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 大場印刷株式会社

---